

# ロミオとジュリエット

ROMEO AND JULIET

シェークスピア

William Shakespeare

坪内逍遙 訳

電子書籍化 楓出版

収録 青空文庫

+ 目次

+ 序詞

+ 第一幕

+ 第(だい)一場(ぢやう)

※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。

街上(がいじやう)。

+ 第(だい)二場(ぢやう)

同處(どうしよ)。街上(がいじやう)。

+ 第(だい)三場(ぢやう)

同處(どうしよ)。カピューレットの一

室(しつ)。

+ 第(だい)四場(ぢやう)

同處(どうしよ)。街上(がいじやう)。

+ 第(だい)五場(ぢやう)

同處(どうしよ)。カピューレット邸(て

い)の廣間(ひろま)。

＋第二幕

＋第(だい)一場(じやう) ※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。

カピユーレット邸(てい)の庭園(ていゑん)の石垣(いしがき)に沿(そ)へる小逕(こみち)。

＋第(だい)二場(ぢやう) 同處(どうしょ)。カピユーレット家(け)

の庭園(ていゑん)。

＋第(だい)三場(ぢやう) 同處(どうしょ)。托鉢僧(たくはつそう)

ロレンス法師(ほふし)の庵室(あんじつ)。

＋第(だい)四場(ぢやう) 同處(どうしょ)。街上(がいじやう)。

＋第(だい)五場(ぢやう) 同處(どうしょ)。カピユーレットの庭

園(ていゑん)。

+ 第(だい)六場(ぢやう)  
の庵室(あんじつ)。

同處(どうしょ)。ロレンス法師(ほふし)

+ 第三幕

+ 第(だい)一場(ぢやう)

※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。

街上(がいじやう)。

+ 第(だい)二場(ぢやう)

同處(どうしょ)。カピューレットの庭

園(ていゑん)。

+ 第(だい)三場(ぢやう)

同處(どうしょ)。ロレンス法師(ほふし)

の庵室(あんじつ)。

+ 第(だい)四場(ぢやう)

同處(どうしょ)。カピューレット家(け)

の一室(しつ)。

+ 第(だい)五場(ぢやう) 同處(どうしよ)。カピユレットの庭園(ていゑん)。

+ 第四幕

+ 第(だい)一場(ぢやう) ※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。ロレンス法師(ほふし)の庵室(あんじつ)。

+ 第(だい)二場(ぢやう) 同處(どうしよ)。カピユレット邸(てい)の一室(しつ)。

+ 第(だい)三場(ぢやう) 同處(どうしよ)。ヂュリエットの居間(ゐま)。

+ 第(だい)四場(ぢやう) 同處(どうしよ)。カピユレット邸(てい)の廣間(ひろま)。

+ 第(だい)五場(ぢやう) 同處(どうしょ)。ヂュリエットの居間(ゐま)。

+ 第五幕

+ 第(だい)一場(ぢやう) マンチュア。街上(がいじやう)。

+ 第(だい)二場(ぢやう) ※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。

ロレンス法師(ほふし)の庵室(あんじつ)。

+ 第(だい)三場(ぢやう) 同處(どうしょ)。墓場(はかば)。(此

裡(このうち)にカピユレット家(け)代々(だい／＼)の廟所(べうしょ)ある體(てい)。深夜(しんや)。

## 登場人名

エスカラス、※（濁点付き片仮名エ、1-7-84）ローナの領主。

パリリス、領主の親族、年若き貴公子。

キャピューレット」

下相確執せる二名族の長者。

モンタギュー　　」

キャピューレットが一族の一老人（叔父）。

ローミオー、モンタギューの息。

マーキユーシオー、領主の親族にしてローミオーの友。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオー、モンタギューの甥にし

てローミオーの友。

チツバルト、キャピューレットが妻の甥。

ロレンス法師、フランシス派の僧。

デヨン、同じ派の僧。

バルターザー、ローミオーの下人。

サンプソン（或ひはサムソン）」

「キャピューレット家の下人。

グレゴリー

ピーター、デユリエットが乳母の下人。

エーブラハム、モンタギューの下人。

薬種屋の老人。



樂人甲、乙、丙。

パリスの侍童（こしやう）。他の侍童（こしやう）。警吏一人。  
モンタギュー夫人、モンタギューの妻。

キャピューレット夫人、キャピューレットの妻。

デューリエット、キャピューレットの女。

デューリエットの乳母。

其他※（濁点付き片仮名エ、エー・エー）ローナの市民。兩家の親族。假裝

舞踏者、門衛、

番衆、侍者等。

序詞役。

場所 ※（濁点付き片仮名エ、1-7-84）ローナ。マンチュア。

（本文は、譯詞との釣合ひ上、固有名詞の發音に手、心を加へたる部分あり。但し爰に録したるものが最も正しきに近しと知られたし。）

ロミオとジュリエット

## 序詞

序詞役（じよしやく）出（で）る。

序詞役 威權（あけん）相如（あひし）く二名族（めいぞく）が、  
處（ところ）は花（はな）の※（濁点付き片仮名エ、エー）ローナにて、  
古（ふる）き怨恨（うらみ）を又（また）も新（あら）たに、  
血（ち）で血（ち）を洗（あら）ふ市内鬭争（うちわげんくわ）。  
かゝる怨家（ゑんか）の胎内（たいない）より薄運（はくうん）の二情  
人（じやうじん）、

悪縁（あくえん）慘（むご）く破（やぶ）れて身（み）を宿怨（しゆくゑん）と共（とも）に埋（うづ）む。

死（し）の影（かげ）の附纏（つきまと）ふ危（あやふ）き戀（こひ）の履歴（りれき）、

子等（こら）が非業（ひごふ）に果（は）てぬるまでは、

如何（いか）にしても解（と）けかねし親々（おや／＼）の忿（いかり）、  
是（こ）れぞ今（いま）より二時間（じかん）の吾等（われら）が演劇（えんげき）、  
（えんげき）、

御心（みこゝろ）長（なが）く御覽（ごらん）ぜられさふらは、

足（たら）はぬ所（ところ）は相勵（あひはげ）みて償（つぐの）ひ申（まう）さん。

序詞役（じよしやく）入（はひ）る。

## 第一幕

第(だい)一場(ぢやう) ※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。  
街上(がいじやう)。

カピューレット家(け)の下人(げにん) Sampson と Gregorio とが  
劍(けん) と楯(たて) とを持(も) って出(で)る。

サン やい、Gregorio、誓言(せいごん)ぢや、こちとらは石炭(コー  
ル)なんぞは擔(かつ)ぐまいぞよ、假(かり)にも。(不面目な賤し  
い仕事(しごと)なんぞはすまいぞよ)。

グレ さうとも、そんな事(こと)をすりや、奴隸(コーリヤー)

も同然（どうぜん）ぢゃわい。

サン いやさ、俺（おら）が癪（コーラー）に障（さは）るが最後（さいご）、すぐにも引（ひ）っこ抜（ぬ）いてくれようといふんぢゃ。

グレ さうよなア、頸根（くびね）ッ子（こ）は、成（な）ろうなら、頸輪（カラー）（首枷（くびかせ））から引（ひ）っこ抜（ぬ）いてゐるがよいてや。（罪人にはならぬがよいてや）。

サン 俺（おれ）が腹（はら）を立（た）ったとなりや、忽（たちま）ち（敵手（あひて））をば）真一（まっふた）つにしてくれる。

（以下、口合（パンニング）は邦語（はうご）に直譯（ちよくやく）しては通（つう）ぜざれば、意（い）を取（と）りて義譯（ぎやく）す。後段（こうだん）にも斯（か）かる例（れい）しば／＼あるべし。）



グレ　ところが、其（その）立（た）つまでが手間（てま）が取（と）れうて。

サン　何（なん）の、すぐ立（た）つわい、モンタギュー家（け）の飼犬（かひいぬ）を見（み）たゞけでも。

グレ　はて、立（た）つと言（い）へば不動（おすわり）ぢやがや。不動（おすわり）は立往生（たちわうじやう）ぢや。出向（でむか）うて往（ゆ）かけんけりや鬭争（けんくわ）にアならぬわい。

サン　はて、飼犬（いぬ）を見（み）たゞけでも向（むか）うてゆくわい。モンタギューの奴等（やつら）と見（み）りや、男（をとこ）でも女（をんな）でも關（かま）うたことアない。

グレ　へッ、關（かま）はいで放任（ほうう）っておくのがな、それ

が汝（おぬし）の弱蟲（よわむし）の證據（しようこ）ぢや。

サン　したり。そこで、とかく弱蟲（よわむし）の女子（をなご）ばかりが玩弄（かま）はれまするとけつかる。いや、俺（おれ）は、野郎（やらう）をば抛（はふ）り出（だ）し、女郎（めらう）をば制裁（かま）はう。

グレ　鬪戰（たゝきあひ）は、主人衆（だんなしゅ）や吾等（おれたち）男共（をとこども）のすることぢや。

サン　いざ鬪爭（けんくわ）となりや、そんな斟酌（しんしゃく）は要（い）らんこつちや。男共（をとこども）を叩（たゝ）きみじいたら、女共（をんなども）をもやつつけてくれう。

グレ　やつつける？

サン　それ、彼奴等（きゃつら）の「額（はち）」を打破（ぶちわ）つてくれうわい。意味（いみ）は如何様（どのやう）にも取（と）らつせ  
いよ。

グレ　それは先方（あひて）の感（かん）じ次第（しだい）ぢや。

サン　はて、身（み）に沁々（しみ／＼）と感（かん）じようわい、俺（おれ）も随分（ずゐぶん）と評判（ひやうばん）の女（をんな）たらしぢやに依（よ）つて。

グレ　へん、魚（さかな）でなうて幸福（しあはせ）ぢやわい、汝（おぬし）が魚（さかな）なら、女（をんな）たらしでは無（な）うて總菜（そうざい）の鹽大口魚（しほだら）と來（き）てけつからう。……（一方を見て）拔（ぬ）けよ（劍を）、モンタギューの奴等（やつら）が來（き）

たわい。

此時（このとき）モンタギュー家（け）の下人（げにん）、エブラハムとバルターザーとが一方（ほう）へ出（で）る。

サン さ、拔（ぬ）いたわ、鬭争（けんくわ）を買（か）はっせい、尻押（しりおし）をせう。

グレ 何（なん）ぢや！ 尻（しり）に帆（ほ）を掛（か）ける？

サン 心配（しんぱい）すない。

グレ 何（なん）の、汝（おぬし）を！

サン 此方（こち）の非分（ひぶん）にならぬやうに、先方（むかう）から發端（しか）けさせい。

グレ 行違（ゆきちが）ふ途端（とたん）に睨（にら）みつけてくれ

う、如何（どう）思（おも）やがらうと關（かま）ふものかえ。

サン うんにや、如何（どう）爲（し）やがらうと關（かま）ふものかえ。俺（おれ）は指（ゆび）の爪（つめ）を嚙（か）んでくれう、それで黙（だま）ってりや恥（はぢ）さらしぢや。

雙方（さうほう）行違（ゆきちが）ふ。サンプソン指（ゆび）の爪（つめ）を嚙（か）んで見（み）する。

エブラ お手前（てまへ）は吾等（われら）に對（むか）うて指（ゆび）の爪（つめ）を嚙（か）まっしやったな？

サン 如何（いか）にも爪（つめ）を嚙（か）みまする。

エブラ 吾等（われら）に對（むか）うて嚙（か）まっしやるのか？

サン （グレゴリーを顧みて）然（うん）と言（い）うても、理分（り

ぶん) か？

グレ いゝや。

サン (エブラに對ひて) いゝや、足下(おぬし) たちに對(むか)うて嚙(か)みはせんが、嚙(か)む。

グレ こりや鬪争(けんくわ)を賣(う)らっしやるのぢやな？

エブラ 鬪争(けんくわ)！ いや、決(けつ)して。

サン 鬪争(けんくわ)なら敵手(あひて)にならう。汝等(おぬし)たち)には負(ま)けんぞ。

エブラ 勝(か)ちもすまい。

サン むゝ。……

と詰(つま)る。此時(このとき) 上手(かみて) よりモンタギューの

親族（しんぞく）ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオー出（で）  
る。

グレ （サンプルソンに對ひ、小聲にて）勝（か）つわいと言（い）はっ  
せい。（下手を見やりて）あそこへ殿（どの）の親族（しんぞく）の一人（ひと  
り）が來（わ）せた。

サン うんにゃ、勝（か）つわい。

エブラ ※（「言十墟のつくり」、第4水準2-88-74）（うそ）を吐（つ）  
け。

サン 拔（ぬ）け、男（をとこ）なら。グレゴリー、えいか、頼（た  
の）むぞよ、しつかり。

サンプルソンとエブラハムと劍（けん）を拔（ぬ）いて戦（たゝか）ふ。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ーリオー此(この)體(てい)を見(み)て駈(か)け來(きた)り、劍(けん)を拔(ぬ)き、割(わ)って入(はひ)る。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 待(ま)った／＼！ 藏(をさ)めい劍(けん)を。こゝな向(む)かふ見(み)ない(むかひみず)が。

カピューレット長者(ちやうじゃ)の甥(をひ) チツバルト下手(しも)て(より)出(で)る。

チツバ やア、下司(げす) 下郎(げらう)を敵手(あひて)にして汝(おぬし)は劍(けん)を拔(ぬ)かうでな？ ベン※(濁点付き片仮名ヲ、

1-7-85)ーリオー、こちを向(む)け、命(いのち)を取(と)ってくれう。

と劍(けん)を拔(ぬ)く。



ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) いや、これは和睦(わぼく)させうためにしたことぢや。劍(けん)を藏(をさ)めい、でなくば、其(その)劍(けん)を以(もつ)て予(わし)と共(とも)に、こいつらを引分(ひきわ)けておくりやれ。

チツバ 何(なん)ぢや、拔(ぬ)いてゐながら、和睦(わぼく)ぢや！  
和睦(わぼく)といふ語(ことば)は大嫌(だいきら)ひぢや、地獄(ぢごく)ほどに、モンタギューの奴等(やつら)ほどに、汝(うぬ)ほどにぢや。卑怯者(ひけふもの)め、覺悟(かくご)せい！

突(つ)いてかゝる。ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ーリオー餘義(よぎ)なく敵手(あひて)になる。此(この)途端(とたん)、兩家(りやうけ)の關係者(くわんけいじや)、双方(さうほう)より出(い)で來(き

たり、入亂（いりみだ）れて鬪（たゝか）ふ。市民（しみん）及（およ）び警吏長等（けいりちやうら）棍棒（クラブ）を携（たづさ）へて出（い）で來（きた）る。

警吏長 棍棒組（こんぼうぐみ）よ、戟組（ほこぐみ）よ！ 打（う）て／＼！ 打据（うちす）ゑいカピューレットを！ モンタギューを打据（うちす）ゑい！

カピューレット長者（ちやうじゃ）寢衣（ねまき）のまゝにて、其（その）妻（つま）カピューレット夫人（ふじん）はそれを止（とど）めつゝ、出（で）る。

カピ長 此（この）騒動（さわぎ）は何事（なにごと）ぢや？ やア／＼、予（よ）が長（なが）い劍（けん）を持（も）て、長（なが）い劍

(けん)を。

カピ妻 杖(つゑ)をば、杖(つゑ)をば！ 何(なん)の爲(ため)に長(なが)い劍(けん)を？

カピ長 えい、劍(けん)ぢやといふに。見(み)いあれを、モンタギューの長者(ちやうじゃ)めが來(き)をつて、俺(おれ)に見(み)よがしに刃(やいば)を揮(ふ)りをる。

モンタギュー長者(ちやうじゃ)白刃(しらは)を堤(さ)げ、其(その)妻(つま)モンタギュー夫人(ふじん)それを止(とど)めつゝ、出(で)る。

モン長 おのれ、カピユーレットめ！……とめるな、放(はな)せ。

モン妻 鬪(たゝか)はう爲(ため)になら、一步(ひとあし)でも出

(だ) させますな。

領主(りやうしゆ)の公爵(こうしやく) エスカラス、從者(じゆうしや) 多勢(おほぜい)を引連(ひきつ)れて出(で)る。

領主 やア、平和(へいわ)を亂(みだ)す暴人(ばうじん)ども、  
同胞(どうぼう)の血(ち)を以(もつ)て刃金(はがね)を穢(けが)  
す不埒奴(ふらちやつ)……聽(き)きをらぬな?……やア、汝等  
(おのれら)、邪(よこし)まなる嗔恚(しんに)の炎(ほのほ)を己(お  
の)が血管(けつくわん)より流(なが)れ出(いづ)る紫(むらさき)  
の泉(いづみ)を以(もつ)て消(け)さうと試(こゝろ)むる獸類(け  
だもの)ども、嚴罰(げんばつ)を怖(おそ)るゝならば、其(その)  
血腥(ちなまぐさ)い手(て)から兇暴(きようぼう)の劍(けん)を

抛（なげう）ち、怒（いか）れる領主（りやうしゆ）が宣言（ことば）を聽（き）け。カピューレットよ、モンタギューよ、汝等（なんぢら）二人（にん）の由（よし）も無（な）き爭論（あらしひ）が原（もと）となつて、同胞（どうぼう）の鬪諍（とうぢよう）既（すで）に三度（みたび）に及（およ）び、市内（しない）の騷擾（さうぜう）一方（ひと）かた）ならぬによつて、當（たう）※（濁点付き片仮名エ、1-7-84）ローナの故老共（こうらうども）、其身（そのみ）にふさはしき老實（らうじつ）の飾（かざり）を脱棄（ぬぎす）て、何（なん）十年（ねん）と用（もち）ひざりしたため、古（ふる）び錆（さ）びつゝいたる戟共（ほこども）を同（おなじく）年老（としお）いたる手々（てんで）に把（と）り、汝等（なんぢら）が心（こゝろ）に錆（さ）びつきし意趣（いしゆ）の中裁（ちゆう

さい)に力(ちから)を費(つひや)す。爾後(じご)再(ふたゝ)び  
公安(こうあん)を亂(みだ)るに於(おい)ては汝等(なんぢら)が  
命(いのち)は無(な)いぞよ。今日(こんにち)は餘(よ)の者共(も  
のども)は皆(みな)立退(たちさ)れ、カピューレットは予(よ)に  
從(したが)ひ參(まゐ)れ。モンタギュー、其方(そち)は、此(この)  
午後(ひるご)に、尚(な)ほ申(まう)し聞(き)かすこともあれば、  
裁判所(さいばんしょ)フリータウンへ參向(さんかう)せい。更(あ  
らた)めて申(まう)すぞ、命(いのち)が惜(を)しくば、皆(みな)  
立退(たちさ)れ。

モンタギュー夫婦(ふうふう)とベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ー  
リオーだけ殘(のこ)りて皆(みな)入(はひ)る。

モン長 此(この) 舊(ふる) い争端(さうたん) をば何者(なにもの) が新(あたらし) ふう發(ひら) きをつたか? 甥(をひ) よ、おぬしは 最初(はじめ) から傍(そば) にゐたか?

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) いや、私(わたくし) が參(まゐ) った頃(ころ) には、敵(てき) の下人(げにん) と御家來衆(ごけらい しゅ) とがもう既(すで) に戰(たゝか) うてをりました。それを引分(ひ きわ) けうとて拔劍(ぬ) きましたる途端(とたん) に、彼(あ) のチツバルトの我武者(がむしや) めが劍(けん) を拔(ぬ) いて駈付(かけ つ) け、鬪戰(たゝかひ) を挑(いど) み、白刃(しらは) を揮※(「互十回」、第4水準 2-12-11) (ふりまは) し、徒(いたづ) らに虚空(こくう) をば斫(き) りまする程(ほど) に、風(かぜ) は習々(しふ／

／＼と音（おと）を立（た）て、彼（か）れが不覺（ふかく）を嘲（あざけ）る風情（ふぜい）。かくて互（たが）ひに衝（つ）いつ撃（う）つ折（をり）から、おひ／＼多人數（たにんず）馳加（はせくは）はり、左右（さいふ）に別（わか）れて戰（たゝか）ふ處（ところ）へ、領主（と）の（）が見（み）えさせられ、左右（さう）なく引別（ひきわけ）と相成（あひな）りました。

モン妻 おゝ、ロミオは何處（どこ）に？（ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオーに）今日（けふ）そなた逢（あ）はしましたか？ 此（こ）の（）騒動（さうどう）に關係（かゝりあ）うてみなんだは、ま、何（なに）よりも喜（よろこ）ばしい。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85） さア、今朝（けさ）、東（ひがし）



の金(きん)の窓(まど)から朝日影(あさひかげ)のまだ靦(のぞ)きませぬ頃(ころ)、胸(むね)の悶(もだへ)を慰(なぐさ)めませうと、郊外(かうぐわい)に出(で)ましたところ、市(まち)からは西(にし)に當(あた)る、とある楓(かへで)の杜蔭(もりかげ)に、見(み)れば、其様(そんな)な早朝(あさまだき)に、御子息(ごしそく)が歩(あ)る(い)てござる、近(ちか)づけば、それと見(み)て取(と)り、忽(たちま)ちのうちに杜(もり)の繁(しげ)みへ。人目(ひとめ)を避(さ)くるは相身互(あひみたが)ひ、浮世(うきよ)を煩(うるさ)う思(おも)もふ折(をり)には、身一(みひと)つでさへも多(おほ)いくらゐ、強(あなが)ち同志(つれ)を追(お)はずともと、只(ただ)もう己(おの)が心(こゝろ)の後(あと)をのみ追(お)うて、人目(ひとめ)

を避(さ)くる其人(そのひと)をば此方(こちら)からも避(さ)け  
ました。

モン長 げに、幾朝(いくあさ)も／＼、未(まだ)乾(ひ)ぬ露(つゆ)  
に涙(なみだ)を置添(おきそ)へ、雲(くも)には吐息(といき)の  
雲(くも)を加(くは)へて、彷徨(うろつ)いてゐるのを見掛(みか)  
けたとか。されども遠(とほ)い東方(ひんがし)の、曙姫(あけぼの  
ひめ)の寢所(ねどころ)から、あの活々(いき／＼)した太陽(たい  
やう)が小昏(をぐら)い帳(とばり)を開(あ)けかくれば、重(おも)  
い心(こゝろ)の倅(せがれ)めは其(その)明(あか)るさから逃戻  
(にげもど)り、窓(まど)を閉(と)ぢ、日(ひ)を嫌(きら)うて、  
我(わ)れから夜(よる)をば製(つく)りをる。良(よ)い分別(ふ

んべつ)をして此(この)病(やまひ)の根(ね)を絶(た)たねば、  
一定(ぢやう)、忌(いま)はしい不祥(ふしやう)の基(もとぬ)。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)で叔父上(をぢうへ)には其(そ  
の)根(ね)を御(ご)ぞんじでござりまするか？

モン長 いや、知(し)りもせねば、知(し)らせもせぬわい。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)質問(きゝたゞ)して御覽(ごらう)  
じたことがござりまするか？

モン長 予(わし)はもとより、親(した)しい誰(た)れ彼(か)れ  
にも探(さぐ)らせたれども、倅(せがれ)めは、只(たゞ)もう其(そ  
の)胸(むね)の内(うち)に、何事(なにごと)をも祕(ひ)し隠(か  
く)して、いっかな餘人(よじん)には知(し)らせぬゆゑ、探(さぐ)

ることも發見（みいだ）すことも出來（でき）ぬ有様（ありさま）——

それが身（み）の爲（ため）にならぬのは知（し）れてあれど——可憐（いたい）けな蕾（つぼみ）の其（その）うるはしい花瓣（はなびら）が、風（かぜ）にも開（ひら）かず、日光（ひ）にもまだ照映（てりは）えぬうちに、意地惡（いぢわる）の螟蛉（あをむし）めにあさましう食（は）まれてしまふやうに。彼（あ）れが愁歎（なげき）の源（もと）さへ知（し）れゝば、直（すぐ）にも療治（れいぢ）したう思（おも）ふのぢやが。

此時（このとき）ロミオ物思（ものおも）ひ顔（がほ）にて一方（ぱう）へ出（で）る。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）あれ、あそこへロミオどのが。

お避(はづ)しなされませ。私(わたくし)が聞質(きゝたゞ)して見(み)ませう。どうしても拒(こば)まッしやらうかも知(し)れぬが。モン長(なが)それが首尾(しゅび)よう白白(うちあ)けさせる役(やく)に立(た)てばよいが。……奥(おく)、さ、參(まゐ)らう。

モンタギュー夫婦(ふうふ)入(はひ)る。ロミオ近(ちか)づく。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) や、お早(はや)うござる。

ロミオ そんなに早(はや)うござるか？

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 今(いま)九時(じ)を打(う)つたばかり。

ロミオ あゝ、味氣無(あぢきな)い時間(じかん)は長(なが)い。……今(いま)急(いそ)いで去(い)んだは予(わし)の父(ちち)

でござったか？

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85） いかにも。 どういふ味氣（あぢき）  
ない事（こと）があつて、時（とき）を長（なが）いと被言（おっしや）  
る？

ロミオ 得（え）れば時（とき）が短（みじか）うなるが、其物（その）  
もの）が得（え）られぬゆゑ。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85） 戀（こひ）ぢやな？

（此（この）あたりも、一問（もん）、一答（たふ）こと／＼く口合式（パ  
ンニングしき）の警句（けいく）にして、到底（たうてい）、原語通（げ  
んごどほ）りには譯（やく）しがたきゆゑ、義譯（ぎやく）とす。）

ロミオ 人（ひと）の爲（ため）に……

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 戀人(こひごと)の爲(ため)に?  
ロミオ 戀(こ)ひ焦(こが)るゝ效(かひ)もなく、其人(そのひと)の爲(ため)に蔑視(さげす)まれて。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) やれ／＼、柔和(やさ)しう見(み)ゆる彼(あ)の戀(こひ)めが、そんな酷(むご)いことや手荒(てあら)いことをしますか?

ロミオ あゝ／＼! 戀(こひ)めは始終(しじゅう)目隠(めかく)しをしてゐて、目(め)は無(な)けれども存分(ぞんぶん)其(その)的(まと)をば射(い)とめをる!……え、何處(どこ)で食事(しょくじ)をしようぞ?……(四下(あたり)を見※(「五十回」、第4水準 2-12-11)して) あゝ／＼! こりやまア何(なん)といふ淺(あさ)

ましい騷擾(さうぜう)? いや、其(その)仔細(しさい)はお言(い)やるには及(およ)ばぬ、殘(のこ)らず聞(き)いた。是(こ)れ皆(みな)憎(にく)いが原(もと)とは言(い)へ、可愛(かはゆ)いにも深(ふか)い縁(えん)がある……すれば是(こ)りや憎(にく)みながらの可愛(かはゆ)さ! 可愛(かはゆ)いながらの憎(にく)さといふもの! 無(む)から出(で)た有(う)ぢや! 悲(かな)しい戯(たはぶ)れ、沈(しづ)んだ浮氣(うはき)、目易(めやす)い醜(みにく)さ、重(おも)い羽毛(はね)、白(しろ)い煤(すす)、冷(つめた)い火(ひ)、健康(すこやか)な病體(びやうたい)、醒(さ)めた眠(ねむり)! あゝ、有(あ)りのまゝとは同(おな)じでない物(もの)! 恰(ちよう)ど其様(そのやう)な切(せつ)ない戀(こひ)



を感（かん）じながら、戀（こひ）の誠（まこと）をば感（かん）ぜぬ切（せつ）なき！……何（なん）で笑（わら）ふんぢや？

（斯（か）くの如（ごと）き對照式（たいせうしき）の綺語（きご）——技巧的（ぎこうてき）な比喻語（ひゆご）——を竝（なら）ぶること  
はシェークスピヤの青年期（せいねんき）にはイギリス文壇（ぶんだん）の流行（りうかう）なりしなり。以下（いか）にも同例（どうれい）多（おほ）し。）

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）何（なん）の、泣（な）いてゐるぢや。  
ロミオ 泣（な）くとは、何故（なぜ）に？

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）その歎（なげ）きを思（おも）ひやつて。

ロミオ はて、それは深切(しんせつ)の爲過(しすご)し。いつそ迷惑(めいわく)。おのが心痛(しんつう)ばかりでも心臓(しんざう)が痛(いた)うなるのに、足下(きみ)までが泣(な)いてくりやると、一段(だん)と胸(むね)が迫(せま)る。足下(きみ)の同情(どうじやう)は多過(おほす)ぎる予(わし)の悲痛(かなしみ)に、只(ただ)悲痛(かなしみ)を添(そ)へるばかり。戀(こひ)は溜息(ためいき)の蒸氣(ゆげ)に立(た)つ濃(こ)い煙(けむり)、激(げき)しては眼(め)の裡(うち)に火花(ひばな)を散(ち)らし、窮(きう)しては涙(なみだ)の雨(あめ)を以(もつ)て大海(おほうみ)の水量(みかさ)をも増(ます)。さて其外(そのほか)では、何(なん)であらうか？ 性根(しやうね)の亂(みだ)れぬ亂心(らんしん)……息(いき)の根(ね)を

も杜（と）むる苦（にが）い物（もの）。……命（いのち）を砂糖漬（さとうづけ）にする程（ほど）の甘（あま）い物（もの）。さらば。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85） まったり！ 一しよに行（ゆ）かう。  
予（わし）を棄（す）てゝ行（ゆ）くとはひどい。

ロミオ とうに棄（す）てゝしまつた身（み）ぢや。予（わし）は爰（こゝ）にはゐぬ、これはロミオでは無（な）い、ロミオは何處（どこ）か他所（よそ）にゐよう。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85） いや、眞實（しんじつ）の白状（はくじやう）はくじやう）をなされ、こなたが戀（こ）ひ慕（した）ふ人（ひと）とは誰（た）れぢや？

ロミオ 白状（はくじやう）せいとは、予（わし）に拷問（がうもん）

の苦痛（くるしみ）をさせうとてか？

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）拷問（がうもん）！ 何（なん）の、只（ただ）まッすぐに自白（はくじやう）なされといふのぢや。

ロミオ はて、それは病人（びやうにん）の遺言（ゆゑごん）を白状（はくじやう）と呼（よ）ぶやうなもの、わるい上（うへ）にわるい異名（いみやう）！ が、白状（はくじやう）せう、予（わし）には戀女（こひをんな）がある。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）戀（こひ）と睨（にら）んだ時（とき）に、それ程（ほど）は見抜（みぬ）いてゐた。

ロミオ ても偉（きつ）い射手（いて）ぢやの！ そして其（その）女（おんな）は誰（た）れが目（め）にも立（た）つ美人（びじん）。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 目(め)に立(た)つ的(まと)ならば、射落(いおと)すことは容易(たやす)からう。

ロミオ はて、其(その)靦(ねらひ)は外(はづ)れた。戀愛神(キューピッド)の弱弓(よわゆみ)では射落(いおと)されぬ女(をんな)ぢや。

處女神(ダイヤナ)の徳(とく)を具(そな)へ、貞操(ていさう)の鐵(てつ)の鎧(よろひ)に身(み)を固(かた)めて、戀(こひ)の稚(をさな)い孱弱矢(へろくや)なぞでは些小(いさゝか)の手創(てきず)をも負(お)はぬ女(をんな)。言寄(いひよ)る語(ことば)に圍(かこ)まれても、戀(こひ)する眼(まなこ)に襲(おそ)はれても、いっかな心(こゝろ)を動(うご)かさぬ、賢人(けんじん)を墮落(だらく)さする黄金(こがね)にも前垂(まへだれ)をば擴(ひ

ろ)げぬ。おゝ、限(かぎ)りない美(うつく)しきには富(と)みな  
がら、其(その)美(うつく)しさは只(ただ)一代限(だいかぎ)り、  
死(し)ねば種(たね)までも盡(つ)くるとは、貧乏(しがな)い／  
運命(うんめい)！

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、トナリ)では其(その)女(をんな)は嫁入(よ  
めいり)はせぬと誓(ちか)うたのぢやな？

ロミオ いかにも。其(その)物吝(ものをし)みが甚(いか)い損失  
(そんしつ)。折角(せつかく)の美(うつく)しさも、其(その)偏屈(へ  
んくつ)ゆゑに餓死(うゑじ)をして、其(その)美(うつく)しさ  
を子孫(しそん)には能(よ)う傳(つた)へぬ。美(うつく)しうて、  
賢(かしこ)うて、予(わし)を思(おも)ひ死(じ)にさする程(ほ

ど)に賢過(かしこす)ぎた美人(びじん)ゆゑ、恐(おそ)らくは冥利(みやり)が盡(つ)き、よもや天國(てんごく)へは登(のぼ)れまい。彼女(あれ)が戀(こひ)はせぬと誓(ちか)うたゝめ、予(わし)は斯(か)うして物(もの)を言(い)うてゐるものゝ、生(い)きなから死(し)んでゐるのぢや。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ま、予(わし)の言(い)ふことを聽(き)いて、其(その)女(をんな)をばお忘(わす)れなされ。ロミオ おゝ! 教(をし)へてくれい、どうしたら忘(わす)れられるか?

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)もツと目(め)に自由(じゆう)を與(あた)へて、あちこちの他(ほか)の美人(びじん)を見(み)

たらよからう。

ロミオ 他(ほか)のと較(くら)ぶれば彌※(二の字点、1-2-22) (いよ／＼) 彼女(あれ)をば絶美(ぜつび) ぢやと言(い)はねばならぬことになる。美人(びじん)の額(ひたひ)に觸(ふ)るゝ彼(あ)の幸福(しあはせ)な假面(めん)どもは、孰(ど)れも黒々(くろ／＼)と製(つく)ってはあれど、それが却(かへ)って其(その)底(そこ)の白(しろ)い面(かほ)を思出(おもひだ)さす。目(め)を失(な)くした男(をとこ)が、其(その)失(なく)した目(め)といふ寶(たから)をば忘(わす)れぬ例(ためし)。如何(どん)な拔群(ばつくん)な美人(びじん)をお見(み)せあつても、それは只(ただ)其(その)拔群(ばつくん)な美(び)をも拔(ぬ)く拔群(ばつくん)な美(び)をば忘(わす)れぬ例(ためし)。



人（びじん）を思出（おもひだ）さす備忘帳（おぼえちやう）に過（す）ぎぬであらう。さらば。忘（わす）るゝ法（はふ）を教（をし）ふることは足下（きみ）の力（ちから）では出来（でき）ぬ。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1785）教（をし）へかたの不足（ふそく）は其中（そのうち）に償（つぐな）はう、借（か）りたまゝでは死（し）ぬまいぞ。

二人（ふたり）ともに入（はひ）る。

第（だい）二場（ぢやう） 同處（どうしょ）。街上（がいじやう）。

カピユレット長者（ちやうじゃ）を先（さき）に、年若（としわか）

き貴公子（きこうし） パリス（下人（げにん）一人（にん）從（つ）いて）出（で）る。

カピ長 モンタギューとても右（みぎ）同様（どうやう）の懲罰（おとがめ）にて謹慎（きんしん）を仰附（おほせつ）けられた。したが、吾々（われ／＼）老人（らうじん）に取（と）っては、平和（へいわ）を守（まも）ることはさまざま困難（むづか）しうはあるまいでござる。

パリス 何（いづ）れも名譽（めいよ）の家柄（いへがら）であらせらるゝに、久（ひさ）しう確執（なかたがひ）をなされたはお氣（き）の毒（どく）な儀（ぎ）でござった。時（とき）に、吾等（われら）が申入（まうしい）れた事（こと）の御返答（ごへんたふ）は？

カピ長 先度（せんど）申（まう）した通（とほ）りを繰返（くりかへ）

すまでゞござる。何分（なにぶん）にも世間（せけん）知らず、まだ十四度（よど）とは年（とし）の變移目（かはりめ）をば見（み）ぬ女（むすめ）、せめてもう二夏（ふたなつ）の榮枯（わかばおちば）を見（み）せいで、適齡（としごろ）とも思（おも）ひかねます。

パリス 姫（ひめ）よりも若（わか）うて、見事（みごと）、母親（は、おや）になつてゐるのがござるのに。

カピ長 いや、速（はや）う成（な）るものは速（はや）う壞（くづ）るゝ。末（すゑ）の頼（たの）みを皆（みな）枯（から）し、只（ただ）一粒（ひとつぶ）だけ殘（のこ）った種子（たね）、此土（このよ）で頼（たの）もしいは彼兒（あれ）ばかりでござる。さりながら、パリスどの、先（ま）づ言寄（いひよ）って女（むすめ）の心（こゝろ）をば動（うご）

かしめされ。彼女(あれ)の諾否(いなや)が肝腎(かんじん)、吾等(われら)の意志(こゝろ)は添物(そへもの)、女(むすめ)が諾(うけひ)く上(うへ)は吾等(われら)の承諾(しょうだく)は其(その)取捨(しゅしゃ)の外(ほか)には出(で)ませぬ。今宵(こよひ)、家例(かれい)に因(よ)り、宴會(えんくわい)を催(もよぶ)しまして、日頃(ひごろ)別懇(べっこん)の方々(かた／＼)を多勢(おほぜい)客人(まろうど)に招(まね)きましたが、貴下(こなた)が其(その)組(くみ)に加(く)ははらせらるゝは一段(だん)と吾家(わがや)の面目(めんもく)にござる。今宵(こよひ)、陋屋(らうをく)にて、地(ち)を踏(ふ)む明星(みようじやう)が群(む)れ輝(かざ)り、暗天(やみぞら)をさへも明(あかる)う照(て)らすを御覽(ごらん)あれ。

譬（たと）へば、緩漫（なまのろ）い冬（ふゆ）の後（しり）へに華（はな）かな春（はる）めが來（く）るのを見（み）て、血氣壯（けつき）さかん）な若（わか）い手合（てあひ）が感（かん）ずるやうな樂（たの）しき、愉快（こゝろよ）さを、蓄（つぼみ）の花（はな）の少女（をとめ）らと立交（たちまじ）らうて、今宵（こよひ）我家（わがや）で領（りやう）せられませうず。悉（こと／＼）く聽（き）き、悉（こと／＼）く視（み）て、さて後（のち）に最（いつ）ち價值（ねうち）のあるのを取（と）らっしゃれ。熟（とく）と觀（み）らるゝと、女（むすめ）も其（その）一人（ひとり）として數（かず）には入（はひ）つてゐても、勘定（かんぢやう）には入（はひ）らぬかも知（し）れぬ。さゝ、一しよにござれ。……（下人に）やい、汝（そち）は※（濁点付き片仮名エ、1-7-84）ローナ中（ぢゆう）

を駈※（「五十回」、第4水準2-12-11）（かけまは）って（書附を渡し）  
爰（こゝ）に名前（なまへ）の書（か）いてある人達（ひとたち）を見  
附（みつ）けて、今宵（こよひ）我（わが）邸（やしき）で懇（ねんご  
ろ）に御入來（ごじゅらい）をお待（ま）ち申（まう）すと云（い）へ。  
カピューレット長者（ちやうじゃ）とパリスと入（はひ）る。

下人（こゝに名前（なまへ）の書（か）いてある人達（ひとたち）を  
見附（みつ）けい！ えゝと、靴屋（くつや）は尺（ものさし）で稼（か  
せ）げか、裁縫師（したてや）は足型（あしかた）で稼（かせ）げ、漁  
夫（れふし）は筆（ふで）で稼（かせ）げ、畫工（ゑかき）は網（あみ）  
で稼（かせ）げと書（か）いてあるわい。こゝに名前（なまへ）の書（か）  
いてある人達（ひとたち）を見附（みつ）けて來（こ）いと云附（いひつ）

かったが、書手（かきて）が如何様（どのやう）な名前（なまへ）を書（か）きをつたやら、こりや一向（かう）に見附（みつ）からぬわい。學者（も）のしり（）の處（ところ）へ往（ゆ）かにやらぬ。……（一方を見て）お、ちようどよい。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオー先（さき）にロミオ從（つ）いて出（で）る。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）馬鹿（ばか）な！ そこがそれ、火（ひ）は火（ひ）で壓（おさ）へられ、苦（く）は苦（く）で滅（げ）ん（）ぜられる例（ためし）ぢゃ。逆（ぎやく）に回轉（まは）ると目（め）が眩（ま）うたのが癒（なほ）り、死（し）ぬる程（ほど）の哀愁（かなしみ）（かなしみ）も別（べつ）の哀愁（かなしみ）があると忘（わす）れらるゝ。

新(あたらし)しい毒(どく)を目(め)に染(し)ませて舊(ふる)い毒(どく)を抜(ぬ)くがよい。

ロミオ それには車前草(おんぼこ)が一ち好(よ)からう。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) それとは？

ロミオ 脛(すね)の傷(けが)には。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) ローミオー、貴下(こなた)は氣(き)が狂(ちが)うたのか？

ロミオ 氣(き)は狂(ちが)はぬが、狂人(きちがひ)よりも辛(つら)い境界(きやうがい)……牢獄(らうごく)に鎖込(とぢこ)められ、食(しょく)を断(た)たれ、答(むちう)たれ、苛責(かしゃく)せられ……(下人の近づいたのを見て)や、機嫌(きげん)よう。



下人　はい、御機嫌（ごきげん）ようござりませ。旦那（だんな）は能（よ）う讀（よ）まッしやりますか？

ロミオ　いかにも……不幸（ふしあはせ）に逢（あ）ふて、身（み）の不運（ふうん）を解（よ）むわい。

下人　はて、その様（やう）な事（こと）は書（ほん）が無（な）くても知（し）れましょ。いや、眼（まなこ）で讀（よ）むものをば讀（よ）まッしやりますかと聞（き）きますのぢや。

ロミオ　さア、其（その）文字（もじ）や其（その）言語（ことば）を知（し）つてをればなう。

下人　正直（しやうぢき）なことを言（い）はつしやる。御機嫌（ごきげん）ようござらつしやりませ！

下人（げにん）行（ゆ）きかくる。

ロミオ まで／＼、讀（よ）めるわい。

下人（げにん）より書附（かきつけ）を受取（うけと）りて讀（よ）む。

マーチノー殿（どの）、同じく夫人（おくがた）及（およ）び令嬢方（むずめごがた）。アンセルム伯（はく）、同（おな）じく美（うつき）しき令妹達（いもとごがた）。※（濁点付き片仮名中、1-7-83）トルー※（濁点付き片仮名中、1-7-83）オー殿（どの）後室（こうしつ）。

プラセンシオー殿（どの）、同（おな）じく可憐（かれん）なる姪御達（めひごたち）。マーキューシオー、同（おな）じく舍弟（しゃてい）※（濁点付き片仮名中、1-7-82）レントイン。

叔父御（をぢご）カピューレット殿（どの）、同（おな）じく夫人（ふじん）、

同(おな)じく令嬢達(むすめごがた)。麗(うるは)しき姪(めひ)のローザライン。リ※(濁点付き片仮名キ、1-7-83)ヤ。

※(濁点付き片仮名ワ、1-7-82)レンシオー殿(どの)、同(おな)じく令甥(をひご)チツバルト。リユーシオー及(およ)び快活(くわいくわつ)なるへレナ。

書附(かきつけ)を下人(げにん)に返(かへ)しながら。

美人揃(びじんぞろひ)ぢゃ。何處(どこ)へ集(あつま)るのぢゃ此(この)手合(てあひ)は？

下人 えゝ、あの……

ロミオ え、あの夜會(やくわい)にか？

下人 手前方(てまへかた)へ。

ロミオ 手前方（てまへかた）とは？

下人 主人方（しゅじんかた）へ。

ロミオ いかさま、それを真先（まっさき）に問（と）ふべきであった。

下人 問（と）はっしゃらいでも申（まう）しませう。手前（てまへ）

主人（しゅじん）はカピューレット長者（ちやうじゃ）でござります。

若（も）し貴下（こなた）がモンタギュー家（け）の方（かた）でござ

らっしゃらぬならば、來（わ）せて酒杯（さかづき）を取（と）らッしや

りませ。御機嫌（ごきげん）ようござりませう！

下人（げにん）入（はひ）る。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85） 其（その）カピューレットの例會（れ

いくわい）に、足下（きみ）の戀（こ）ひ慕（した）ふローザラインが、

此(この)※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナで評判(ひやうばん)のあらゆる美人達(びじんたち)と同席(どうせき)するは良(よ)い都合(つがふ)ぢゃ。そこへ往(い)て、昏(くら)まぬ目(め)で、予(わし)が見(み)する或(ある)顔(かほ)とローザラインのとお見比(みくら)べあつたら、白鳥(はくてう)と思(おも)うてござつたのが鴉(からす)のやうにも見(み)えうぞ。

ロミオ 信仰(しんかう)の堅(かた)い此(この)眼(まなこ)に、假(かり)にも其様(そのやう)な不信心(ふしんじん)が起(おこ)るならば、涙(なみだ)は炎(ほのほ)とも變(かは)りをれ! 何度(なんど)溺(おぼ)れても死(し)にをらぬ此(この)明透(すきとほ)る異端(げだう)め、※(「言十墟のつくり」、第4水準2-88-74)(うそ)

を言(い)うた科(とが)で火刑(ひあぶり)にせられをれ！ 何(なん)ぢや、予(わし)の戀人(こひびと)よりも美(うつく)しい！ 何(なに)もかも見通(みとほ)しの太陽(たいやう)でも、現世(このよ)創(はじめ)って以來(このかた)、又(また)とは彼女程(あれほど)の女(をなご)をば見(み)なんだのぢや。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、17-85) さ、傍(わき)に誰(た)れも居(ゐ)ず、右(みぎ)の目(め)にも左(ひだり)の目(め)にもローザラインばかりを懸較(かけくら)べておみやった時(とき)には、美(うつく)しうも見(み)えつらうが、其(その)水晶(すゐしやう)の秤皿(はかりざら)に、今宵(こよひ)予(わし)が見(み)する或(ある)目(め)ぎましい美人(びじん)を懸(か)けて、さて後(のち)に、其(そ



いて出(で)る。

カピ妻 乳母(うば) よ、女(むすめ)は何處(どこ)にゐます？ 呼(よ)んでくりやれ。

乳母 はれま、十二の年(とし)の清淨潔白(しやうじやうけっぱく)を賭(か)けますがな、ござれと善(よ)う言(い)うておいたに。

……(奥に向ひて) もしえ、羊兒(こひつじ)さん！ もしえ、姫鳥(ひめどり)さん！……鶴龜(つるかめ)……！……あのお兒(こ)は何處(どこ)へ往(ゆ)かっしゃったか！……もしえ、ヂュリエットさま！

ヂュリエット出(で)る。

ヂュリ 何(なに)え！ 呼(よ)びやるのは誰(た)れぢや？



乳母 お母(かゝ)さまぢや。

ヂュリ はい、母(はゝ)さま。何御用(なにごよう)？

カピ妻 用(よう)とは斯(か)うぢや。乳母(うば)や、ちつとの間(ま)退席(はづ)してたも、内密(ないしよう)の話(はなし)ぢやによつて。……いや、乳母(うば)、戻(もど)りや、一通(ひと)ほり聽(き)いておいて貰(もら)うたはうがよかつた。知(し)つての通(とほ)り、女(むすめ)の齡(とし)も喃(なう)、既(もう)おひ／＼適齡(としごろ)ぢや。

乳母 はい、存(ぞん)じてをりますとも、嬢(ぢやう)さまの年齢(おとし)なら、何時間(なんじかん)と言(い)ふことまで。

カピ妻 まだ眞實(ほんたう)の十四にはなりません。

乳母　ならっしやりませぬとも、此（この）齒（は）を十四本（ほん）賭（か）けますがな……と言（い）うても、其（その）十四本（ほん）が、ほんに／＼、もう只（たった）四本（ほん）しかござりませぬわい。  
……初穂節（はつほまつり）（八朔）までは最早（もう）幾日（いくか）でござりますえ？

カピ妻　二週間（しゅうかん）と零餘（はした）が幾（いく）らか。

乳母　零餘（はした）が如何（どう）あらうと、一年（ねん）三百六十日（にち）の中（うち）で、初穂節（はつほまつり）の夜（よる）になれば、恰（ちやう）どお十四にならッしやります。スーザンと嬢（ぢやう）とは……南無（なむ）あみだぶ……同（おな）い齡（どし）でござりました。スーザンは神様（かみさま）のお傍（そば）に居（を）

りまする、私（わたくし）には過（す）ぎた奴（やつ）でござりました  
が。……それはさうと、只今（たゞいま）申（まう）しました通（とほ）  
り、初穂節（はつほまつり）の夜（よる）になると、恰（ちやう）どお  
十四にならツしやります、大丈夫（だいぢやうぶ）でござります、はい、  
善（よ）う記（おぼ）えて居（を）りまする。地震（ぢしん）があつて  
から恰（ちやう）ど最早（もう）十一年目（ねんめ）……忘（わす）れ  
もしませぬ……一年（ねん）三百六十日（にち）の中（うち）で、はい、  
其日（そのひ）に乳離（ちばな）れをなされました。妾（わたし）が乳  
首（ちくくび）へ苦艾（にがよもぎ）を塗（まぶ）つて鳩小舎（はとごや）  
の壁際（かべぎは）で日向（ひなた）ぼっこりをして……殿様（どのさま）  
と貴下（こなた）はマンチュアにござらしやりました……いや、まだ／

／＼耄(ぼ)きやしませぬ。それはさうと、只今(たゞいま)も申(まう)しました通(とほ)り、妾(わたし)の乳(ちゝ)の尖所(さき)の苦艾(にがよもぎ)を嘗(な)めさっしやると、苦(にが)いので、阿呆(あほう)どのがむづかって、乳(ちゝ)をなア憎(にく)がって！ すると鳩小舎(はとごや)が、がた／＼。わしに出(で)て行(ゆ)けといふにや及(およ)ばんと思(おも)うてゐたのに。……それから既(もう)十一年(ねん)、其時(そのとき)になア單身立(ひとりだち)をさっしやりましたぢや、いや、眞(ほん)の事(こと)、彼方此方(あっちこち)と駈※(「五十回」、第4水準2-12-11) (かけまは)らッしやって、恰(ちやう)ど其(その)前(まえ)の日(ひ)に小額(こびたひ)に怪我(けが)さッしやって……其時(そのとき)亡夫(やど)が……南

無安養界(なむやんやうかい)！ 面白(おもしろ)い人(ひと)でなア  
……嬢(ぢやう)を抱起(だきおこ)して「これ、俯向(うつむき)に  
轉倒(ころ)ばしやったな？ 今(いま)に一段(もつと)伶俐者(り  
こうもの)にならツしやると、仰向(あふむけ)に轉倒(ころ)ばしや  
らう、なア、嬢(いと)？」と言(い)ふとな、ま、いかなこと、此(こ  
の)お兒(こ)がいの、ふいと啼止(なきやま)っしやって、「唯(あ  
い)「ぢやといの。(笑ふ)戲談(じやうだん)が今(いま)となつて眞  
(ほん)の事(こと)になつたと思(おも)ふと！ ほんに／＼、千年  
(ねん)生(い)きたとても、これが忘(わす)れられることかいな。「仰  
向(あふむけ)に轉倒(ころ)ばししやらう、なア、嬢(いと)「と言(い)  
ふと、阿呆(あほう)「どのが啼止(なきだま)って、「唯(あい)「ぢや

といの。(笑ふ)

カピ妻　もうよう、もうよい、お黙(だま)り。

乳母　はい、黙(だま)りまする、でもな、笑(わら)はいでは  
をられませぬ、啼(な)くのを止(や)めて、「唯(あい)」と言(い)はッ  
しやったと思(おも)ふと。でもな、眞實(ほんたう)に小額(こびたひ)  
の處(ところ)に雛鷄(ひよっこ)のお宰丸程(きんたまほど)の大(おほ)  
きな腫瘤(こぶ)が出来(でき)ましたぞや、危(あぶな)いことよの、  
それで甚(きつ)う啼入(なきい)らッしやった。亡夫(やど)が「こ  
れ、俯向(うつむき)に轉倒(ころ)ばしやったか？　今(いま)に適  
齡(としごろ)にならッしやると仰向(あふむけ)に轉倒(ころ)ばッ  
しやらう、なア、嬢(いと)？」といふとな、啼止(なきだま)って「唯

(あい)「ぢやといの。(笑ふ)。

ヂュリ　そして汝(そなた)も黙(だま)りや。黙(だま)ってたも、  
と言(い)へば。

乳母　はい、もうしまひました。南無冥加(なむみようが)あら  
せたまへ！多勢(おほぜい)育(そだ)てた嬰兒(あかさん)の中(うち)  
で最(いつ)ち可憐(いたいけ)であつたはお前(まへ)ぢや。其  
(その)お前(まへ)の御婚禮(ごこんれい)を見(み)ることが出来(で  
く)れば、予(わし)の本望(ほんまう)でござります。

カピ妻　さ、其(その)婚禮(こんれい)の事(こと)を話(はな)さ  
うとしたのぢや。むすめよ、そもじは婚禮(こんれい)がしたいか、ど  
うぢや？

ヂュリ 其様(そのやう)な名譽事(めいよごと)は、わしやまだ夢(ゆめ)にも思(おも)ふてぬぬ。

乳母 ま、名譽事(めいよごと)といの！ わしばかりが乳(ち)を献(あ)げたので無(な)かつたなら、其(その)智慧(ちゑ)は乳(ち)から入(は)ひつたとも言(い)ひませうずに。

カピ妻 ならば、今(いま)、よう思(おも)ふて見(み)や、そもじよりも年下(としした)の姫御前(ひめごぜ)で、とうに、此(この)※(濁点付き片仮名エ、1784)ローナで、母親(は、おや)におなりやつたのもある。わしも、今(いま)思(おも)へば、そもじと同(おなじ)程(ほど)の年齢(としごろ)に嫁入(よめい)って、そもじを生(ま)うけました。摘(つ)まんで言(い)へば、斯(か)うぢや、あのパ



リス殿（どの）がそもじを内室（うちかた）にしたいといの。

乳母　ま、あのよな！　姫（ひい）さまえ、あのよなお方（かた）、世界中（せかいぢゆう）の女衆（をなごしゆ）が……ほんに奇麗（きれい）な、蠟細工（らうざいく）見（み）たやうな。

カピ妻　此（この）※（濁点付き片仮名エ、1784）ローナに夏（なつ）が來（き）ても、あのやうな花（はな）は咲（さ）かぬ。

乳母　ほんとに花（はな）ぢゃ、眞實（ほん／＼）の活（い）きた花（はな）ぢゃ。

夫人　どうぞいの、あのやうなお方（かた）を可愛（いと）しいと思（おも）はぬか？　今宵（こよひ）の宴會（えんくわい）には彼方（あのかた）も見（み）ゆる筈（はず）、パリス殿（どの）の顔（かほ）といふ一卷（ひ

とまき)の書(ふみ)を善(よ)う讀(よ)んで、美(び)の筆(ふで)で物(もの)してある懷(なつか)しい意味(いみ)をば味(あぢ)はや。顔中(かほぢゅう)のどこも／＼釣合(つりあひ)が善(よ)う取(と)れて、何一(なにひと)つ不足(ふそく)はないが、萬(まん)一(いち)にも、吞込(のみこ)めぬ不審(ふしん)があつたら、傍註(わきちゅう)ほどに物(もの)を言(い)ふ眼附(めつき)を見(み)や。したが、此(この)戀(こひ)の一卷(ひとまき)に只一(ただひと)つ足(た)らはぬことゝいふは、表紙(おもてがみ)がまだ附(つ)かず、美(うつく)しう綴(と)ぢても無(な)い。魚(うを)はまだ沖中(おきなか)にぢや。總(そう)じて内(うち)の美(び)を韜(つゝ)むは外(ほか)の美(び)の身(み)の譽(ほま)れ、金玉(きんぎよく)の物語(も

のがたり)を金(きん)の鉤子(はさみがね)に抱(だ)かすれば、誰(た)が目(め)にも立派(りっぱ)な寶物(たからもの)。彼君(かのきみ)の有(も)たせます限(かぎ)りの物(もの)がそもじのとなることゆゑ、嫁入(よめいり)しやればとて、其方(そなた)に何(なん)の損(そん)も無(な)いのぢや。

乳母(によう) 損(そん)どころかいな! 女子(をなご)は男(をとこ)ゆゑに肥(ふと)りますわいの。

カピ妻(さ)、ちやツと言(い)や、パリス殿(どの)をお好(す)きやることが出来(でき)るか?

ヂュリ(さア、好(す)いても見(み)ませう、見(み)て好(す)かるものなら。とはいへ、わたしの目(め)の矢頃(やごろ)は、母(はは)

さまのお許（ゆる）しをば限（かぎ）りにして、それより強（きつ）うは射込（いこ）まぬやうにいたしませう。

下人（げにん）出（で）る。

下人 お方（かた）さま、お客人（きやくじん）も渡（わた）らせられ、御膳部（ごぜんぶ）も出（で）ました、貴下（こなた）をばお召（めし）、姫（ひい）さまをばお尋（たづ）ね、乳母（おんば）どのはお庖（お）厨（だいどころ）で大小言（おほこゝと）、何（なに）もかも大紛亂（おほらんちき）。小僕（わたくし）めはこれからお給仕（きふじ）に參（まゐ）らにやなりませぬ。すぐにいらせられませい。

カピ妻（かひつま）すぐ行（ゆ）こ。（下人入（はひ）る）……ヂュリエットや、さ、若伯（わかとの）が待（ま）ってぢや。

乳母　さ、早(はや)う往(い)て、嬉(うれ)しい晝(ひる)に嬉(うれ)しい夜(よる)をば添(そ)へさっしやれ。  
皆々(みな)入(はひ)る。

第(だい)四場(ぢやう)　同處(どうじよ)。街上(がいじやう)。

※(「五十回」、第4水準2-12-11)國巡禮(くわいこくじゅんれい)に  
假裝(かさう)したるロミオを先(さき)に、マーキューシオー、ベン  
※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ーリオー、おの／＼思(おも)ひ／＼  
の假裝(かさう)、他(ほか)に五六人(にん)、いづれも道外(だうけ)  
たる假面(かめん)を携(たづさ)へ、炬火持(たいまつもち)、太鼓

係等（たいこがゝりとう）、多勢（おほぜい）ひきつれて出（で）る。  
ロミオ 何（なん）と、例（れい）の通（とほ）りに斷口上（ことわり  
こうじやう）を言（い）うて入場（はひ）ったものか、但（たゞ）しは  
無（な）しにせうか？

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）あのやうな冗繁（あくど）いこ  
とは最早（もう）流行（はや）らぬ。肩飾（かたかけ）で目飾（めかく  
し）をしたキューピッドに彩色（さいしき）した韃鞞形（だつたんがた）  
の小弓（こゆみ）を持（も）たせて、案山子（かゞし）のやうに、娘達  
（むすめたち）を追※（「又十回」、第4水準2-12-11）（おひまは）さす  
るのは最早（もう）陳（ふる）い。それから後見（こうけん）に附（つ）  
けて貰（もら）うて、覺束無（おぼつかな）げに例（れい）の入場（に

ふぢやう(の)の長白(つらね)を述(の)べるのも嬉(うれ)しう無(な)い。  
先方(さき)が如何(どう)思(おも)はうとも、此方(こつち)は此  
方(こつち)で、思(おも)ふ存分(ぞんぶん)に踊(をど)りぬいて  
還(かへ)らう。

ロミオ (炬火持に對ひ) 俺(おれ)に炬火(たいまつ)を與(く)れい。  
俺(おれ)には逆(とて)も浮(う)かれた眞似(まね)は出來(でき)  
ぬ。餘(あんま)り氣(き)が重(おも)いによつて、寧(いっ)そ明  
(あかる)いものを持(も)たう。

マーキュ いや、ロミオどん、是非(ぜひ)とも足下(おぬし)を  
踊(をど)らせねばならぬ。

ロミオ いや、滅相(めつさう)な。足下(きみ)の舞踏靴(をど)

りぐつ)の底(そこ)は輕(かる)いが、予(わし)の心(こゝろ)の底(そこ)は鉛(なまり)のやうに重(おも)いによつて、踊(をど)ることはおろか、歩(ある)きたうもない。

マーキュ はて、足下(おぬし)は戀人(こひびと)ではないか？ すればキューピッドの翼(はね)でも借(か)りて、鴉(からす)や鳶(とび)のやうに翔(かけ)つたがよからう。

ロミオ 彼奴(あいつ)の箭先(やさき)かゝつてゐるゆゑ、翼(はね)を借(か)りたととも翔(かけ)られぬわい、鳶(とび)や鴉(からす)のやうにも飛(と)べず、悲(かな)しい思(おも)ひに繫(つな)がれてゐるゆゑ、鷹(たか)のやうに高(たか)うも飛(と)べぬ。戀(こひ)の重荷(おもに)に壓伏(おしつ)けらるゝばかりぢや。



マーキユ 何(なん)ぢや、壓伏(おしつ)ける？ あの戀(こひ)に重荷(おもに)を？ さりとは溫柔(やさ)しい者(もの)を慘酷(むごたら)しう扱(あつか)うたものぢや。

ロミオ なに、戀(こひ)を溫柔(やさ)しい？ 溫柔(やさ)しいどころか、粗暴(がさつ)な殘忍(あらけな)い者(もの)ぢや。荊棘(いばら)のやうに人(ひと)の心(むね)を刺(さ)すわい。

マーキユ はて、戀(こひ)めが殘忍(あらけな)いことをすれば、此方(こち)からも殘忍(あらけな)うしたがよい。刺(さ)しをったら、此方(こつち)からも刺(さ)して、壓倒(へこま)したがよい。(從者を顧みて)……面(つら)を隱(かく)す假面(めん)を與(く)れ。

從者(じゅうしゃ)より假面(めん)を受取(うけと)り、被(かぶ)

らうとして

醜男面（ひよつとこづら）に假面（めん）は無用（むよう）ぢゃ！（と）  
假面を抛出（なげだ）しながら）誰（た）れが皿眼（さらまなこ）で、  
此（この）見（み）ともない面（つら）を見（み）やがらうと儘（ま）ぢゃ！  
出額（でこすけ）が赧（あか）うなるばかりぢゃわい。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85） さア／＼、敲戸（たゝ）いて入（は）  
ひ）ったり。入（は）ひ）ったらば、直（すぐ）一しよに踊（をど）り出  
（だ）さうぞよ。

ロミオ（従者にむかひ）俺（おれ）には炬火（たいまつ）を與（く）れ。  
氣（き）の輕（かる）い陽氣（やうき）な手合（てあひ）は、舞踏靴（を）  
どりぐつ）の踵（かゝと）で澤山（たんと）無感覺（むかんかく）な燈

心草(とうしんぐさ)を擽(こそぐ)ったがよい。俺(おれ)は、祖父(ぢい)の訓言通(をしへどほ)り、蠟燭持(らうそくもち)をして高見(たかみ)の見物(けんぶつ)。「好(よ)い目(め)が出(で)た時(とき)、中止(や)めるは老巧者(くろくと)」「ぢや。

(舞踏室(ぶたふしつ)又(また)は客室(きやくしつ)の床上(ゆかうへ)に刈(か)り集(あつ)めたるばかりの燈心草(とうしんぐさ)(藺(ゐ)を敷(し)きしは當時(たうじ)の上流(じやうりう)の習(なら)はしなり。)

マーキュ へん「黒(くろ)い鼠(ねずみ)」と來(く)りや夜警吏(よまはり)の定文句(きまりもんく)ぢやが、もしも足下(きみ)が「黒馬(くろうま)」なら、「沼(ぬま)」からではなく、はて、恐惶(おほそれ)

ながら、足下（きみ）が首（くび）ツたけ没（はま）つてゐる戀（こひ）の淵様（ふちさま）から引上（ひきあ）げてもやらうに。……（皆々に對ひ）おい、どうした？ こりや晝（ひる）の炬火（たいまつ）ぢやわ。（むだな費（つひ）えぢや。）

ロミオ 何（なん）の其様（そん）なことが。

マーキユ はて、斯（か）う愚圖（ぐず）ついてゐるのは、晝間（ひるま）炬火（たいまつ）を燃（つ）けてゐるも同然（どうぜん）と言（い）ふのぢや。これ、善（よ）い意味（いみ）に取（と）りやれ。五智（ち）に只（ただ）一度（ど）ツきりといふのが分別智（ふんべつち）ぢやが、善（よ）い意味（いみ）の事（こと）になら、分別智（ふんべつち）が常（つね）に五度（ど）も働（はたら）く。

ロミオ さア、會（くわい）へ行（ゆ）かうとはわるい意味（いみ）でもなからう、が、行（ゆ）くのは智者（ちえしや）の所爲（しよゐ）ではない。

マーキュ とは何故（なぜ）に？

ロミオ 昨夜（ゆうべ）予（わし）は夢（ゆめ）を見（み）た。

マーキュ 俺（おれ）も見（み）た。

ロミオ そして足下（きみ）の夢（ゆめ）は？

マーキュ 空想家（ゆめをみるをところ）は嚙言（ねごと）や空言（そらごと）を言（い）ふのが癖（くせ）ぢやといふことを。

ロミオ 嚙言（ねごと）や空言（そらごと）の中（うち）にも動（うご）かぬ眞理（まこと）が籠（こも）ってゐる。

マーキュ おゝ、それならば、あの、足下（きみ）は昨夜（ゆうべ）は  
マブ媛（ひめ）（夢妖精）とお臥（ね）やったな！ 彼奴（あいつ）は  
妄想（もうざう）を産（う）まする産婆（さんば）ぢや、町年寄（まち  
どしより）の指輪（ゆびわ）に光（ひか）る瑪瑙玉（めなうだま）より  
も小（ちひ）さい姿（すがた）で、芥子粒（けしつぶ）の一群（ぐん）  
に車（くるま）を牽（ひか）せて、眠（ねぶ）ってゐる人間（にんげん）  
の鼻柱（はなばしら）を横切（よこぎ）りをる。其（その）車（くるま）  
の輻（や）は手長蜘蛛（てながぐも）の脛（すね）、天蓋（てんがい）  
は蝗蟲（いなご）の翼（はね）、※（むながい）【#「革十引」、40-5】  
は姫蜘蛛（ひめぐも）の絲（いと）、頸輪（くびわ）は水（みづ）のや  
うな月（つき）の光線（ひかり）、鞭（むち）は蟋蟀（こほろぎ）の骨（ほね）、

其(その)革紐(かはひも)は豆(まめ)の薄膜(うすかは)、御者(ぎよ  
しゃ)は懶惰(ぶしやう)な婢(はしため)の指頭(ゆびさき)から發  
掘(ほじりだ)す彼(か)の圓蟲(まるむし)といふ奴(やつ)の半分(は  
んぶん)がたも無(な)い鼠裝束(ねずみしやうぞく)の小(ちひ)さ  
い羽蟲(はむし)、車體(しやたい)は榛(はしばみ)の實(み)の殻(から)、  
それをば太古(おほむかし)から妖精(すだま)の車工(くるまし)と  
定(きま)つてゐる栗鼠(りす)と※(「虫十齊」、第3水準 1-91-69)  
※(「虫十曹」、第3水準 1-91-61)(ちむし)とが製(つく)りをった。  
さて、此様(このやう)な行裝(ぎやうさう)で、彼奴(きやつ)が毎  
夜々々(まいよ／＼)、戀人共(こひびとども)の頭腦(あたま)の中(なか)  
を馳※(「爰十回」、第4水準 2-12-11)(かけまは)ると、それが忽(た

ちま)ち種々(さま／＼)の夢(ゆめ)となる。廷臣(ていしん)の  
膝(ひざ)を走(はし)れば平身低頭(へいしんていとう)の夢(ゆめ)  
となり、代言人(だいいげんにん)の指(ゆび)を走(はし)れば忽(た  
ちま)ち謝金(しゃきん)の夢(ゆめ)となり、美人(びじん)の唇(く  
ちびる)を走(はし)れば忽(たちま)ち接吻(キッス)の夢(ゆめ)  
となる。……其(その)唇(くちびる)を、時(とき)とすると、マブめ、  
腹(はら)を立(た)って水腫(みづぶくれ)に爛(たゞ)れさせをる、  
息(いき)が香菓子(にはひぐわし)で臭(くさ)いからぢや。或(あ  
る)ひはまた廷臣(ていしん)の鼻(はな)の上(うへ)を走(はし)る、  
と叙任(ぢよにん)を嗅出(かぎだ)す夢(ゆめ)を見(み)る、或(あ  
る)ひは獻納豚(をさめぶた)の尻尾(しっぽ)の毛(け)で牧師(ぼ



くし)の鼻(はな)を擽(こそぐ)ると、僧(ぼうず)め、寺領(じりやう)が殖(ふ)えたと見(み)る。或(ある)ひは兵卒(へいそつ)の頸筋元(くびすぢもと)を駈※(「五十回」、第4水準2-12-1)(かけまは)る、すると敵(てき)の首(くび)を取(と)る夢(ゆめ)やら、攻略(のつとり)やら、伏兵(ふせぜい)やら、西班牙(イスパニア)の名劍(めいけん)やら、底拔(そこぬけ)の祝盃(しゅくはい)やら、途端(とたん)に耳元(みもと)で陣太鼓(ちんだいこ)、飛上(とびあが)る、目(め)を覺(さま)す、おびえ駭(おどろ)いて、一言二言(ひとことふたこと)祈(いのり)をする、又(また)就眠(ねい)る。乃至(なにし)は眞夜中(まよなか)に馬(うま)の鬣(たてがみ)を紛糾(こぐらか)らせ、又(また)は懶惰女(ぶしやうをんな)の頭髮(かみのけ)

を滅茶滅茶（めちやめちや）に纏（もつ）れさせて、解（と）けたら不幸（ふかう）の前兆（ぜんてう）ぢや、なぞと氣（き）を揉（も）まするもマブが惡戯（いたづら）。或（ある）ひは娘共（むすめども）が仰向（あふむけ）に臥（ね）てゐる時分（じぶん）に、上（うへ）から無上（むしやう）に壓迫（おさへつ）けて、つい忍耐（がまん）する癖（くせ）を附（つ）け、難（なん）なく強者（つはもの）にしてのくるも彼奴（きゃつ）の業（わざ）。乃至（ないし）は……

ロミオ しツ／＼、もう止（や）めた、止（や）めた！ 足下（きみ）は意義（たわい）もないことをばかりお言（い）やる。

マーキュ さもさうず、夢（ゆめ）の話（はなし）ぢや。夢（ゆめ）は空想（くうさう）の兒（こ）で、役（やく）に立（た）たぬ腦（なう）

から生(うま)るゝ。そも／＼空想(くうさう)は、空氣(くうき)よりも仄(ほのか)なもので、今(いま)は北國(ほっこく)の結氷(こほり)に言寄(いひよ)るかと思(おも)へば、忽(たちま)ち腹(はら)を立(た)て、吹變(ふきかは)って、南(みなみ)の露(つゆ)に心(こゝろ)を寄(よ)するといふ其(その)風(かぜ)よりも浮氣(うはき)なもののぢや。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、17-85) 其(その)風(かぜ)に似(に)た浮(うか)れ話(ばなし)に、大分(だいぶん)の時(とき)が潰(つぶ)れた。ようせぬと、夜會(やくわい)が果(は)て、時後(ときおく)れになつてしまはう。

ロミオ (獨語のやうに)俺(おれ)はまた早(はや)まりはせぬかと思(お

も)ふ。運(うん)の星(ほし)に懸(かゝ)つてある或(さる)怖(お  
そろ)しい宿命(しゆくめい)が、今宵(こよひ)の宴(えん)に端(はし)  
を開(ひら)いて、世(よ)に倦(う)み果(は)てた我(わが)命數  
(めいすう)を、非業無慚(ひごふむざん)の最期(さいご)によつて、  
絶(た)たうとするのではないか知(し)らぬ。とはいへ、一生(しや  
う)の航路(ふなぢ)をば一(ひと)へに神(かみ)に任(まか)した  
此身(このみ)！……(一同に對ひ)さ、さ、元氣(げんき)な人達(ひ  
とたち)。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 打(う)て、太鼓(たいこ)を。  
一同(どう)揃(そろ)うて入(はひ)る。

第(だい) 五場(ぢやう) 同處(どうしよ)。カピューレット邸(てい)  
い)の廣間(ひろま)。

樂人共(がくじんども)控(ひか)へてゐる。給仕人共(きふじにんども)、  
布巾(ふきん)を携(たづさ)へて出(い)で來(きた)り、取散(とりち)  
らしたる盃盤(はいばん)をかたづくる。

甲給仕(か) ポトパンは何處(どこ)へ往(う)せた? かたづける手傳(て)  
つだ)ひをしをらぬ。かたづけ役(やく)の癖(くせ)に! 拭役(ふ)  
きやく)の癖(くせ)に!

乙給仕(お) 饗應(もてなし)の式作法(しきさはふ)一切(さい)を、一  
人(ひとり)や二人(ふたり)の、洗(あら)ひもせぬ手(て)でして

のくるやうでは、穢（むさ）いことぢや。

甲給仕 疊椅子（たゝみいす）を彼方（あつち）へ、膳棚（ぜんだな）もかたづけ。よしか、其（その）皿（さら）も頼（たの）んだ。おいおい、杏菓子（あんずぐわし）を一片（ひときれ）だけ取除（とつと）いてくりや。それから足下（おぬし）、深切（しんせつ）があるなら、門番（もんばん）にさう言（い）うて、スーザンとネルを入（はひ）らせてくりや。（奥に向つて「#「向つて」はママ」）……アントニー！ポトパン！

丙（ポトパン）と丁（アントニー）と出（い）で來（きた）る。

丙 唯（おう）、こゝにゐるわい。

甲給仕 足下（おぬし）をば、大廣間（おほびろま）で、最前（さつき）

から呼ばつてぢや、探（さが）してぢや、尋※（「五十回」、第4水準  
2-12-11）（たづねまは）してぢや。

丁 さう彼方此方（あっちこっち）に居（を）ることは出来（でき）  
んわ。（一同に對ひ）ささ、働（はたら）いた働（はたら）いた。暫時（ちつ  
とのま）ぢや、働（はたら）いた。さうして長生（ながいき）すりや  
持丸長者（もちまるぢやうじや）ぢや。

一同（どう）かたづけながら入（はひ）る。

カピューレット長者（ちやうじや）を先（さき）に、ヂュリエット及（お  
よ）び同族（どうぞく）の者（もの）多勢（おほぜい）一方（ぱう）よ  
り出（い）で、他方（たはう）より出（い）で來（きた）る賓客（ひん  
きやく）の男女（なんによ）及（およ）びロミオ、マーキューシオー等

(ら) 假裝者 (かさうしゃ) の一群 (ぐん) を迎 (むか) ふる。

カピ長 (ロミオの一群に) ようこそ、方々 (かた／＼) ! 肉刺 (まめ) で患 (なや) んで居 (を) らん婦人 (ふじん) は、何 (いづ) れも喜 (よろこ) んで舞踏敵手 (おあひて) になりませうわい。…… (婦人連に對ひ) あア、はア、姫御前 (ひめごぜ) たち! 舞踏 (をど) るを否 (いや) ぢやと被言 (おしや) する仁 (ひと) があるか? 品取 (ひんど) って舞踏 (をど) らッしゃらぬ仁 (ひと) は、誓文 (せいもん)、肉刺 (まめ) が出来 (でき) てゐるンぢやらう。何 (なん) と圖星 (づぼし) であらうが? …… (ロミオらに對ひ) ようこそ! 吾等 (われら) ととても假面 (めん) を被 (つ) けて、美人 (びじん) の耳 (みみ) へ氣 (き) に入 (い) りさうな話 (はなし) を囁 (ささや) いたこともござつたが、あゝ、そ



れは既(も)う過去(むかし)ぢや、遠(とほ)い／＼過去(むかし)ぢや。  
……方々(かた／＼)、ようこそ來(わ)せられた……(樂人を顧みて)  
さゝ、樂人共(がくじんども)、はじめい。……(一同に對ひ)開(ひら)  
いた／＼！ つゝと開(ひら)いて、さゝ、舞踏(をど)ったり、娘達  
(むすめたち)。

樂(がく)を奏(そう)しはじむる。男女(なんによ)手(て)を取(と)  
りあうて舞踏(をど)る。

もつと燭火(あかし)を持(も)て、家來共(けらいども)！ 食卓(テー  
ブル)を疊(たゝ)んでしまつて、爐(ろ)の火(ひ)を消(け)せ、  
餘(あま)り室内(ざしき)が熱(あつ)うなつたわ。……あゝ、こりや  
思(おも)ひがけん好(よ)い慰樂(なぐさみ)であつたわい。……(同

族の一老人に對ひて) いや、叔父御(をぢご)、まま腰(こし)を下(おろ)しめされ、貴下(こなた)も予(わし)も最早(もう)舞踏時代(ダンスじだい)を過(すご)してしまつた。お互(たが)ひに假面(めん)を着(つ)けて以來(このかた)、もう何年(なんねん)にならうかの？  
カピ叔 大丈夫(だいぢやうぶ)、三十年(ねん)ぢや。

カピ長 何(なん)と被言(おしや)る！ まさかに然程(さほど)ではない、まさかに。リユーセンシオーの婚禮以來(こんれいいらい)ぢやによつて、すぐ鼻(はな)の先(さき)にペンテコスト(祭日)が來(き)たとして、二十五年(ねん)、あの時(をり)に被假面(かぶ)つたのぢや。カピ叔 いや、もそつと經(た)つ、もそつと。彼(あ)れの倅(せがれ)がもそつと年(とし)を取(と)つてをる。もう二十ぢや。

カピ長 確（しか）とさやうか？ あの倅（せがれ）には、つい二年程前（ねんほどまへ）かたまでは、後見人（こうけんじん）が附（つ）いてをつた。

此間（このあひだ）ロミオは道外假面（だうけめん）を被（かぶ）つたるまゝ獨（ひと）り離（はな）れて見（み）てゐる。其中（そのうち）ヂュリエットと一武官（ナイト）と手（て）を取（と）りあうて舞踏（をど）りはじむる。

ロミオ（傍の給仕に對ひて）あの武家（ぶけ）と手（て）を取（と）りあうてござる彼（あの）姫（ひめ）は何誰（どなた）ぢや？

給仕 小僕（わたくし）は存（ぞん）じませぬ。

ロミオ おゝ、あの姫（ひめ）の美麗（あてやか）さで、輝（かゞや）

く燭火（ともしび）が又（また）一段（だん）と輝（かゞや）くわい！  
夜（よる）の頬（ほゝ）に照映（てりは）ゆる彼（あ）の姫（ひめ）  
が風情（ふぜい）は、宛然（さながら）黒人種（エシオツプ）の耳元（みゝ  
もと）に希代（きたい）の寶玉（はうぎよく）が懸（かゝ）ったやう、  
使（つか）はうには餘（あま）り勿體無（もつたいな）く、下界（げかい）  
の物（もの）としては餘（あま）り靈妙（いみ）じい！ あゝ、あの姫（ひ  
め）が餘（よ）の女共（をんなども）に立交（たちまじ）らうてゐるの  
は、雪（ゆき）はづかしい白鳩（しらはと）が鴉（からす）の群（むれ）  
に降（お）りたやう。此（この）一舞踏（ひとをどり）が濟（す）んだ  
なら、姫（ひめ）の居處（ゐどころ）に目（め）を着（つ）け、此（この）  
賤（いや）しい手（て）を、彼（あ）の君（きみ）の玉手（ぎよくしゅ）

に觸（ふ）れ、せめてもの男冥利（をとこみやうり）にせう。あゝ、俺（おれ）は今（いま）までに戀（こひ）をしたか？ やい、眼（まなこ）よ、せなんだと誓言（せいごん）せい！ 今夜（こんや）といふ今夜（こんや）までは、眞（まこと）の美人（びじん）をば見（み）なんだわい。此中（このうち）來賓中（らいひんちゆう）のチツバルト此（この）聲（こゑ）を聞咎（きとが）めたる思入（おもひいれ）にて前（まへ）に進（すす）む。

チツバ あの聲音（こわね）はモンタギュー家（け）の奴（やつ）に相違（さうゐ）ない。……（從者に對ひ）予（よ）が細刃劍（ほそみ）を持（も）て。……何（なん）ぢや？ 下司奴（げすやつこ）めが、道外假面（だうけめん）に面（おもて）を隠（かく）して、此（この）祝典（しゆく

てん)を踏附(ふみつけ)にしようとは不埒(ふらち)ぢや! カピユー  
レットの正統(しやうとう)たる権利(けんり)を以(もつ)て、彼奴  
(きやつ)めをば打殺(ぶちころ)しても、俺(おれ)や罪惡(ざいあく)  
とは思(おも)はぬわい。

カピ長 はて、甥(をひ)よ、何(なん)としたのぢや! おぬしは何  
(なん)で其様(そのやう)に息巻(いきま)くのぢや?

チツバ 叔父上(をぢうへ)、あれは敵方(てきがた)のモンタギュー  
でござる。今夜(こんや)の祝典(しゆくてん)を辱(はづかし)めん  
悪意(あくい)を抱(いだ)いて來(き)をつたのでござる。

カピ長 年若(としわか)のロミオではないか?

チツバ でござる、そのロミオ奴(め)でござる。

カピ長 まゝ、堪忍(かんにん)して、放任(うちす)て、おきやれ、立派(りっぱ)な紳士(しんし)らしく立振舞(たちふるま)うてをる上(うへ)に、實(じつ)を言(い)へば、日頃(ひごろ)※(濁点付)き片仮名エ、1-7-84)ローナが、徳(とく)もあり行状(ぎやうじやう)もよい若者(わかもの)と自慢(じまん)の種(たね)にしてゐるロミオぢや。全市(ぜんし)の富(とみ)に易(か)へても、我家(わがや)で危害(きがい)を加(く)はへたうない。ぢやよつて、堪忍(かんにん)して見(み)ぬ介(ふり)をしてゐやれ。これは予(よ)の意志(いし)ぢや、予(よ)を重(おも)んじておくりやらば、顔色(がんしよ)を麗(うるは)しうし、其(その)むづかしい貌(かほ)を止(や)めておくりやれ。祝宴(しゆえん)最中(さいちゆう) (いはひもなか)に不似合(ふにあひ)ぢや

わい。

チツバ いや、不似合（ふにあひ）でござらん、あんな奴（やつ）が居（ゐ）るからは。堪忍（かんにん）はなりませぬ。

カピ長 はて、堪忍（かんにん）せにやなりませぬ。これさ、どうしたもの！ せにやならぬといふに。これさ、この主長（あるじ）は乃公（おれ）では無（な）いか？ 汝（おぬし）か？ さ、さ。汝（おぬし）が堪忍（かんにん）ならん！ はれやれ、汝（おぬし）は來賓中（らいひんちゆう）に大鬪争（おほげんくわ）を起（おこ）させうぞよ！ 大騒動（おほさうどう）を爲出來（しでか）さうわい！ え、汝（おぬし）のやうなのが、その！

チツバ でも、これは耻辱（ちじよく）でござる。



カピ長 さゝゝ、没分曉漢（わからんをとこ）ぢや。確（しか）と然様（さやう）か？ 其様（そのやう）なことをすれば身爲（みだめ）になるまい。……すれば、何（なん）ぢやな、では乃公（おれ）の命令（いふこと）を聽（き）かぬ！ はて、今（いま）が時（とき）ぢや。……（來賓の方に向ひて）よう／＼、出來（でき）た！（又チツバルトに對ひ）向不見（むかうみず）にも程（ほど）があるわさ、さゝ。はて、靜（しづ）かに、若（も）し……（從者を顧みて）もそつと燭火（あかし）を持（も）て、燭火（あかし）を！……（又チツバルトに對ひ）どうしたものぢや！ 是非（ぜひ）とも靜（しづ）かにして貰（もら）はう。……（來賓（らいひん）に對（むか）ひ）陽氣（やうき）に／＼！

チツバ 無理往生（むりわうじやう）の堪忍（かんにん）と持前（もちまへ）

の癩癩（かんしゃく）との出逢（であ）ひがしらで、挨拶（あいさつ）の反（そり）が合（あは）ぬゆゑ、肉體中（からだぢゆう）が顛動（ふるへ）るわい。引退（ひきさが）らう。併（しか）し今（いま）こそ甘（あま）ったるう見（み）えてをる汝（うぬ）が今夜（こんや）の推參（すゐさん）に、やがて苦（にが）い味（あぢ）を見（み）せてくれうぞ。チツバルト入（はひ）る。

此間（このあひだ）にロミオは假面（かめん）のまゝ、巡禮姿（じゆんれいすがた）のまゝにてヂュリエットに近（ちか）づき、膝（ひざ）まづきて恭（うや／＼）しく其（その）手（て）を取（と）る。

ロミオ 此（この）賤（いや）しい手（て）で尊（たふと）い御堂（みだう）を汚（けが）したを罪（つみ）とあらば、面（かほ）を赧（あか）

うした二人（ふたり）の巡禮（じゅんれい）、此（この）唇（くちびる）  
めの接觸（キッス）を以（もつ）て、粗（あら）い手（て）の穢（よご）  
した痕（あと）を滑（なめら）かに淨（きよ）めませう。

ヂュリ 巡禮（じゅんれい）どの、作法（さはふ）に善（よ）う合（かな）  
うた御信仰（ごしんかう）ぢやに、其様（そのやう）におッしゃッては、  
其（その）お手（て）に甚（いか）アい氣（き）の毒（どく）。聖者（せい  
いじゃ）がたにも御手（みて）はある、其（その）御手（みて）に觸（ふ）  
るゝのが巡禮（じゅんれい）の接吻禮（キッス）とやら。

ロミオ でも聖者（せいじゃ）にも唇（くちびる）があり、巡禮（じゅ  
んれい）にも唇（くちびる）がござりまする。

ヂュリ さア、それはお祈願（いのり）だけに用（もち）ふるもの。

此（この）問答（もんだふ）のうち、二人（ふたり）はやゝ群衆（ぐんしゅう）と離（はな）るゝ。

ロミオ おゝ、いでさらば、我（わが）聖者（せいじゃ）よ、手（て）の爲（な）す所爲（わざ）を唇（くちびる）に爲（な）さしめたまへ。唇（くちびる）が祈（いの）りまする、聽（ゆる）したまへ、さもなくば、信心（しんじん）も破（やぶ）れ、心（こゝろ）も亂（みだ）れまする。ヂュリ 切（せつ）なる祈願（いのり）の心（こゝろ）は酌（く）んで、動（うご）かぬのが聖者（せいじゃ）の心（こゝろ）。ロミオ では、お動（うご）きなされな、祈願（いのり）の御報（おむくい）をいたゞきます。

と接吻（キッス）する。

斯(か)うして貴嬢(あなた)のお唇(くちびる)で、私(わたし)の罪(つみ)が此(この)唇(くちびる)から清(きよ)められ、拭(ぬぐ)はれました。

ヂュリ では、其(その)罪(つみ)は妾(わたし)の唇(くちびる)へ移(うつ)りましたのかえ？

ロミオ 何(なに)、わたしの罪(つみ)が移(うつ)った？ おゝ、嬉(うれ)れ(れ)しうもお咎(とが)めなされた！ では、其(その)罪(つみ)を戻(もど)して下(くだ)され。

と又(また)接吻(キッス)する。

ヂュリ ても、まア、御均等(ごきんとう)な。

乳母(うば)出(で)る。

乳母　姫（ひい）さま、お母（かゝ）さまがお話（はなし）がありま  
すといな。

これにてデユリエット離（はな）るゝ。

ロミオ　あの方（かた）の母御（はゝご）とは、何誰（どなた）ぢや？  
乳母　はて、お若（わか）い方（かた）、母御様（はゝごさま）は此（こ  
の）お邸（やしき）の内室（おかた）さまぢやがな、よいお仁（ひと）で、  
御發明（ごはつめい）な、御貞節（ごていせつ）な。わしは、今（いま）  
貴下（こなた）が話（はな）してござらしゃった嬢（ぢやう）さまを育  
（そだ）てました。もしえ、あの子（こ）を手（て）に入（い）れさッしや  
るお仁（ひと）は、澤山々々（たんとく）貨幣（ちんから）にありつ  
きますぞや。

乳母（うば）離（はな）るゝ。

ロミオ ではカピューレットの女（むすめ）か？ おゝ、怖（おそろ）しい勘定狂（かんぢやうくる）はせ！ 俺（おれ）の命（いのち）はこりやもう敵（かたき）からの借物（かりもの）ぢやわ。

此時（このとき）、ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオー近寄（ちかよ）りて

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85） さア、歸（かへ）らう。娯樂（たのしみ）はもう頂點（ちやうてん）ぢや。

ロミオ なるほど、さうらしい。（獨語のやうに）なりやこそ彌※（二の字点、1-2-22）（いよ／＼）心（こゝろ）が不安（ふあん）になる。

賓客等（ひんきゃくら）おひ／＼歸（かへ）り支度（じたく）をする。

カピ長 あ、いや、方々（かた／＼）、お歸（かへ）り支度（じたく）をなされな。粗末（そまつ）な點心（ごだん）ながら、只今（ただいま）準備中（よういちゆう）でござる。（皆々代る／＼長者に近づきて、小聲に挨拶して歸りゆく）……でござるか？ はて、然（しか）らば、何（いづ）れも忝（かたじけ）なうござった。かたじけなうござる。御機嫌（ごきげん）ようござりませ。……（從者に向ひ）もそつと燭火（あかし）を持（も）て、こゝへ！……（賓客を送り果て、家人の方に向ひ）さゝ、此上（このうへ）は、寢（ね）やう／＼。あゝ、こりや、とんと夜（よ）が更（ふ）けたわ。どりゃ俺（おれ）も休（やす）まう。一同（いちどう）次第（しだい）に入（はひ）る。ヂュリエットと乳母（うば）と殘（のこ）りて、出行（いでゆ）く客（きゃく）を見送（みおく）



る。

ヂュリ 乳母（うば）、こゝへ來（き）や。あのお方（かた）は誰（だ）れ？

乳母 タイビリオーさまのお嗣子（あとゝり）でござります。

ヂュリ 今（いま）戸口（とぐち）から出（で）てゆかうとしてゐるのは誰（だ）れ？

乳母 さいな、ペトルーチオーさまの若様（わかさま）でござりましょ。

ヂュリ あの方（かた）は、ありや誰（だ）れ？ その後（あと）から行（ゆ）かッしやる……ありや踊（をど）らなんだ人（ひと）ぢや。

乳母 存（ぞん）じませぬ。

ヂュリ さ、往（い）て、問（と）うて來（き）や。……

乳母（うば）離（はな）るゝ。

もしも婚禮（こんれい）が濟（す）んだお方（かた）なら、墓（はか）が予（わし）の新床（にひどこ）とならうも知（し）れぬ。

乳母（うば）戻（もど）り來（きた）る。

乳母 名（な）はロミオと言（い）うて、お邸（うち）とは敵（かたき）どうしのモンタギュー家（け）の若（わか）ぢやといな。

デュリ（獨語的に）類無（たぐひな）いわが戀（こひ）が、類（たぐひ）ないわが憎怨（にくしみ）から生（うま）れるとは！ とも知（し）らで早（はや）う見知（みし）り、然（さ）うと知（し）った時（とき）はもう晩時（おそまき）！ あさましい因果（いんぐわ）な戀（こひ）、憎（にく）い敵（かたき）をば可愛（かはゆ）いと思（おも）はにやな

らぬ。

乳母 何（なん）ぢやいな、それは？ 何（なに）を言（い）うてござる？

ヂュリ 歌（うた）ぢや……今（いま）がた一しよに舞踏（をど）った人（ひと）に教（をし）へて貰（もら）うた歌（うた）ぢや。

奥（おく）にて「ヂュリエット」と呼（よ）ぶ。

乳母 はい、只今（ただいま）……さう、參（まゐ）りましよ。  
お客人（きやくじん）は皆（みな）もう歸（かへ）つてしまはッしやれた。  
ヂュリエットを促（うなが）して入（はひ）る。

## 第二幕

序詞役（じよしやく）出（で）る。

序詞役 扱（さて）も老（お）いにたる情慾（じやうよく）は方（まさ）に最期（いまは）の床（とこ）に眠（ねぶ）りて、

うら若（わか）き戀情（れんじやう）が其跡（そのあと）を襲（つ）ぐべく起出（おきい）づる。

曾（かつ）ては憧（あこが）れて、爲（ため）に死（し）なんとまで呻（うめ）きつる其（その）美女（びぢよ）も

今（いま）の目（め）には美（うつく）しとも見（み）えず、ヂュリエツト姫（ひめ）に比（くら）べては。

かくて戀(こ)ひつ戀(こ)はれつ、二人(ふたり)は一樣(やう)に  
色(いろ)に迷(まよ)へり、

然(しか)はあれど、歎顔(かこちがほ)に、敵(かたき)の子(こ)  
に言寄(いひよ)る辛(つら)さ、

女(をんな)もまた鉤(つりばり)より戀(こひ)の甘餌(あまゑさ)  
を盗(ぬす)む怖(おそろ)しさ。

敵(かたき)どしなれば誓約(かねごと)をも世(よ)の人並(ひとな  
み)には告(つ)げがたく、

姫(ひめ)も同(おな)じ思(おも)ひながら、逢(あ)ふべき傳手(つ  
て)は更(さら)に少(すく)なし。

さもあれ、情火(じゃうくわ)は力(ちから)を、時(とき)は便宜(び

んぎ)を與(あた)へければ、

限(かぎり)なき危(あやふ)さの中(うち)に、二人(ふたり)は限(かぎり)なく嬉(うれ)しく逢(あ)へり。

序詞役(じょしやく)入(はひ)る。

第(だい)一場(じやう) ※(濁点付き片仮名エ、ローナ)ローナ。カピューレット邸(てい)の庭園(ていゑん)の石垣(いしがき)に沿(そ)へる小逕(こみち)。

ロミオ出(で)る。

ロミオ 心臓(しんざう)が此處(こゝ)に残(のこ)つてゐるのに、何(なに)で歸(かへ)ることが出來(でき)ようぞい？ 鈍(どん)な土塊(つちくれ)め、引返(ひっかへ)して、おのが中心(たましひ)を搜(さが)しをれ。

石垣(いしがき)を攀(よ)ぢて庭内(ていない)へ飛下(とびお)りる。  
ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ーリオーとマーキューシオーと出る。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) ローミオー！ ロミオどの！

ローミオー！

マーキュ 彼奴(あいつ)めは伶俐者(りこうもの)ぢや、一定(てつきり)とうに拔駟(ぬけがけ)して、今頃(いまごろ)は(家(うち)に)

臥(ね)てゐるのであらう。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) いや／＼、此方(こつち)へ走(はし)って來(き)て、此(この)石垣(いしがき)を飛越(とびこ)えた。マーキユーシオーどの、呼(よ)んで見(み)さっしやい。

マーキユー いや、序(ついで)に祈(いの)り出(だ)して見(み)よう。……(呪文の口眞似にて) ローミオーよ！ 浮氣(うはき)よ！

狂人(きやうじん)よ！ 煩惱(ぼんなう)よ！ 戀人(こひびと)よ！

溜息(ためいき)の姿(すがた)にて出現(しゅつげん)めされ。たつた一句(く)をでも宣言(おほ)せられたならば、小生(それがし)は満足(まんぞく)いたす。只(ただ)「嗚呼(あゝ)」とだけ叫(さけ)ばっしやい、たつた一言(ひとこと)、戀(ラヴ)とか、鳩(ダヴ)とか宣言(おほ)



せられい。此方（こち）の昔馴染（むかしなじみ）の※（濁点付き片仮名并、1-7-83）ーナス殿（どの）を美（ほ）めさっしやい、乃至（ないし）は盲目（めんない）の息子殿（むすこどの）、例（れい）のコーフェーチュアの王（わう）さんが乞食娘（こじきむすめ）に惚（ほ）れた時分（じぶん）に、見事（みごと）圖星（づぼし）を射中（いあ）てたといふ彼（あ）の弓取（ゆみと）りのキューピッドに何（なん）とか綽號（あだな）でも附（つ）けさっしやい。……聞（きこ）えぬな、動（うご）かぬな、出（で）て來（こ）ぬな。はて、お猿（さる）どののは亡（な）くなられたさうな。こりや彌※（二の字点、1-2-22）（いよ／＼）祈（いの）らねばならぬ。……（又祈祷の口眞似）あはれ、ローザラインの彼（あ）の星（ほし）のやうな眼附（まみつき）、あの高々（たか／＼）とした

額（ひたひ）、あの眞紅（まつくれなぬ）の唇（くちびる）、あの可憐（かはゆら）しい足（あし）、あの眞直（まっすぐ）な脛（すね）、あのふる／＼と顫（ふる）へる太股（ふともも）乃至（ないし）其（その）近邊（ちかま）にある處々（ところ／＼）に掛（か）けて祈（いの）りまするぞ。速（すみや）かに御正體（ごしやうたい）を現（あらは）せられい。ベン※（濁点付き片仮名ヲ、ベンツ）聞（きこ）えたら、腹（はら）を立（た）たうぞ。

マーキュ 何（なん）の腹（はら）を立（た）たう。若（も）し戀女（こひをんな）の魔（ま）の輪近（わぢか）くへ奇異（おつりき）な魔物（まもの）を祈（いの）り出（だ）して、彼女（おてき）が調伏（てうぶく）してしまふまで、それを突立（つつた）たせておいたならば、それこそ

悪戯（てんごう）でもあらうけれど、今（いま）のは正直正當（しやうぢきしやうたう）な呪文（じゆもん）ぢや、彼女（おてき）の名（な）を借（か）りて、ロミオめを祈（いの）り出（だ）さうとしたまでの事（こと）ぢや。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）こりや何（なん）でも、木（こ）の間（ま）に隠（かく）れて、夜露（よつゆ）と濡（ぬ）れの幕（まく）という洒落（しやれ）であらう。戀（こひ）は盲（めくら）といふから、闇（やみ）は恰（ちよう）どお詔（あつら）へぢや。

マーキュ はて、戀（こひ）が盲（めくら）なら的（まと）を射中（いあ）てることは出来（でき）まい。今頃（いまごろ）はロミオめ、枇杷（びわ）の木蔭（こかげ）に蹲踞（しやが）んで、あゝ、予（わし）の戀人

(おてき)が、あの娘共(むすめども)が内密(ないしよ)で笑(わら)ふ此(この)枇杷(びは)のやうならば、何(なん)のかのと念(ねん)じて居(ゐ)よう。おゝ、ロミオ、若(も)し足下(おぬし)の戀人(おてき)が、な、それ、開放(あけっぱな)しの何(なに)とやらで、そして足下(おぬし)が彼女(あれ)の細長林檎(ほそながりんご)であつたなら!「#「あつたなら!」はママ」ロミオ、さらば。野天(のてん)の床(とこ)では寒(さぶ)うて寢(ね)られぬ、下司床(げすどこ)で臥(ね)よう。さ、往(ゆ)かうか?

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、一フ85)では、去(いな)う。見附(みつ)けられまいと爲(し)てゐるものを搜(さが)すのは無要(むだ)ぢや。二人(ふたり)とも入(はひ)る。

第(だい)二場(ぢやう) 同處(どうしょ)。カピューレット家(け)の庭園(ていゑん)。

ロミオ前(まへ)に出(で)る。

ロミオ 人(ひと)の痛手(いたで)を嘲(あざけ)りをる、自身(じしん)で創(きず)を負(お)うたことの無(な)い奴(やつ)は。……

此時(このとき)ヂュリエット二階(かい)の窓(まど)に現(あらは)るゝ。

や、待(ま)てよ! あの窓(まど)から洩(も)るゝ光明(あかり)は? あれは、東方(ひがし)、なればヂュリエットは太陽(たいやう)

ぢゃ！……あゝ、昇（のぼ）れ、麗（うるは）しい太陽（たいやう）よ、  
そして嫉妬深（りんきぶか）い月（つき）を殺（ころ）せ、彼奴（あいつ）  
は腰元（こしもと）の卿（そもじ）の方（ほう）が美（うつく）しいの  
を恨（くや）しがって、あの通（とほ）り、蒼（あを）ざめて居（ゐ）る。  
あの嫉妬家（やきもちやき）に奉公（ほうこう）するのはよしやれ。彼  
奴（あいつ）の制服（しきせ）は青白（あをじろ）い可嫌（いや）な色  
（いろ）ぢゃゆゑ、阿呆（あほう）の外（ほか）は誰（た）れも着（き）  
ぬ、脱（ぬ）いでしまや。……おゝ、ありや姫（ひめ）ぢゃ。戀人（こ  
ひびと）ぢゃ！ あゝ、此（この）情（こゝろ）を知（し）らせたいな  
ア！……何（なに）やら言（い）うてゐる。いや、何（なに）も言（い）  
うてはゐぬ。言（い）はいつでもかまはぬ、あの目（め）が物（もの）を

言(い)ふ。あの目(め)へ返答(へんたふ)をせふ。……あゝ、こりや  
あんまり厚顔(あつかま)しかつた。俺(おれ)に言(い)うてゐるの  
では無(な)い。大空中(おほぞらぢゆう)で最(いっ)ち美(うつく)  
しい二箇(ふたつ)の星(ほし)が、何(なに)か用(よう)があつて  
餘所(よそ)へ行(ゆ)くとて、其間(そのあひだ)代(かは)つて光(ひ  
か)つてくれと姫(ひめ)の眼(め)に頼(たの)んだのぢやな。若(も)  
し眼(め)が星(ほし)の座(ざ)に直(なほ)り、星(ほし)が姫(ひめ)  
の頭(つむり)に宿(やど)つたら、何(なん)とあらう！ 姫(ひめ)  
の頬(ほ)の美(うつく)しさには星(ほし)も羞耻(はにか)まう  
ぞ、日光(にっくわう)の前(まへ)の燈(ランプ)のやうに。然(しか)  
るに天(てん)へ上(のぼ)つた姫(ひめ)の眼(め)は、大空中(お

ほぞらぢゆう(を)残(の)こる隈(くま)もなう照(て)らさうによつて、  
鳥(とり)どもが晝(ひる)かと思(おも)うて、嘸(さぞ)啼立(な  
きた)つることであらう。あれ、頬(ほ)を掌(てのひら)へもたせ  
てゐる！ おゝ、あの頬(ほ)に觸(ふ)れようために、あの手袋(て  
ぶくろ)になりたいなア！

ヂュリ あゝ／＼！

ロミオ 物(もの)を言(い)うた。おゝ、今(いま)一度(ど)物(もの)  
言(い)うて下(くだ)され、天人(てんにん)どの！ さうして高(た  
か)い處(ところ)に光(ひか)り輝(か)やいておゐやる姿(すが  
た)は、驚(おどろ)き異(あやし)んで、後(あと)へ退(さが)つて、  
目(め)を白(しろ)うして見上(みあ)げてゐる人間共(にんげん)ど



も)の頭上(とうじやう)を、翼(はね)のある天(てん)の使(つかひ)が、徐(しづ)かに漂(たゞよ)ふ雲(くも)に騎(の)って、虚空(こくう)の中心(たゞなか)を渡(わた)ってゐるやう!

ヂュリ おゝ、ロミオ、ロミオ! 何故(なぜ)卿(おまへ)はロミオぢや! 父御(てゝご)をも、自身(じしん)の名(な)をも棄(す)てしまや。それが否(いや)ならば、せめても予(わし)の戀人(こひと)と(ぢやと誓言(せいごん)して下(くだ)され。すれば、予(わし)や最早(もう)カピューレットではない。

ロミオ (傍(たがひ)を向(む)きて)もつと聞(き)かうか? すぐ物(もの)を言(い)はうか?

ヂュリ 名前(なまへ)だけが予(わし)の敵(かたき)ぢや。モンタ

ギューでなうても立派(りっぱ)な卿(おまへ)。モンタギューが何(なん)ぢや！ 手(て)でも、足(あし)でも、腕(かひな)でも、面(かほ)でも無(な)い、人(ひと)の身(み)に附(つ)いた物(もの)ではない。おゝ、何(なに)か他(ほか)の名前(なまへ)にしや。名(な)が何(なん)ぢや？ 薔薇(ばら)の花(はな)は、他(ほか)の名(な)で呼(よ)んでも、同(おな)じやうに善(よ)い香(か)がする。ロミオとても其通(そのとほ)り、ロミオでなうても、名(な)は棄(す)てゝも、其(その)持前(もちまへ)のいみじい、貴(たふと)い徳(とく)は残(のこ)らう。……ロミオどの、おのが有(もの)でもない名(な)を棄(す)てゝ、其代(そのかは)りに、予(わし)の身(み)をも、心(こゝろ)をも取(と)つて下(くだ)され。

ロミオ（前へ進みて）おゝ、取（と）りませう。言葉（ことば）を其儘（そ  
のまゝ）。一言（ひとこと）、戀人（こひづと）ぢやと言（い）うて下（く  
だ）され、直（すぐ）にも洗禮（せんれい）を受（う）けませう。今日  
（けふ）からは最早（もう）ロミオで無（な）い。

ヂュリヤ、誰（た）れぢや、夜（よる）の闇（やみ）に包（つゝ）ま  
れて、内密事（ないしようごと）を聞（き）きやつた其方（そなた）は？  
ロミオ 名（な）は何（なん）と言（い）うたものか予（わし）は知（し）  
らぬ。なう、我（わが）聖者（せいじゃ）よ、わが名（な）は君（きみ）  
の敵（かたき）ぢやとあるゆゑ、自分（じぶん）ながら憎（にく）うて  
／＼、紙（かみ）に書（か）いてあるものなら、引破（ひきやぶ）つて  
しまひたい。

ヂュリ お前(まへ)の言葉(ことば)はまだ百言(こと)とは聞(き)かなんだが、其(その)聲(こゑ)には記憶(おぼえ)がある。ロミオ  
どのでは無(な)いか、モンタギューの？

ロミオ 孰(どち)らでもない、卿(そもじ)が嫌(きら)ひぢやと言(い)やるならば。

ヂュリ ま、どうして此處(ここ)へ？ して、まア何(なん)の爲(ため)に？ あの石垣(いしがき)は高(たか)いゆゑ容易(たやす)うは攀(のぼ)られぬに、それにお前(まへ)の身分(みぶん)は、若(も)し家(うち)の者(もの)が見附(みつ)くれば、忽(たちま)ちお命(いのち)が無(な)からうずに。

ロミオ あの石垣(いしがき)は、戀(こひ)の輕(かる)い翼(つば)

さ)で踰(こ)えた。如何(いか)な鐵壁(てつぺき)も戀(こひ)を遮(さへぎ)ることは出來(でき)ぬ。戀(こひ)は欲(ほつ)すれば如何様(どのやう)な事(こと)をも敢(あへ)てするもの。卿(そもじ)の家(うち)の人達(ひとたち)とても予(わし)を止(とど)むる力(ちから)は有(も)たぬ。

ヂュリ でも見附(みつ)くれば殺(ころ)しませうぞえ。

ロミオ あゝ、彼等(かれら)十人(にん)、二十人(にん)の劍(けん)よりも、それ、その卿(そもじ)の眼(まなこ)にこそ人(ひと)を殺(ころ)す力(ちから)はあれ。唯(ただ)もう可愛(かはゆ)い目(め)をして下(くだ)され、彼等(かれら)に憎(にく)まれうと何(なん)の厭(いと)はう。

ヂュリ 予(わし)や何様(どのやう)な事(こと)があつても、お前(まへ)をば見附(みつ)けさせたうない。

ロミオ 幸(さいは)ひ夜(よる)の衣(ころも)を被(き)てゐる、見附(みつ)けらるゝ筈(はず)はない。とはいへ卿(そもじ)に愛(あい)せられずば、立地(たちどころ)に見附(みつ)けられ、憎(にく)まれて、殺(ころ)されたい、愛(あい)されぬ苦(くるし)みを延(の)ば(さう)より。

ヂュリ 誰(た)が案内(しるべ)をしておいでなされた?

ロミオ 戀(こひ)が案内(しるべ)ぢや。尋(たづ)ねて見(み)い、と眞先(まっさき)に促進(すす)めたも戀(こひ)なれば、智慧(ちゑ)を借(か)したも戀(こひ)、目(め)を借(か)したも戀(こひ)、

予(わし)は舵取(かぢとり)ではないけれども、此様(このやう)な貨(たから)を得(え)ようためなら、千里(り)萬里(り)の荒海(あらうみ)の、其先(そのさき)の濱(はま)へでも冒険(ぼうけん)しよう。

ヂュリ 夜(よる)といふ假面(めん)を附(つ)けてゐればこそ、でなくば恥(はづ)かしさに此(この)頬(ほ)が眞赤(まつか)にならう、今宵(こよひ)言(い)うたことをついお前(まへ)に聽(き)かれたゆゑ。予(わし)とても、體裁(ていさい)つくり、そなことを言(い)ひはせぬ、と言(い)ひたいは山々(やま)なれど、式(しき)や作法(さほう)は、もうおさらば！ もし、予(わし)を可愛(い)いとしう思(おも)うて下(くだ)さるか？「唯(うん)」と被言(おツ

しや)るであらうがな。そして、それをまた實(まこと)と思(おも)はう。でも誓言(せいごん)などなされると(却(かへ)って)心元(こゝろもと)ない、戀人(こひごと)が誓言(せいごん)を破(やぶ)るのはヂョーヴ神(じん)も只(ただ)笑(わら)うてお濟(す)ましなさるといふゆゑ。おゝ、ロミオどの、可愛(いと)しう思(おも)うて下(くだ)さるが實(まこと)なら、其通(そのとほ)り誠實(せいじつ)に言(い)うて下(くだ)され。それとも、餘(あ)まり手輕(てがる)う手(て)に入(い)ったとお思(おも)ひなさるやうならば、故(わざ)と怖(こは)い貌(かほ)をして、憎(にく)さうに否(いや)と言(い)はう、たとひお言寄(いひよ)りなされても。さもなくば、世界(せかい)かけて否(いや)とは言(い)はぬ。あゝ、モンタギューどの、このや



うに愚（おろ）からしう言（い）うたなら、わしを蓮葉（はすは）などもお思（おも）ひなさらうが、巧妙（じやうず）に餘所々々（よそ／＼）しう作（つく）りすます人達（ひとたち）より、もそツと眞實（しんじつ）な女子（をなご）になつて見（み）せう。いゝえ、わしとても、若（も）し戀（こひ）の祕密（ないしよう）を聽（き）かれなんたら、もツと餘所々々（よそ／＼）しうしたであらう。ぢやによつて、お恕（ゆる）しなされ、斯（か）う速（はや）う靡（なび）いたをば浮氣（うはき）ゆゑと思（おも）うて下（くだ）さるな、夜（よる）の暗（やみ）に油斷（ゆだん）して、つい下心（したごゝろ）を知（し）られたゝめぢや。

ロミオ 姫（ひめ）よ、あの實（み）を結（むす）ぶ樹々（きぎ）の梢（こずゑ）の尖々（さき／＼）をば白銀色（しろがねいろ）に彩（いろ

ど) っ て ゐ る あ の 月 ( つ き ) を 誓 語 ( ち か ひ ) に 懸 ( か ) け ……

ヂュリ おゝ、※(「五十回」、第4水準2-12-11) (まは)る夜毎(よごと)に位置(みち)の變(かは)る不貞節(ふていせつ)な月(つき)なんぞを誓言(せいごん)にお懸(か)けなさるな。お前(まへ)の心(こゝろ)が月(つき)のやうに變(かは)るとわるい。

ロミオ では、何(なに)を誓語(ちかひ)に懸(か)けよう？

ヂュリ 誓言(せいごん)には及(およ)びませぬ。若(も)し又(また)、誓言(せいごん)なさるなら、わたしが神様(かみさま)とも思(おも)も)ふお前(まへ)の身(み)をお懸(か)けなされ、すればお言葉(ことば)を信(しん)じませう。

ロミオ 予(わし)の眞心(こゝろ)が眞實(しんじつ)戀(こ)ひ慕

(した) ふ……

ヂュリ あゝ、もし、誓言(せいごん)は、およしなされ。嬉(うれ)しいとは思(おも)へども、今宵(こよひ)すぐに約束(やくそく)するのは、粗忽(そこつ)らしうて、無分別(むぶんべつ)で、早急(さつきふ)で、あツといふ間(ま)に消(き)える稻妻(いなづま)のやうで、嬉(うれ)しうない。戀(こひ)しいお人(ひと)、さよなら！ 此(この)戀(こひ)の荅(つばみ)は、皐月(さつき)の風(かぜ)に育(そだ)てられて、又(また)逢(あ)ふまでには美(うつく)しう咲(さ)くであらう。さよなら／＼！ お前(まへ)の胸(むね)にも予(わし)の胸(むね)にも、なつかしい安息(あんそく)の宿(やど)りますやう！

ロミオ すりや、これぎりて別（わか）れようといふのか？

ヂュリ では、どうせいと被言（おツしゃ）るのぢや？

ロミオ 予（わし）の誓言（ちかひ）と取換（とりかへ）に、卿（そなた）の眞實（しんじつ）の誓言（ちかひ）が聽（き）きたい。

ヂュリ わしの誓言（ちかひ）は、さう言（い）はれぬ前（さき）に、  
献（あ）げてしまつた。もう一度（ど）献（あ）げらるゝやうであつて  
欲（ほ）しい。

ロミオ では、取戻（とりもど）したいか？ 何（なん）の爲（ため）に？  
ヂュリ 有（あ）る限（かぎ）りを改（あらた）めて献（あ）げうため  
に。とはいへ、それも、畢竟（ひつきやう）は、戀（こひ）しいからの  
こと、献（あ）げたいと思（おも）ふ心（こころ）も海（うみ）、戀（こ

ひ) しいと思(おも)ふ心(こころ)も海(うみ)の、其(その)底(そこ)は測(はか)り知(し)られぬ。献(あ)ぐれば献(あ)ぐる程(ほど)、尚(なほ)戀(こひ)しさの増(ま)すばかりで、どちらにも限(かぎり)は無(な)い。

此時(このとき)、奥(おく)にて乳母(うば)の聲(こゑ)にて呼(よ)ぶ。

奥(おく)で何(なに)やら、かましい聲(こゑ)がする。戀(こひ)しいお方(かた)、さよなら……あいあい、乳母(うば)、今(いま)すぐ……モンタギューどの、必(かならず)渝(かは)らず。ちよと待(ま)って、下(くだ)され、すぐ又(また)戻(もど)って來(こ)う。

ヂュリエット入（はひ）る。

ロミオ おゝ、有難（ありがた）い、かたじけない、何（なん）といふ  
嬉（うれ）しい夜（よる）！ が、夜（よる）ぢやによつて、もしや夢（ゆ  
め）ではないか知（し）らぬ。現（うつゝ）にしては、餘（あんま）り  
嬉（うれ）し過（す）ぎて※（「言十墟のつくり」、第4水準2-88-74）（う  
そ）らしい。

ヂュリエット再（ふたゝ）び階上（かいじやう）に現（あら）はるゝ。

ヂュリ ロミオどの、もう三言（みこと）だけ、それで今宵（こよひ）  
は別（わか）れませう。これ、お前（まへ）の心（こゝろ）に虚偽（い  
つはり）がなく、まこと夫婦（めをと）にならう氣（き）なら、明日（あ  
す）才覺（さいかく）して使者（つかひ）をば上（あ）げませうほどに、

何日（いつ）、何處（どこ）で式（しき）を擧（あ）ぐるといふ返辭（へんじ）をして下（くだ）され、すれば、一生（しやう）の運命（うんめい）をばお前（まへ）の足下（あしもと）に抛出（なげだ）して、世界（せかい）の如何（どん）な端（はて）までも、わしの殿御（どのご）として隨（つ）いてゆきませう。

乳母（奥にて） 姫（ひい）さま！

ヂュリ あい、今（いま）すぐに。……したが、萬（まん）一にも正（たゞ）しうないお心（こころ）を有（も）ってござらば、どうぞ……

乳母（奥にて） 姫（ひい）さま！

ヂュリ 今（いま）すぐに行（ゆ）くわいの。……縁談（えんだん）を斷然（ふつゝり）止（や）め、予（わし）をば勝手（かって）に泣（な）

かして下(くだ)され。明日(あす)使(つか)ひを送(あ)げませうぞ。

ロミオ 後(のち)の生(よ)をも誓言(ちかひ)にかけて……

ヂュリ 千(せん)たびも萬(まん)たびも御機嫌(ごきげん)よう。

ヂュリエット入(はひ)る。

ロミオ 千(せん)たびも萬(まん)たびも俺(おれ)は機嫌(きげん)がわるうなつたわ、卿(そもじ)といふ光明(ひかり)が消(き)えたによつて。戀人(こひと)に逢(あ)ふ嬉(うれ)しさは、寺子共(てらこども)が書物(しよもつ)に離(はな)るゝ心持(こゝろもち)と同(おな)じぢゃが、別(わか)るゝ時(とき)の切(せつ)なさは、澁面(じふめん)つくる寺屋通(てらやがよ)ひぢゃ。

ロミオそろ／＼と退(さが)る。



ヂュリエット又(また)階上(かいぢやう)に現(あらは)れて、窃(そつ)と口笛(くちぶえ)を鳴(な)らす。

ヂュリ hist (ヒスト)！ ローミオー！ hist (ヒスト)！……おゝ、  
こちの雄鷹(をとか)をば呼返(よびかへ)す鷹匠(たかじやう)の聲(こゑ)が欲(ほ)しいなア、囚人(とらはれ)の身(み)ゆる聲(こゑ)が嗚(しゃが)れて、高々(たか／＼)とは能(よ)う呼(よ)ばぬ。さも  
なかつたなら、木魂姫(こだまひめ)が臥(ね)てゐる其(その)洞穴(ほらあな)が裂(さ)くる程(ほど)に、また、あの姫(ひめ)の空(うつろ)な聲(こゑ)が予(わし)の聲(こゑ)よりも嗚(しゃが)るゝ  
程(ほど)に、ロミオ／＼と呼(よ)ばうものを。

ロミオ や、俺(おれ)の名(な)を呼(よ)ぶは戀人(こひごと)ぢや。

あゝ、戀人（こひごと）の夜（よる）の聲音（こわね）は、白銀（しろがね）の鈴（すず）のやうにやさしうて、聞（き）けば聞（き）くほどなつかしい！

ヂュリ ローミオ！

ロミオ 戀人（こひごと）か？

ヂュリ 明日（あす）、何時頃（なんじごろ）に使（つか）ひを送（あ）げうぞ？

ロミオ 九時（じ）に。

ヂュリ あい、ちがへはせぬ。あゝ、その時（とき）までが二十年（ねん）！ あれ、忘（わす）れた、何（なん）でお前（まへ）を呼返（よ）びかへ）したのやら？

ロミオ 思(おも)ひ出(だ)しなざるまで、斯(か)うして此處(こゝ)に立(た)つてゐよう。

ヂュリ さうしてゐて欲(ほ)しいから、わたしや尚(なほ)と忘(わす)れませう。一しよにゐたい、といふ事(こと)ばかりは忘(わす)れずに。ロミオ 予(わし)は又(また)いつまでも斯(か)うして此處(こゝ)に立(た)つてゐよう、卿(そもじ)にも忘(わす)れさせ、自分(じぶん)も此家(こゝ)の事(こと)の外(ほか)は皆(みんな)忘(わす)れて。

ヂュリ もう夜(よ)が明(あ)くる。往(い)んで欲(ほ)しいとは思(おも)へども、小鳥(ことり)の脚(あし)に、氣儘(きま)少女(きま)むすめが、囚人(めしうど)の鎖(くさり)のやうに絲(いと)を附(つ)

けて、ちよと放（はな）しては引戻（ひきもど）し、又（また）飛（と）ばしては引戻（ひきもど）すがやうに、お前（まへ）を往（い）なしたうもあるが、惜（を）しうもある。

ロミオ 卿（そもじ）の小鳥（ことり）になりたいなア！

ヂュリ お前（まへ）を小鳥（ことり）にしたいなア！ したが、餘（あんま）り可愛（かはゆ）がって、つい殺（ころ）してはならぬゆゑ、もうこれで、さよなら！ さよなら！ あゝ、別（わか）れといふものは悲（かな）し懷（なつか）しいものぢや。夜（よ）が明（あ）くるまで、斯（か）うしてさよならを言（い）うてみたい。

ヂュリエット入（はひ）る。

ロミオ 卿（そもじ）の目（め）には安眠（あんみん）が、卿（そもじ）

の胸（むね）には安心（あんしん）の宿（やど）るやう！ あゝ、其（その）安眠（あんみん）とも安心（あんしん）ともなつて、君（きみ）の美（うつく）しい胸（むね）や目（め）に宿（やど）りたいなア！……これから上人（しやうにん）の庵（いほり）へ往（い）て、今宵（こよひ）の仕合（しあは）せを話（はな）した上（うへ）、何（なに）かと助力（ぢよりよく）を求（もと）めよう。

ロミオ入（はひ）る。

第（だい）三場（ぢやう） 同處（どうしょ）。托鉢僧（たくはつそう）ロレンス法師（ほふし）の庵室（あんじつ）。

ロレンス法師(ほふし) 提籃(さげかご)を携(たづさ)へて出(で)る。  
ロレ 灰色目(はひいろめ)の旦(あした)が顰縮面(しかめつら)の夜(よる)に對(むか)うて笑(ゑ)めば、光明(ひかり)の縞(しま)が東方(とうぼう)の雲(くも)を彩(いろど)り、剥(は)げかゝる暗(やみ)は、日(ひ)の神(かみ)の火(ひ)の輪(わ)の前(まへ)に、さながら醉人(ゑひどれ)のやうに蹣跚(よろめ)く。どりや、太陽(ひ)が其(その)燃(も)ゆるやうな眼(まなこ)を擧(あ)げて今日(けふ)の晝(ひる)を慰(なぐさ)め、昨夜(さくや)の濕氣(しつき)を乾(かわか)す前(まへ)に、毒(どく)ある草(くさ)や貴(たふと)い液(しる)を出(だ)す花(はな)どもを摘(つ)んで、吾等(われら)の此(この)籃(かご)を一杯(ぱい)にせねばならぬ。萬有(ばんいう)

んいう)の母(はゝ)たる大地(だいぢ)は其(その)墓所(はかどころ)でもあり、又(また)其(その)埋葬地(まいさうち)たるものが其(その)子宮(こぶくろ)でもある、さて其(その)子宮(こぶくろ)より千差(さ)萬別(べつ)の兒供(こども)が生(うま)れ、其(その)胸(むね)をまさぐりて乳(ち)を吸(す)ふやうに、更(さら)に何(なに)か一種宛(ひとくさづ)靈妙(いみ)じい殊(こと)なる效能(かうのう)のある千種(しゆ)萬種(しゆ)を吸出(すひい)だす。あゝ、夥(おびたゞ)しいは草(くさ)や木(き)や金石(きんせき)どもの其(その)本質(ほんしつ)に籠(こも)れる奇特(きどく)ぢや。地上(ちじやう)に存(ぞん)する物(もの)たる限(かぎ)り、如何(いか)な惡(あく)しい品(しな)も何等(ななら)かの益(えき)を供(きよ

う)せざるは無(な)く、又(また)如何(いか)な善(よ)いものも  
用法(ようはふ)正(ただ)しからざれば其(その)性(せい)に悖(も  
と)り、圖(はか)らざる弊(へい)を生(しやう)ずる習(なら)ひ。  
美德(びとく)も法(はふ)を誤(あやま)れば惡徳(あくとく)と化  
(くわ)し、惡徳(あくとく)も用處(ようしよ)を得(え)て威嚴(ゐ  
げん)を生(しやう)ず。此(この)孱弱(かよわ)い、幼稚(いとけな)  
い萼(はなぶさ)の裡(うち)に毒(どく)も宿(よど)れば藥力(や  
くりき)もある、嗅(か)いでは身體中(からだぢゆう)を慰(なぐさ)  
むれども、嘗(な)むるときは心臓(しんざう)と共(とも)に五官(く  
わん)を殺(ころ)す。かゝる敵(かたき)が、植物界(しよくぶつかい)  
にも、人間界(にんげんかい)にも、常(つね)に陣(ぢん)どつて相



鬪（あひたゝか）ふ……仁心（じんしん）と害心（がいしん）とが……  
而（しかう）して惡（あ）しい方（かた）が勝（か）つときは、忽（たちま）ち毒蟲（どくむし）に取附（とりつ）かれて、其（その）植物（しょくぶつ）は枯果（かれは）つる。

ロミオ出（で）る。

ロミオ お早（はや）うござります。

ロレ 冥加（みゃうが）あらせたまへ！ 誰（た）れぢや、此（この）早朝（さうてう）になつかしい其（その）聲音（こわね）は？ ほう、若（わか）い癖（くせ）に早起（はやおき）は、心（こゝろ）に煩悶（わづらひ）のある證據（しょうこ）ぢや。老（おい）の目（め）は苦勞（くらう）に覺（さ）め勝（が）ち、苦勞（くらう）の宿（やど）る處（とらう）

ころ)には兎角(とかく)睡眠(すぬみん)の宿(やど)らぬものぢやが、  
心(こゝろ)に創(きず)が無(な)く腦(なう)に蟠(わだかま)り  
のない若(わか)い者(もの)は、手足(てあし)を横(よこ)にする  
や否(いな)や、好(よ)い心持(こゝろもち)に眠(ねむ)らるゝ筈  
(はず)ぢやに、かう早(はや)う起(お)きさしゃつたは、こりや何(な  
に)か煩悶(わづらひ)が無(な)うてはならぬ。さうでなくば、こち  
のロミオは、昨夜(ゆうべ)は床(とこ)に就(つ)かなんだのぢやな。  
ロミオ 其通(そのとほ)りでござる、眠(ね)なんだ故(ゆゑ)にこ  
そ嬉(うれ)しい安心(あんしん)。

ロレ 神(かみ)よ、罪(つみ)を赦(ゆる)させられい！ さては  
ローザラインと一しよぢやな！

ロミオ ローザラインと一しよぢやと被言（おツしや）るか？ 其（その）名前（なまへ）も、其（その）名前（なまへ）に伴（ともな）ふ悲痛（かなしみ）も、予（わし）や最早（もう）みんな忘（わす）れてしまつた。

ロレ それでこそ好（よ）い子（こ）ぢや。すれば、何處（どこ）におゐやつたのぢや？

ロミオ 二度（ど）と問（と）はれいでも話（はな）しませう。仇敵（かたき）の家（いへ）で酒宴（しゅえん）の最中（さいちゆう）、だまし撃（うち）ち（に）予（わし）に創（きず）を負（お）はした者（もの）があつたを、此方（こち）からも手（て）を負（お）はした。二人（ふたり）の受（う）けた創（きず）は貴僧（こなた）の藥力（やくりき）を借（か）れば治

(なほ)る。なう、上人(しゃうにん)、予(わし)は其(その)敵(てき)を憎(にく)みはせぬ、かうして頼(たの)みに來(き)たのも、互(た)が(ひの身(み)の爲(ため)を思(おも)ふからぢや。

ロレ はて、明白(はつきり)と素直(すなほ)に被言(おっしや)れ。懺悔(ざんげ)が謎(なぞ)のやうであると、赦免(みゆるし)も謎(なぞ)のやうなことになるう。

ロミオ されば明白(はつきり)と言(い)はうが、予(わし)はカピューレット家(け)のあの美(うつく)しい娘(むすめ)を又(また)と無(な)い戀人(こひと)と定(き)めてしまつた。予(わし)が定(き)めたれば先方(むかう)もまた其通(そのとほ)りに定(き)めたのでござる。手筈(てはず)は皆(みな)濟(す)んだ、殘(のこ)るは貴

僧（こなた）に行（おこな）うて貰（もら）ふ神聖（しんせい）な式（しき）ばかり。何時（いつ）、何處（どこ）で、如何（どう）して逢（あ）うて、如何（どう）言寄（いひよ）って、如何（どん）な誓言（せいごん）をしたかは、歩（ある）きながら話（はな）しませうほどに、先（ま）づ承引（しょういん）して下（くだ）され、今日（けふ）婚禮（こんれい）（こんれい）さずすることを。

ロレ 祖師（そし）フランシス上人（しやうにん）！ こりやまた何（なん）たる變（かは）りやうぢや！ あれほどに戀（こ）ひ焦（こが）れておみやつた「#「おみやつた」はママ」ローザラインを最早（もう）棄（す）て、おしまやつたか？ されば若（わか）い手合（てあひ）の戀（こひ）は其（その）心（こゝろ）には宿（やど）らいで其（その）

眼中(がんちゆう)に宿(やど)ると見(み)えた。Jesus(ヂェシュー) Maria(マリヤ)！ どれほど苦(にが)い水(みづ)が其(その)蒼白(あをじろ)い頬(ほ)をローザラインの爲(ため)に洗(あら)うたことやら？ 幾何(どれほど)の鹽辛水(しほからみづ)を無用(むだ)にしたことやら、今(いま)は餘波(なごり)さへもない其(その)戀(こひ)を味(あぢ)つけうために！ 卿(そなた)の溜息(ためいき)はまだ大空(おほぞら)に湯氣(ゆげ)と立昇(たちのぼ)り、卿(そなた)の先頃(さきごろ)の呻吟聲(うなりごゑ)はまだ此(この)老(おい)の耳(みみ)に鳴(な)つてゐる。それ、まだ其(その)頬(ほ)に古(ふる)い涙(なみだ)の汚(よご)れが拭(ぬぐ)はれいで殘(のこ)つてある。卿(そなた)はやはり卿(そなた)で、あの愁歎(なげき)

は卿（そなた）の愁歎（なげき）であつたなら、それは皆（みな）ローザラインの爲（ため）であつたに、なりや、其（その）心（こゝろ）が變（かは）つたか？ すれば、此（この）一語（ご）を唱（とな）へしめ……女（をんな）は心（こゝろ）の移（うつ）る筈（はず）、男心（をとこごころ）さへも堅固（けんこ）にあらず。

ロミオ 貴僧（こなた）はローザラインに戀（こひ）をすなというて、幾（いく）たびもお叱（しか）りやつたぞよ。

ロレ 戀（こひ）をすなではない、溺（おぼ）るなど言（い）うたのぢや。

ロミオ そして戀（こひ）を葬（ほうむ）れと被言（おしや）つたぞよ。  
ロレ 前（まへ）のを墓（はか）に葬（ほうむ）つて、別（べつ）の

を掘出（ほりだ）せとは曾（つひ）ぞ言（い）はぬ。

ロミオ なう、叱（しか）つて下（くだ）さるな。此度（こんど）の女（をんな）は、此方（こち）で思（おも）へば、彼方（あち）でも思（おも）ひ、此方（こち）で慕（した）へば、彼方（あち）でも慕（した）ふ。以前（さき）のはさうで無（な）かった。

ロレ おゝ、それは、卿（そなた）の戀（こひ）をば、能（よ）う會得（えとく）してもみぬことを、只（ただ）口頭（くちさき）で誦（よ）む類（たぐひ）ぢやと見拔（みぬ）いてみた爲（ため）でもあらう。したが、こゝな浮氣者（うはきもの）、ま、予（わし）と一しよに來（き）やれ、仔細（しさい）あつて助力（ぢよりき）せう、……此（この）縁組（えんぐみ）が原（もと）で兩家（りやうけ）の確執（かくしつ）を



和睦（わぼく）に變（か）へまいものでもない。

ロミオ おゝ、速（はや）う。早急（さつきふ）に濟（す）まさにやならぬ。

ロレ いや、賢（かしこ）う徐（ゆる）うぢや。馳出（かけだ）す者（もの）は蹉躓（けつまづ）くわい。

ロレンス先（さき）に、ロミオ從（つ）ひて入（はひ）る。

第（だい）四場（ぢやう） 同處（どうしょ）。街上（がいじやう）。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオーとマーキューシオーと出（で）る。

マーキュ　ロミオめは何處（どこ）へ往（ゆ）きをつたか？　歸（かへ）らなんだか昨夜（ゆうべ）は？

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）　うん、父者（てゝぢや）の家（いへ）へは。家來（けらい）に逢（あ）うて聞（き）いた。

マーキュ　はて、あの蒼白（あをじろ）い情無（じやうな）し女（をんな）のローザラインめが散々（さん／＼）に奴（やつ）を苦（くるし）めるによつて、果（はて）は狂人（きちがひ）にもなりかねまいわい。  
ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）　カピューレットの一族（ぞく）のチツバルトが、ロミオが父者（てゝぢや）へ宛（あ）てゝ、書面（しよめん）をば送（おく）つたさうな。

マーキュ　誓文（せいもん）、決闘状（けつとうじやう）であらう。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) ロミオは返事(へんじ)をやるであらう。

マーキュ 字(じ)の書(か)ける程(ほど)の者(もの)なら、返事(へんじ)をせいでか？

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) いや、しかけられたからは、立合(たちあ)ちあ)はうと返事(へんじ)をせう。

マーキュ あゝ、ロミオの奴(やつ)め、奴(やつ)は最早(もう)死(し)んでゐるわい！ あの眞白(まっしろ)な小婦(あまっちよ)の黒(くろ)い目(め)でしてやられた、耳(みみ)は戀歌(こひか)で射貫(い)とほ)される、心臓(しんざう)の眞中央(まっただなか)は例(れい)の盲小僧(めくらこぞう)の彼(あ)の稽古矢(けいこや)で打碎(ぶ

ちくた) かれる。何(どう)して、あのチツバルトと立合(たちあ)ふことなぞが出来(でけ)うぞい。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) え、如何(どん)な男(やつ)ぢやチツバルトは？

マーキユ 昔話(むかしばなし)の猫王(チツバルト)ぢやと思(おも)うたら當(あて)が違(ちが)はう。見事(みごと) 武士道(ぶしだう)の式作法(しきさはふ)に精通(せいつう)遊(あそ)ばしたお達人(たつじん)さまぢや。譜本(ふほん)で歌(うた)を唱(うた)ふやうに、時(ま)も距離(きょり)も釣合(つりあひ)も違(ちが)へず、一(ひい)、二(ふう)と間(ま)を置(お)いて、三(みツ)つと言(い)ふ途端(とたん)に敵手(あひて)の胸元(むなもと)へ貫通(ずぶり)、絹鈕(き

ぬぼたん)をも芋刺(いもざし)にしようといふ決闘師(けつとうし)ぢや。  
例(れい)の第(だい)一條(でう)、第(だい)二條(でう)を口癖(くちぐせ)にする決闘師(けつとうし)の嫡々(ちやくやく)ぢや。あゝ、  
百發(ぱつ)百中(ちゆう)の進(すす)み突(づき)とござい！ 次  
(つぎ)は逆突(ぎやくづき)？ 參(まゐ)ったか突(づき)とござる！  
ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) え、何突(なにづき)？  
マーキユ 白癩(びやくらい)、あのやうな變妙來(へんめうらい)な、  
異様(おつ)に氣取(きど)った口吻(ものいひ)をしをる奴(やつ)  
は斃(くたば)りをれ、陳奮漢(ちんぷんかん)め！ 「イエスも照覽  
(せうらん)あれ、拔群(ばっくん)な劍士(けんし)でござる！ いや、  
拔群(ばっくん)な丈夫(ますらを)でござる！」 へん、拔群(ばっくん)

な淫婦(すべた)でござるが聞(き)いて呆(あき)れるわい。何(なん)と、お祖父(ぢい)さん、情無(なさけな)い世(よ)の中(なか)と  
なつたではござらぬか、朝(あさ)から晩(ばん)まで流行(りうかう)  
を仕入※(「又十回」、第4水準2-12-11) (しいれまは) っ、口(くち)  
さへ開(あ)けば pardonnez (パルドンネ) -mois (モア), pardonnez (パ  
ルドンネ) -mois (モア) - 新型(しんがた)の細袴(ずぼん)を穿(は)  
かねば、半時(はんとき)、片時(へんし)も立(た) っ、てをられぬ如  
是(あゝいふ) ※(「亡」(虫+虫)、「第3水準1-91-58) 共(あぶども)  
に惱(なやま)されねばならぬとは? おゝ、又(また)しても bon (ぼ  
ん) i bon (ぼん) - ぶん / -!  
ロミオ出る。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) ロミオが來(わ)せた、ロミオが。  
マーキユ ※(「魚十而」、第3水準 1-94-40) (はららぐ)を拔(ぬ)  
かれた鮓(にしん)の干物(ひもの)といふ面附(つらつき)ぢや。おゝ、  
にしは、にしは、てもまア憫然(あさま)しい魚類(ぎよるゐ)とはな  
られたな! こりや最早(もう)ペトラークが得意(とくい)の戀歌(こ  
ひか)をお手(て)の物(もの)ともござらう。ローラなどはロミオが  
愛姫(ひめ)に比(くら)べては山出(やまだ)しの下婢(はしため)  
ぢや、もつとも、歌(うた)だけはローラが遙(はる)かに上等(じや  
うとう)のを作(つく)って貰(もら)うた。はて、ダイドーは自墮落  
女(じだらくをんな)で、クレオパトラは赤面(あかつら)の乞食女(こ  
じきをんな)、ヘレンやヒーローは賣女(ばいぢよ)、賤女(せんぢよ)で、

シスビは碧瞳（あをめだま）ぢや何（なん）のかのと申（まう）せども、  
所詮（しよせん）は取（と）るに足（た）らぬ。……なうなう、ロミオ  
の君（きみ）、えへん、bonjour（ボンジュール）—これはフランス式（し  
き）の細袴（ほそずぼん）に對（たい）してのフランス式（しき）の御  
挨拶（ごあいさつ）でござる。昨夜（ゆうべ）は、ようも巧々（うま／

＼）と贗金（にせがね）を掴（つか）ませやったの。  
ロミオ 二人（ふたり）ともお早（はや）うござる。なに、贗金（にせ  
がね）とは？

マーキュ 吾々（われ／＼）の目（め）をお拔（ぬ）きやって。後（あ  
と）は言（い）はいでもぢや。

ロミオ マーキュショーどの、恕（ゆる）して下（くだ）され、實（じ



つ)は是非(ぜひ)ない所用(しよよう)があつたからぢや。あんな際(をり)には、つい、その、禮(れい)を曲(ま)ぐることがある習(なら)ひぢや。

マーキユ ふん、あんな際(をり)には、足腰(あしこし)の曲(ま)げ方(かた)が異(ちが)ふといふのぢやな？

ロミオ といふのは、慇懃(ねんごろ)に挨拶(あいさつ)するためといふ意(こゝろ)か？

マーキユ 其通(そのとほ)り、御深切(ごねんごろ)な解釋(かいしゃ)くぢや。

ロミオ これはまた御丁寧(ごていねい)なお言葉(ことば)ぢや。

マーキユ はて、禮法(れいはふ)にかけては一代(だい)の精華(ピ

ンク)とも崇(あが)められてゐる乃公(おれ)ぢや。

ロミオ 精華(ピンク)とは名譽(めいよ)の異名(いみやう)か?  
マーキユ いかにも。

ロミオ では、予(わし)の舞踏靴(ぶたふぐつ)は名譽(めいよ)なものぢや、此通(このとほ)り孔(ピンク)だらけぢやによつて。

マーキユ 出来(でき)た。此上(このうへ)は洒落競(しゃれくら)べぢやぞ。これ、足下(おぬし)の其(その)薄(うす)つぺらな靴(くつ)の底(そこ)は、今(いま)に悉(こと／＼)く磨(す)り減(へ)つて、果(はて)は見苦(みぐる)しい眞(ま)ッ赤(か)な足(あし)を出(だ)しやらうぞよ。

ロミオ はて、見(み)ぐるしい眞(ま)ッ赤(か)な恥(はぢ)を駄

洒落（だじゃ）るとは足下（おぬし）のこと。それ、もう、薄（うす）っぺらな智慧（ちゑ）の底（そこ）が見（み）えるわ！

マーキュ おい、應援（たす）けてくれ、ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオー。智慧（ちゑ）の息（いき）が切（き）れるわ。

ロミオ 鞭（むち）を加（あ）てい、鞭（むち）を、もっと／＼。さうで無（な）いと「勝（か）った」と呼（よ）ぶぞよ。

マーキュ いや、こんな阿呆（あほ）らしい拔駟（ぬけがけ）の競争（きやうさう）は最早（もう）中止（やめ）ぢや。何故（なぜ）と言（い）へ、足下（おぬし）は最初（はじめ）からぬけてゐるわ。何（なん）と、頭（づぬ）けた洒落（しゃれ）であらうが。

ロミオ 成程（なるほど）、愚鈍者事（ぬけさくごと）にかけては、足下（お

ぬし)は生得(うまれつき) 頭拔(づぬ) けてゐる。

マーキユ 巧(うま) く脱(ぬ) けをつたな、咬(か) むぞよ。

ロミオ はて「咬(か) んでたもるな、阿呆鳥(あほうどり) どのよ」ぢゃ。

マーキユ 足下(おぬし) の洒落(しやれ) は橙々酢(だい／＼ず) と  
いふ格(かく) ぢゃ、薬味(やくみ) にしたら酸(すツ) ぱからう。

ロミオ ぢゃによつて、かうした味(あぢ) の脱(ぬ) けた代物(しろ  
もの) に撒布(ふりか) けてゐるのぢゃ。

マーキユ おゝ、ても善(よ) う※(「又十回」、第4水準2-12-11) (ま  
は) るわ、寸(すん) から尺(しゃく) に伸(の) びる莫大小口(めり  
やすぐち) とは足下(おぬし) の口(くち) ぢゃ。

ロミオ はて、伸(の) びると言(い) へば、その伸(の) びるとは足下(き

み)の鼻(はな)の下(した)ぢや、今(いま)天下(てんか)に並(なら)びもない抜作(ぬけさく)どのとは足下(きみ)のことぢや。

マーキュ (笑って)何(なん)と、かう洒落(しゃ)れのめしてゐるはうが、惚(ほ)れたの、腫(は)れたのと呻吟(うめ)いてゐるよりは優(まし)であらうが？ 今日(けふ)こそは、つつともう人好(ひとずき)のする立派(りっぱ)なロミオぢや、今日(けふ)こそは正面(しょうめん)(しやうめん)、側面(そくめん)、何處(どこ)から見(み)ても正(しょう)しやうめん贗無(まがひな)しのロミオぢや。女(をんな)の事(こと)で愁言(なきごと)言(い)ふは、例(たと)へば、彼(あ)の弄僕(あは)う)めが、見(み)ともない面(つら)をして、例(れい)の棒切(ボーブル)をおったてゝ……

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) もう止(や)めた、もう止(や)めた。  
マーキュ しかけた一件(けん)を、止(や)めいとは如何(どう)ぢや？  
ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 黙(だま)ってゐたら、尚(な)  
ほ其上(そのうへ)に、何(なに)を爲出(し)いだ) さうも知(し)れ  
ぬわい。

マーキュ 大(おほ)ちがひぢや、何(なに)をしようぞい。事(こと)  
はどうに終(す)んだわ。もう何(なに)もする氣(き)は無(な)い。  
ロミオ やれ／＼、お上品(じやうひん)な問答(もんたふ)！

(此(この)原詞(げんし)は “Here's goodly gear.” 此(この)意味(い  
み)不分明(ふぶんめい)。乳母(うば)とピーターとの來(きた)る  
を見附(みつ)けての評語(ひやうご)とも、マーキュシオーとベン

※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ーリオーの猥雑(わいざつ)な問答(もんだふ)を反語的(はんごてき)に評(ひやう)したるものと解(かい)せらる。こゝには後者(こうしや)を正(ただ)しと見(み)て、其義(そのぎ)に譯(やく)しておきたり。

乳母(うば)が先(さき)に、下人(げにん)ピーター大(おほ)きな扇子(せんす)を持(も)ちて従(つ)いて出(で)る。

マーキユ 船(ふね)ぢや／＼！

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 二艘(さう)々々(／＼)。男襦袢(をす)と女襦袢(めす)ぢや。

乳母 ピーター！

ピータ あい／＼！

乳母　予（わし）の扇子（せんす）を。

マーキユ　ピーターどんや、扇子（せんす）で面（つら）を隠（かく）さうちふのぢや、扇子（せんす）の方（ほう）が美（うつく）しいからなう。

乳母　殿方（とのがた）、お早（はや）うござります。

マーキユ　御婦人（ごふじん）、お晩（おそ）うござります。

乳母　え、晩（おそ）うござりますとえ。

マーキユ　いかにも。それ、その日時計（ひどけい）の淫亂（すけべい）な手（て）が午過（ひるすぎ）の標（しるし）に達（とゞ）いてゐるわさ。

乳母　はれま、此人（このひと）は！　何（なん）たるお人（ひと）ぢや

お前（まへ）は？



ロミオ 御婦人（ごふじん）、これは事壞（ことこは）しの爲（ため）に神様（かみさま）が造（つく）らせられた男（をとこ）ぢゃ。

乳母 ほんに、巧（うま）いことを被言（おっしや）る。事壞（ことこは）しの爲（ため）に出来（でき）た人（ひと）ぢゃといの！ あの、殿方（とのがた）え、ロミオの若様（わかさま）には何處（どこ）へもたら逢（あ）はれうかの、御存（ごぞん）じなら教（をし）へて下（くだ）され。

ロミオ 予（わし）が教（をし）へう。したが、其（その）若様（わかさま）は彌※（二の字点、1-2-22）（いよ／＼）逢（あ）はッしやる時分（じぶん）には、尋（たづ）ねてござる今（いま）よりは老（ふ）けてみませうぞ。はて、最（いっ）ち年少（としわか）のロミオは予（わし）ぢゃ。これ

より粗(まづ)いのは今(いま)はない。

乳母　　てもま、巧(うま)いことを被言(おっしや)る。

マーキュ　何(なん)ぢや、最(いっ)ち粗(まづ)いのをば甘美(うま)い？　はて、巧(うま)い意味(いみ)の取(と)りやうぢやの。賢女(けんぢよ)々々。

乳母　　貴下(こなた)がロミオさまなら、何處(どこ)ぞで改(あら)ためて御密會(ごみつくわい)(御面會)がお願い(ねが)ひ申(まう)したうござります。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)　(笑って)今(いま)に、優待(うゑたい)といふ積(つも)りで、誘惑(ゆうわく)をはじめかねまい。

マーキュ　慶庵婆(ぜげん)だ／＼！　來(き)た／＼！

ロミオ 來(き)たとは何(なに)が？

マーキユ はて、兎(うさぎ)ではない、兎(うさぎ)にしても脂肪(あぶら)の満(の)った奴(やつ)ではなうて、節肉祭式(レントしき)の肉饅頭(にくまんぢう)、食(く)はぬうちから、陳(ふる)びて、萎(しな)びて……

(歌ふ)。やんれ、黴(かび)の生(は)えた雌兎(めすうさぎ)、  
やんれ、黴(かび)の生(は)えた雌兎(めすうさぎ)、

レント祭(さい)には相應(さうおう)なれど

黴(か)びた兎(うさぎ)ぢや二十人(にん)でも食(く)へぬ、  
食(く)はぬうちから黴(か)びたと聞(き)けば……

ロミオ、父御(てゝご)の館(うち)へおぢやれ。あそこで飲(の)ま

うぞ。

ロミオ 後(あと) から行(ゆ)かう。

マーキュ お媼(ばう)どん、さらば。さらば。

「姫(ひめ)さん／＼……」

流行(りうかう)の小唄(こうた)を唱(うた)ひながらベン※(濁点付き片仮名ヲ、1785)ーリオーと共(とも)にマーキューシオー入(はひ)る。

乳母 はい、御機嫌(ごきげん)よう。……もし／＼、あの人(ひと)は、ま、何(なん)といふ無作法(ぶさはふ)な若(わか)い衆(しゆ)でござるぞ? あくたいもくたいばかり言(い)うて。

ロミオ あれは自分(じぶん)の饒舌(しゃべ)るのを聽(き)くこと

の好(す)きな男(をとこ)、一月(ひとつき)かゝつてもやり切(き)れぬやうな事(こと)を、一分間(ぶんかん)で饒舌(しゃべ)り立(た)てようといふ男(をとこ)ぢや。

乳母 おのれ、わしの事(こと)を何(なん)とでも言(い)うて見(み)をれ、目(め)に物(もの)を見(み)せうぞい。よしんば見(み)かけより強(つよ)からうと、あんな奴(やつ)がまだ別(べつ)に二十人(にん)あらうと、大事(だいじ)ない。自力(じりき)で敵(かな)はぬなら、人(ひと)を頼(たの)むわいの。碌(ろく)でなしの和郎(わろ)め！ 彼奴(あいつ)らに阿呆(あほう)にされて堪(たま)るか  
いの。彼奴(あいつ)らの無頼仲間(ごろつきなかま)ぢやありやせぬ  
わい。……(下人に對ひて)汝(おのし)も傍(そば)に立(た)つて

みながら、予（わし）が隨意的（えいやう）にされてゐるのを、見（み）てゐるとは何（なん）の事（こつ）ちやい。

ピータ 誰（た）れもお前（まへ）を隨意的（えいやう）には爲（し）やせぬがや。若（も）しも其様（そない）なことがあれば、此（この）利劍（わざもの）を引拔（ひきぬ）かいでかいの。こりや拔（ぬ）かんければならん場合（ばあひ）ぢやとさへ思（おも）うたら、わしや人（ひと）に負（ま）くるこつちやない。

乳母（えゝ、ほんに）／＼、悔（くや）しうて／＼、身體中（からだぢゆう）が顫（ふる）へるわいの。碌（ろく）でなしの和郎（わろ）めが！……（ロミオに對ひて）もし／＼、貴下（こなた）さまえ、最前（さいぜん）も申（まう）しましたが、妾（わし）の姫（ひい）さまが、貴下（こなた）

を搜（さが）して來（こ）いと吩咐（いひつけ）でな、其（その）仔細（わけ）は後（あと）にして、先（ま）づ言（い）うて置（お）くことがござります、若（も）しも貴下（こなた）が、世間（せけん）で言（い）ふやうに、阿呆（あほう）の極樂（ごくらく）へ姫（ひい）さまを伴（つ）れて行（ゆ）かっしゃるやうならば、ほんに／＼、世間（せけん）で言（い）ふ通（とほ）り、不埒（ふらち）な事（こと）ぢや。何故（なぜ）と被言（おっしゃ）りませ、姫（ひい）さまはまだ齡（とし）がゆかつしやらぬによつて、騙（だま）さっしゃるやうであれば、ほんにそれは悪（わる）いこつちや、御婦人（ごふじん）を騙（だま）さっしゃるは卑怯（ひげふ）ぢや、非道（ひだう）ぢや。

ロミオ お乳母（うば）どの、おぬしのお姫（ひい）さんへ殷勤（ねん

ごろ)に傳(つた)へて下(くだ)され。予(わし)は飽迄(あくまで)も言(い)うておく……

乳母 はれ、善(よ)いお仁(ひと)や、ほんに其通(そのとほ)り申(まう)しましよわいな。ほんに、ま、何様(どのやう)に喜(よろこ)ばツしやらう。

ロミオ 其通(そのとほ)りには、何(なに)を? まだ何(なに)も言(い)やせぬのに。

乳母 飽迄(あくまで)も言(い)うて置(お)く、とおツしやつたと言(い)や、それが立派(りっぱ)なお言傳手(ことづて)ぢやがな。ロミオ なう、姫(ひめ)に勸(すす)めて下(くだ)され、此(この)晝過(ひるすぎ)に、何(なん)とか才覺(さいかく)して懺悔式(ざんげしき)



んげしき)に來(こ)らるゝやう。あのロレンス殿(どの)の庵室(あんじつ)で、懺悔(ざんげ)の式(しき)を濟(す)まして婚禮(こんれい)する心(こころ)なれば。こりや骨折賃(ほねをりちん)ぢや。

乳母(うば) いえ、めつさうな。一錢(せん)も戴(いたゞ)きませぬ。

ロミオ まゝ、是非(ぜひ)とも。

乳母(うば) では、此(この)晝過(ひるすぎ)に? む、む、其様(そのやう)にいたしましたよ。

乳母(うば) 行(ゆ)きかくる。

ロミオ あ、これ、お待(ま)ち。やがて、あの寺(てら)の塀外(へいがい)へいそとへ、おぬしに渡(わた)す爲(ため)に、繩梯子(なはばしご)のやうに編(あ)み合(あは)せたものを家來(けらい)に持(も)た

せて遣(や)りませう。それこそは忍(しの)ぶ夜半(やは)に嬉(うれ)しい事(こと)の頂點(ちやうてん)へ此身(このみ)を運(はこ)ぶ縁(えん)の綱(つな)。……さよなら。眞實(しんじつ)を盡(つく)しておくりやれ、きつと骨折(ほねをり)の報(むくひ)はせう。さらば。姫(ひめ)へ宜(よろ)しう傳(つた)へて下(くだ)され。

乳母 御機嫌(ごきげん)やういらせられませい!……あ、もし／＼。  
ロミオ 何(なん)とかお言(い)やったか?

乳母 御家來(ごけらい)は口(くち)の堅(かた)いお人(ひと)かいな? 二人(ふたり)ぎりの祕密(ひみつ)は洩(も)れぬ、三人目(にんめ)が居(を)らねば、と言(い)ひますぞや。

ロミオ 大丈夫(だいぢやうぶ)ぢや、鋼鐵(はがね)のやうに堅(か

た) い男(をとこ) ぢゃ。

乳母 それならば。こちの姫(ひい)さまはな、それは／＼憐(しほ  
ら)しうて……ほんに、ほんに、まだ幼(ちひさ)うて、分別(たわい)  
もないことを言(い)うてゝあつた時分(じぶん)は……お、あのな、  
パリス様(さま)と言(い)うて、お立派(りっぱ)な方(かた)がな、  
どうぞして物(もの)にせうと氣(き)を揉(も)まっしやるのぢゃが、  
あのよな人(ひと)に逢(あ)ふよりは、予(わし)や蟾蜍(ひきがへ  
る)に逢(あ)うたはうが優(まし)ぢゃ、と言(い)うてな、あの蟾  
蜍(ひきがへる)に。予(わし)も折々(をり／＼)は腹(はら)を立  
(た)つても見(み)ますのぢゃ、パリスどの、方(はう)が、ずつと  
好(よ)い男(をとこ)ぢゃと言(い)うてな。すると、眞(ほん)の

事（こと）ぢゃ、嬢（ぢゃう）は眞蒼（まつさを）な顔（かほ）にならっ  
しやる、圖無（づな）い白布（しろぬの）のやうに。え、ロミオと萬迭  
香（ローヅメリ）とは、頭字（かしらじ）が同（おな）じかいな？

ロミオ いかにも。それが、何（なん）としたぞ？ 兩方（りやうほう）  
ともR（アール）ぢゃ。

乳母 はれま、人（ひと）を！ そりや、犬（いぬ）の名（な）ぢゃ  
がな。R（アール）がお前（まへ）の……いやいや、何（なに）か他（ほか）  
の字（じ）に相違（さうゐ）ないわいの。……何（なん）でもな、貴下  
（こなた）と萬迭香（ローズメリ）とが如何（どう）とやらしたといふ、  
何（なん）ぢゃ知（し）らんが、面白（おもしろ）さうな額言（かくげん）  
（格言）とやらを作（つく）らしゃってぢゃ、貴下（こなた）が聞（き）

かッしやれば喜（よろこ）ばッしやらうやうな。

ロミオ 姫（ひめ）に宜（よろ）しう言（い）うて下（くだ）され。  
ロミオ入る。

乳母 はい／＼、申（まう）しましよとも。……ピーター！

ピータ あい／＼！

乳母 先（さき）へ、そして急歩的（とつと）と。

乳母（うば）とピーターと入（はひ）る。

第（だい）五場（ぢやう） 同處（どうしよ）。カピユレットの庭園

（ていゑん）。

ヂュリエット出る。

ヂュリ 乳母(うば)を出(だ)してやった時(とき)、時計(とけい)は九(ここの)つを打(う)つてみた。半時間(はんじかん)で歸(かへ)るといふ約束(やくそく)。若(も)しや逢(あ)へなんだかも知(し)れぬ。いや／＼、さうでは無(な)い。えゝも、乳母(うば)めは跛足(ちんぱ)ぢや！ 戀(こひ)の使者(つかひ)には思念(おもひ)をこそ、思念(おもひ)は殘(のこ)る夜(よる)の影(かげ)を遠山蔭(とほやまかげ)に追退(おひの)ける旭光(あさひ)の速(はや)さよりも十倍(ばい)も速(はや)いといふ。ぢやによつて、戀(こひ)の神(かみ)の御輦(みくるま)は翼輕(はねがる)の鳩(はと)が牽(ひ)き、風(かぜ)のやうに速(はや)いキューピッドにも双(ふた)つの翼(はね)

がある。あれ、もう太陽（たいやう）は、今日（けふ）の旅路（たびぢ）の峠（たうげ）までも達（とゞ）いてゐる。九時（じ）から十二時（じ）までの長（なが）い／＼三時間（じかん）、それぢやのに、まだ歸（かへ）つて來（こ）ぬ。乳母（うば）めに、情（じやう）が燃（も）えてゐたら、若（わか）い温（あたゝ）かい血（ち）があつたら、テニスの球（たま）のやうに、予（わし）が吩咐（いひつ）くるや否（いな）や戀人（こひづと）との許（とこ）へ飛（と）んで行（ゆ）き、また戀人（こひづと）の返辭（へんじ）と共（とも）に予（わし）の手元（てもと）へ飛返（と）びかへ）つて來（き）つらうもの。……あゝ、老人（らうじん）といふものは、死（し）んでゝもゐるかのやうに、太儀（たいぎ）さうに緩漫（のろ／＼）と、重（おも）くるしう、蒼白（あをじろ）う、鉛（なまり）

のやうに……

乳母（うば）がピーターを従（つ）れて出る。

おゝ、嬉（うれ）しや、歸（かへ）つて來（き）た。……なう乳母（うば）いの、如何（どう）ぞいの？ あの方（かた）に逢（あ）やつたかや？……侶（とも）は彼方（あち）へ。

乳母　ピーター。……入口（いりぐち）に控（ひか）へてみや。

ピーター入る。

ヂュリ　さ、乳母（うば）いの。……ま、何（なん）で其様（そのやう）な情（なさけ）ない顔（かほ）してみやる？ 悲（かな）しい消息（しらせ）であらうとも、せめて嬉（うれ）しさうに言（い）うてたも。若（も）し嬉（うれ）しい消息（しらせ）なら、それを其様（そん）な顔（か



ほ)をして弾(ひ)きやるのは、床(ゆか)しい知(し)らせの琴(こと)の調(しら)べを臺無(だいな)しにしてしまふといふもの。

乳母 おゝ、辛度(しんど)！ 暫時(ちいと)まア休(やす)まして下(くだ)され。あゝ、骨々(ほね／＼)が痛(いた)うて痛(いた)うて！ ま、どの位(くらゐ)ほつつきまはったことやら！

ヂュリ 予(わし)の骨々(ほね／＼)を其方(そなた)に與(や)つても、速(はや)う其(その)消息(しらせ)が此方(こつち)へ欲(ほ)しい。これ、どうぞ聞(き)かしたも。なう、乳母(うば)や、乳母(うば)いなう、如何(どう)ぢやぞいの？

乳母 ま、氣忙(きぜは)しい！ 暫時(ちいと)の間(ま)が待(ま)てぬかいな？ 息(いき)が切(き)れて物(もの)が言(い)はれぬ

ではないかいな？

ヂュリ 息(いき)が切(き)れて言(い)はれぬと言(い)やる程(ほど)なら、息(いき)は切(き)れてゐぬ筈(はず)ぢや。何(なん)のかのと言譯(いひわけ)してゐやるのが肝腎(かんじん)の一言(ひとこと)より長(なが)いわいの。これ、吉(きつ)か、凶(きよう)か？

速(はや)う言(い)や。それさへ言(い)うてたもったら、詳細事(くはしいこと)は後(あと)でもよい。速(はや)う安心(あんしん)さしてたも、吉(きつ)か、凶(きよう)か？

乳母(はて、お前(まへ)は阿呆(あほ)らしいお人(ひと)ぢや、あのやうな男(をとこ)を選(えら)ばッしやるとは目(め)が無(な)いのぢや。ロミオ！ ありや不可(いけ)んわいの。面附(つらつき)

こそは誰(た)れよりも見(み)よけれ、脛附(すねつき)が十人並(に  
んなみ)以上(いじやう)ぢや、それから手(て)や足(あし)や胴(ど  
う)やは彼(か)れ此(こ)れ言(い)ふが程(ほど)も無(な)いが、  
外(ほか)には、ま、類(るゐ)が無(な)い。行儀作法(ぎやうぎさ  
はふ)の生粹(きつすゐ)ぢやありやせん「#「ありやせん」はママ」、  
でも眞(ほん)の事(こと)、仔羊(こひつじ)のやうに、温和(おとな  
しい人(ひと)ぢや。さア、小女(いと)よ、信心(しんじん)  
さっしやれ。……え、もう終(す)みましたかえ、お晝(ひる)の食事  
(しよくじ)は？

ヂュリ いゝえ。其様(そんな)事(こと)は、もう夙(とう)に  
知(し)つてゐる。婚禮(こんれい)の事(こと)をば何(なん)と言

(い) うてぢゃ？ さ、それを。

乳母 はれ、頭痛(づつう)がする！ あゝ、何(なん)といふ頭痛(づつう)であらう！ 頭(あたま)が粉※(「くさかんむり／壺」、第4水準2-87-23) (こな／＼)に碎(くだ)けてしまひさうに疼(うづ)くわいの。脊中(せなか)ぢゃ。……そつち／＼。……おゝ、脊中(せなか)が、脊中(せなか)が！ ほんに貴嬢(こなた)が怨(うら)めしいわいの、遠(とほ)い遠(とほ)い處(ところ)へ太儀(たいぎ)な使者(つかひ)に出(だ)さッしやつて「#」出(だ)さッしやつてはママ」、如是(こん)な死(し)ぬるやうな思(おも)ひをさすとは！  
ヂュリ ほんに氣(き)の毒(どく)ぢゃ、氣分(きぶん)が惡(わる)うてはなア。したが、乳母(うば)、乳母(うば)や、乳母(うば)いなう、

何卒（どうぞ）言（い）うてたも、戀人（こひづと）が何（なん）と被言（おツしや）った？

乳母　さいな、あの方（かた）の言（い）はツしやるには、行儀（ぎやうぎ）もよければ深切（しんせつ）でもあり、男振（をとこぶり）はよし、器量人（きりやうじん）でもあり、流石（さすが）に身分（みぶん）のある殿方（とのがた）らしう……お母（かゝ）さまは何處（どこ）にぢや？

ヂュリ　母（はゝ）さまは何處（どこ）にぢや？　母様（はゝさま）は家（うち）にぢや。何處（どこ）に行（ゆ）かしやらうぞ？　何（なに）を言（い）やるぞい！「あの方（かた）が被言（おツしや）るには、身分（みぶん）のある殿方（とのがた）らしう、お母様（かゝさま）は何

處（どこ）にぢや？」

乳母　はれ、まア！　そのやうに熱（あつ）くならツしやるな。これさ、まア、ほんに／＼。それが痛（いた）む節々（ふし／＼）の塗藥（ぬりぐすり）になりますかいの？　これからは自分（じぶん）で使（つか）ひ歩（ある）きをばさっしやつたがよい。

ヂュリ　まア、仰山（ぎやうさん）な騒（さわ）ぎぢや！……これの、ロミオが何（なん）と被言（おツしや）った？

乳母　お前（まへ）今日（けふ）はお參詣（まゐり）に往（い）ても可（よ）いといふお許可（ゆるし）が出（で）ましたかえ？

ヂュリ　あいの。

乳母　では、なう、急（いそ）いでロレンス様（さま）の庵室（あん

じつ)まで往(ゆ)かっしやれ。あそこでお前(まへ)を内室(うちかた)になさるゝ人(ひと)が待(ま)ってぢや。そりやこそ頬邊(ほっぺた)へ放埒(みだら)な血(ち)めが上(のぼ)るわ、所詮(つまり)は何(なに)を聞(き)いても直(すぐ)に眞赤(まっか)にならっしやらうぢやまで。速(はや)うお寺(てら)へ。予(わし)はまた別(べつ)の方(かた)へ往(い)て梯子(はしご)を取(と)って來(こ)ねばならぬ、其(その)梯子(はしご)でお前(まへ)の戀人(こひびと)が、今宵(こよひ)暗(くら)うなるが最後(さいご)、鳥(とり)の巢(す)へ登(のぼ)らっしやるのぢや。予(わし)は只(ただ)もう齷齪(あくせく)とお前(まへ)を喜(よろこ)ばさうと念(おも)うて。したが、やがて夜(よる)になると、お前(まへ)も骨(ほね)が折(を)れう

ぞや。さ、予（わし）は食事（しよくじ）をせう。貴嬢（こなた）は庵室（あんじつ）へ速（はや）うゆかしやれ。

ヂュリ 速（はや）う其（その）幸福（しあはせ）に！……乳母（うば）や、きげんよう。

二人（ふたり）とも入る。

第（だい）六場（ぢやう） 同處（どうしょ）。ロレンス法師（ほふし）の庵室（あんじつ）。

ロレンス法師（ほふし）が先（さき）に、ロミオ従（つ）いて出る。

ロレ 諸天善神（しよてんぜんじん）、願（ねが）はくは此（この）



神聖（しんせい）なる式（しき）に笑（ゑ）ませられませい、ゆめ後日（ごじつ）悲哀（かなしみ）を降（くだ）さしまして御譴責（ごけんせき）遊（あそ）ばされますな。

ロミオ アーメン、アーメン！ 如何（どん）な悲哀（かなしみ）が來（こ）ようとも、姫（ひめ）の顔（かほ）を見（み）る嬉（うれ）しさの其（その）刹那（せつな）には易（かへ）られない。神聖（たふと）い語（ことば）で二人（ふたり）の手（て）を結（むす）び合（あ）はして下（くだ）されば、戀（こひ）を亡（ほろぼ）す死（し）の爲（ため）に此身（このみ）が如何様（どのやう）にならうとまゝ。妻（つま）と呼（よ）ぶことさへ叶（かな）へば、心殘（こゝろのこ）りはない。

ロレ さうした過激（くわげき）の歡樂（くわんらく）は、とかく過

激（くわげき）の終（をはり）を遂（と）ぐる。火（ひ）と煙硝（えん  
せう）とが抱合（だきあ）へば忽（たちま）ち爆發（ばくはつ）するが  
やうに、勝誇（かちほこ）る最中（さなか）にでも滅（ほろ）び失（う）  
せる。上（うへ）なう甘（あま）い蜂蜜（はちみつ）は旨過（うます）  
ぎて厭（いや）らしく、食（く）うて見（み）ようといふ氣（き）が鈍（に  
ぶ）る。ぢやによつて、戀（こひ）も程（ほど）よう。程（ほど）よい  
戀（こひ）は長（なが）う續（つゞ）く、速（はや）きに過（す）ぐる  
は猶（なほ）遅（おそ）きに過（す）ぐるが如（ごと）しぢや。  
ヂュリエット出る。

それ、姫（ひめ）が來（わ）せた。おゝ、あのやうな輕（かる）い足（あ  
し）では、いつまで踏（ふ）むとも、堅（かた）い石道（いしみち）は

磨（へ）るまいわい。戀人（こひびと）は、夏（なつ）の風（かぜ）に  
戲（たはむ）れ遊（あそ）ぶあの埒（らち）もない絲遊（かげろふ）に  
騎（のツ）かっても、落（お）ちぬであらう。さほどに輕（かる）いも  
のが空（あだ）な歡樂（たのしみ）！

ヂュリ（ロレンスを抱きて）教父（けふふ）さま、ごきげんよろしう！  
ロレ 其（その）お返禮（かへし）は、二人分（ふたりぶん）、ロミ  
オの口（くち）から。

ヂュリ（ロミオを抱きて）ではロミオにも。でないとお返禮（かへし）  
が多過（おほすぎ）よう。

ロミオ あゝ、ヂュリエット、今日（けふ）を嬉（うれ）しい、かたじ  
けないと思（おも）ふ心（こころ）が予（わし）と同（おな）じに滿腔

(いっぱい)なら、しかもそれを現(あらは)す力(ちから)が予(わし)よりも多(おほ)いなら、今日(けふ)の出會(であひ)で二人(ふたり)が感(かん)ずる此(この)夢(ゆめ)のやうな嬉(うれ)しさを、床(ゆか)しい天樂(てんがく)のやうな卿(そもじ)の聲(こゑ)で、四邊(あたり)の空氣(くうき)も融解(とろ)くるばかりに、なつかしう奏(かな)で下(くだ)され。

ヂュリ 内實(なかみ)の十分(ぶん)な思想(しさう)は、言葉(ことば)の花(はな)で飾(かざ)るには及(およ)ばぬ。算(かぞ)へらるゝ身代(しんだい)は貧(まづ)しいのぢや。妾(わし)の戀(こひ)は、分量(ぶんりやう)が大(おほ)きう／＼なつたゆゑに、今(いま)は其(その)半分(はんぶん)をも計算(かんぢやう)することが

出来（でき）ぬわいの。

ロレ さゝ、予（わし）と一しよにござれ。速（はや）う濟（すま）してのけう。慮外（りよぐわい）ながら、尊（たふと）い教會（けうくわい）が二人（ふたり）を一人（ひとり）に合體（がったい）さするまでは、さし對（むか）ひでゐてはなりませんのぢや。

ロレンスに従（つ）いて二人（ふたり）とも入る。

### 第三幕

第(だい)一場(ぢやう) ※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。  
街上(がいじやう)。

マーキューシオー先(さき)に、ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ローリオ、侍童(こわらは)、下人等(しもべら)従(つ)いて出(で)る。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) マーキューシオーどの、もう歸(かへ)らう。暑(あつ)くはある、カピユレット家(け)の奴等(やつら)が出歩(であふ)である、いでもゐる、出會(でつくは)したが最後(さい)

ご、鬭争(けんくわ)をせねばなるまい。かういふ暑(あつ)い日(ひ)には、えて氣(き)ちがひめいた血(ち)が騒(さわ)ぐものぢや。

マーキュ おい、酒亭(さかや)へ入(はひ)った當座(たうざ)には、劍(けん)を食卓(テーブル)の下(した)へ叩(た)きつけて「神(かみ)よ、願(ねが)はくは此奴(こいつ)に必要(ひつえう)あらしめたまふな」なぞといつてゐながら、忽(たちま)ち二杯目(はいめ)の酒(さけ)が利(き)いて、何(なん)の必要(ひつえう)も無(な)いのに、給仕人(きふじにん)を敵手(あひて)に引(ひ)っこぬく手合(てあひ)があるが、足下(おぬし)が其(その)仲間(なかま)ぢや。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 予(わし)がそんな仲間(なかま)か？

マーキュ さゝ、足下（おぬし）はイタリーで誰（た）れにも負（ひけ）を取（と）らぬ易怒男（おこりむし）ぢや、直（ぢき）に怒（おこ）るやうに仕向（しむ）けられる、仕向（しむ）けられるれば直（すぐ）怒（おこ）る。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）して何（なん）にするんぢや？

（此（この）原詞（げんし）は “And what to?” 「して何（なん）の爲（ため）に？」といふ義（ぎ））。マーキュショーはそれをわざと “And what two?” の意味（いみ）に取（と）りて例（れい）の駄洒落（だじゃれ）のキツカケとする。）

マーキュ 何人（なんにん）？ いや、足下（おぬし）のやうなのが二人（ふたり）とゐたら、忽（たちま）ち殺（ころ）しあうてしまはうから、



二人（ふたり）ともみなくなろう。はて、足下（おぬし）などは髭（ひげ）の毛（け）一筋（すぢ）の多（おほ）い少（すく）ないが原（もと）でも叩（たゝ）き合（あ）ふ。或（ある）ひは足下（おぬし）の目（め）の色（いろ）が榛色（はしばみいろ）ぢやによつて、そこで相手（あひて）が榛（はしばみ）の實（み）を啗割（かみわ）つたと言（い）ふだけの事（こと）で、鬪争（けんくわ）を買（か）ひかねぬ。その眼（まなこ）でなうて、そんな鬪争（けんくわ）を買（か）ふ眼（まなこ）が何處（どこ）にあらう？ 足下（おぬし）の頭（あたま）には鶏卵（たまご）に黄蛋（きみ）が充實（つま）つてゐるやうに、鬪争（けんくわ）が充満（いっぱい）ぢや、しかも度々（たび／＼）打撲（どや）されたので、少許（ちつと）腐爛氣味（くされぎみ）ぢやわい。足下（おぬし）は、街中（まち

なか)で咳(せき)をして足下(おぬし)の飼犬(かひいぬ)の日向(ひ  
なた)ぼこりを驚(おどろ)かしたと言(い)うて、或(ある)男(を  
とこ)と鬪争(けんくわ)をした。復活祭前(イースターまへ)に新調  
胴衣(したておろし)を着(き)たと言(い)うて、或(ある)裁縫師(し  
たてや)と拵(つか)み合(あ)ひ、新(あたらし)しい靴(くつ)に古(ふ  
る)い紐(ひも)を附(つ)けをつたと言(い)うて、誰某(たれやら)  
とも争論(いが)み合(あ)うた。それでみて俺(おれ)に鬪争(けん  
くわ)をすまいぞと異見(いけん)めいたことを被言(おし)やるのか?  
ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) 予(わし)が足下(きみ)ほど  
鬪争好(けんくわずき)と言(い)ふことが實(ぢやう)なら、無條件(ろ  
は)で此(この)命(いのち)を一時間位(じかんぐらゐ)は賣(う)っ

てやってもよいわい。

マーキユ　ろはぢや！　ろツはツは！　ろツはツは！（と笑ふ）。

チツバルトを先（さき）に、カピユレーットの黨人（たうじん）出る。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）　や、カピユレーットのやつらが  
來（き）をつた。

マーキユ　へん、かまふものかえ。

チツバ　俺（おれ）に附着（くつつ）いて來（こ）う、彼奴等（きやつ  
ら）と談（だん）じてくれう。……（ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-  
85）　ーリオーらに）諸氏（かた／＼）、機嫌（きげん）よう。一言（ごん）  
申（まう）したうござる。

マーキユ　ただ一言（ごん）でござるか？　何（なに）かお添（そ）へ

なさい。一言(ごん)兼(けん)一撃(げき)としたら如何(どう)ぢや？  
チツバ 機會(きつかけ)さへ與(おこ)しやらば、何時(いつ)でも  
敵手(あひて)になり申(まう)さう。

マーキュ 此方(こち)から與(おこ)さねば、其方(そち)では機會  
(きつかけ)が出来(でき)ぬと被言(おしゃ)るか？

チツバ マーキュシオー、足下(おぬし)は平生(ふだん)あのロミ  
オと調子(てうし)を合(あは)せて……

マーキュ 何(なん)ぢや、調子(てうし)を合(あは)せて？ 吾等(わ  
れら)を樂人扱(がくにんあつか)ひにするのか？ 樂人扱(がくにん  
あつか)ひに爲(す)りや、耳(みみ)を顛覆(でんぐりかへ)らする  
音樂(おんがく)を聞(きか)す。準備(ようい)せい。(劍に手を掛けて)

乃公（おれ）の胡弓（こきう）は此劍（これ）ぢや、今（いま）に足下（おぬし）を踊（をど）らせて見（み）せう。畜生（ちくしやう）、調子（てうし）を合（あは）す！

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）こゝは往來（わうらい）ぢや、どうぞ閑寂（ひそか）な處（ところ）で冷靜（しづか）に談判（だんぱん）をするか、さもなれば別（わか）れたがよい。衆人（ひと）が見（み）るわ。

マーキュ 見（み）る爲（ため）の眼（まなこ）ぢや、見（み）るがえいわ。他（ひと）が如何（どう）思（おも）はうと介意（かま）ふものかえ。

ロミオ出る。

チツバ 足下（おぬし）とは中直（なかなかほ）りぢや。あそこへ奴（やつ）が來（き）をつた。

マーキュ 奴（やつ）ぢや？ へん、ロミオが足下（おぬし）の奴（やつ）こ（こ）なものか？ 何時（いつ）足下（おぬし）が給服（しきせ）を着（き）せた？ はて、先（さき）に立（た）つて決闘場（ぼしよ）へ行（ゆ）きゃれ、ロミオも隨行（とも）をせう。それが奴（やつ）の役（やく）なら、ロミオは足下様（おぬしさま）のお抱奴（かゝへやつこ）ぢや。

チツバ （ロミオに對ひて）やい、ロミオ、足下（おぬし）に對（たい）する俺（おれ）が情合（じやうあひ）からは是限（これぎり）しか言（い）へぬ。……汝（おのれ）は惡漢（あくたう）ぢや。

ロミオ チツバルト、足下（きみ）を愛（あい）する仔細（しさい）があつ

て、怒（いか）らねばならぬ其（その）挨拶（あいさつ）をもわるうは  
取（と）らぬ。予（わし）は悪漢（あくたう）ではない。さらば、足下  
（きみ）は予（わし）を知（し）らぬのぢや。

ロミオ行（ゆ）きかくる。

チツバ 小僧（わっぱ）め、それが無禮（ぶれい）の辨解（いひわけ）  
にはならぬぞ。戻（もど）って拔劍（ぬ）け。

ロミオ 予（わし）は無禮（ぶれい）をした覺（おぼ）えはない、いや、  
其（その）仔細（しさい）の分（わか）るまでは逆（とて）も會得（ゑ  
とく）のゆかぬ程（ほど）に予（わし）は足下（きみ）を愛（あい）し  
てゐるのぢや。カピューレットどの、予（わし）は今（いま）カピュー  
レットといふ其（その）名前（なまへ）を我名（わがな）も同様（どう

やう)に大切(たいせつ)に思(おも)うてゐる、まゝ、堪忍(かんにん)さつしやれ。

マーキユ おゝ、柔弱(てぬる)い、不面目(ふめんもく)な、卑劣(ひれつ)な降参(かうさん)！ 此上(このうへ)は劍(けん)あるのみぢや。(劍を抜く)。チツバルト、いやさ、猫王(ねこまた)どの、お往(ゆ)きやらうか？

チツバ 何(なん)ぞ俺(おれ)に用(よう)があるか？

マーキユ 猫王(ねこまた)どの、九箇(こゝのつ)あるといふ足下(おぬし)の命(いのち)が只(たった)一(ひと)つだけ所望(しよもう)したいが、其後(そののち)の舉動次第(しこなし)で残(のこ)る八箇(やつつ)も叩(たゝ)き挫(みじ)くまいものでもない。耳形(みゝ



がた)の※(「木十羈」の「馬」に代えて「月」、第4水準2-15-85)(つか)を掴(つか)んで其(その)劍(けん)をお抜(ぬ)きゃれ、速(はや)うせぬと乃公(おれ)の劍(けん)が足下(おぬし)の耳元(みもと)へお見舞(みま)ひ申(まう)すぞ。

チツバ 合點(がってん)だ。

劍(けん)を抜(ぬ)く。

ロミオ マーキューショー君(くん)、まア／＼、劍(けん)を。

マーキュ さ、突(つ)いて來(こ)い。

チツバルトとマーキューショーと鬪(たゝか)ふ。

ロミオ 拔劍(ぬ)け、ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ーリオー、二人(ふたり)の武器(えもの)を叩(たゝ)き落(おと)さう。これ

さ／＼、恥（はぢ）ぢや／＼、亂暴（らんぼう）をすな？ チツバルト、  
マーキユーシオー、領主（との）の嚴命（げんめい）では無（な）いか、  
※（濁点付き片仮名エ、1-7-84）ローナの街頭（まちなか）で鬭諍（たゝ  
かひ）をしてはならぬ筈（はず）ぢや。これさ、チツバルト！ マーキユー  
シオー！

此（この）立※（「五十回」、第4水準2-12-11）（たちは）りの間（あ  
ひだ）にマーキユーシオーはチツバルトに突かるゝ。

チツバルト及（およ）び其（その）黨人（たうじん）入る。

マーキユー やられた！ 畜生（ちくしやう）、兩方（りやうほう）の奴等（やつ）や  
つらめ！ やられたわい。去（い）にをつたか、彼奴（きやつ）め無  
創（むきず）で？

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) や、手(て)を負(お)うたか足下(きみ)は？

マーキユ 唯(うん)、唯(うん)、引搔(ひつか)かれた／＼。はて、これで十分(ぶん)ぢゃ。侍童(こやつこ)めは何處(どこ)にをる？

小奴(やつこ)、はよ往(い)って下科醫者(げくわいしゃ)を呼(よ)んで來(こ)い。

ロミオ これ、氣(き)を確(たしか)に。手傷(てきず)は決(けつ)して重(おも)うはない。

マーキユ さうぢゃ。井戸(ゐど)ほどに深(ふか)くも無(な)ければ、教會(けうくわい)の入口程(いりぐちほど)には廣(ひろ)くもない、が十分(ぶん)ぢゃ、役(やく)には立(た)つ。明日(あす)訪(た

づ)ねてくれい、すれば墓(はか)の中(なか)から御挨拶(ごあいさつ)ぢや。先(ま)づ乃公(おれ)の一生(しやう)も、誓文(せいもん)、總仕舞(そうじまひ)が澄(す)んでしまった。……畜生(ちくしやう)、兩方(りやうほう)の奴等(やつら)め!……うぬ! 犬(いぬ)、鼠(ねずみ)、※(「鼬」の「由」に代えて「奚」、第4水準29469)鼠(はつかねずみ)、猫股(ねこまた)、人間(にんげん)を引搔(ひっか)いて殺(ころ)しをる! 一二三(ひふうみい)で劍(けん)を使(つか)ふ駄法螺吹家(だばらふき)め! 破落戸(ごろつき)、悪黨(あくたう)! 何(なん)で真中(まんなか)へ飛込(とびこ)んだんぢや足下(おぬし)は! 足下(おぬし)の腕(うで)の下(した)でやられた。ロミオ みんな爲(ため)を思(おも)うてしたのぢや。

マーキュ　おい、ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオー、何處（どこ）ぞ家（うち）の中（なか）へ伴（つ）れて行（い）ってくれ、速（はや）うせぬと氣絶（きぜつ）しさうぢや。畜生（ちくしやう）、兩方（りょうほう）はうはう）の奴等（やつら）！　とう／＼俺（おれ）を蛆蟲（うじむし）の餌食（えじき）にしてしまひをつた。參（まゐ）つた、しっかり參（まゐ）つた。畜生（ちくしやう）、兩方（りょうほう）の奴等（やつら）！　ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオーに介抱（かいほう）せられて、マーキューシオー入（はひ）る。

ロミオ　領主（りやうしゆ）には近親（きんしん）たる信友（しんいう）のマーキューシオーが俺故（おれゆゑ）あのやうな重傷（ふかで）を負（お）ひ、俺（おれ）はまた只（ただ）一時程（ときほど）縁者（えんじや）

となつたあのチツバルト故(ゆゑ)に汚名(をめい)を受(う)けた。おゝ、  
ヂュリエット、卿(おまひ)の艶麗(あてやか)さが俺(おれ)を柔弱  
(にうじゃく)にならせて、日頃(ひごろ)鍛(きた)うておいた勇氣(ゆ  
うき)の鋒(きつさき)が鈍(にぶ)つてしまつた。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85)ーリオア又(また)出る。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) おゝ、ロミオ／＼、マーキユー  
シオーはお死(し)にやつたぞよ！ あの勇敢(ゆうかん)な魂(たま  
しひ)は氣短(きみじか)に此世(このよ)を厭(いと)うて、雲(く  
も)の上(うへ)へ昇(のぼ)つてしまつた。

ロミオ けふの此(この)惡運(あくうん)は此儘(このまゝ)では濟  
(す)むまい。これは只(ただ)不幸(ふしあはせ)の手始(てはじめ)、

つゞく不幸（ふかう）が此（この）結局（しまつ）をせねばならぬ。

チツバルト又（また）出る。

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）我武者（がむしゃ）のチツバルトめが又（また）來（き）をつた。

ロミオ なに、無事（ぶじ）で、勝誇（かちほこ）って？ マーキュー

シオーが殺（ころ）されたのに！ 此上（このうへ）は禮儀（れいぎ）

も寛大（くわんだい）も天外（てんぐわい）に抛（なげう）つた。※（「陥

のつくり＋炎」、第〇水準「IGNON」（ほのほ）を眼（まなこ）の忿怨神（い

かりのかみ）よ、案内者（あんないじゃ）となつてくれい！……（チツ

バルトに對ひ）やい、チツバルト、先刻（せんこく）足下（おぬし）が

俺（おれ）にくれた「惡漢（あくたう）」の名（な）は今（いま）返（か

へ)す、受取(うけと)れ。マーキューシオーの魂(たましひ)がつい  
頭上(とうじやう)に立迷(たちまよ)うて同伴者(どうばんじゃ)を  
求(もと)めてゐる、足下(おぬし)か、俺(おれ)か、兩人(ふたり)  
ながらか、同伴(どうばん)をせねばならぬぞ。

チツバ 青(あを)二才(さい)どの、最初(さいしよ)同伴(つれだ)つ  
て來(き)た足下(おぬし)ぢや、冥土(あのよ)へ行(ゆ)くも一(しよ)  
にお往(ゆ)きやれ。

ロミオ それは此劍(これ)が決(き)めるわ。

二人(ふたり)鬪(たゝか)ふ。チツバルト倒(たふ)るゝ。

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) ロミオ、速(はや)う！ 速(は  
や)う逃(に)げた！ あれ、市人(まちびと)が騒(さわ)ぎはじむ



る。チツバルトは落命（らくめい）ぢや。狼狽（ろうた）へてゐるところでない。捕（とら）へられたならば、領主（りやうしゅ）は死罪（しざい）を宣告（せんこく）せう。速（はや）う落（お）ちた、速（はや）う／＼！

ロミオ おゝ、俺（おれ）や運命（うんめい）の玩弄物（もてあそび）ぢやわい！

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、一七〇五） おい、何（なに）をしてゐるのぢや？  
ロミオ入る。

市人等（まちびとら） 出る。

甲市人 マーキューシオーを殺（ころ）した奴（やつ）は何方（どちら）へ逃（に）げました？ 人殺（ひとごろ）しのチツバルトは何方（どつ

ち)へ逃(に)げました?

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、1-7-85) そこにゐるのがチツバルトでござる。

甲市人 ござれ、吾等(われら)と一しよに。御領主(ごりやうしゆ)の命(おほせ)でござる、ござれ。

此時(このとき)、領主(りやうしゆ)公爵(こうしやく)、多勢(おほぜい)の従者(じゆうしや)を引連(ひきつ)れて出る。モンタギュー長者夫婦(ちやうじゃふうふ)、カピューレット長者夫婦(ちやうじゃふうふ)、其他(そのた)多勢(おほぜい)出る。

領主 その不埒(ふらち)な争鬪(さうとう)を始(はじ)めた者共(ものども)は何方(いづれ)にをる?

ベン※(濁点付き片仮名ヲ、17-85) 憚(はゞか)りながら、此(この)不運(ふうん)なる騷擾(さうぜう)のあさましき経緯(ゆくたて)は手前(てまへ)が言上(ごんじやう)いたしませう。それに倒(たふ)れをりまする男(をとこ)が御親戚(ごしんせき)のマーキューシオーどのを殺害(せつがい)しましたるをロミオと申(まう)す若人(わか)うど)が討取(うちと)つてござります。

カピ妻(な)に、チツバルト！ おゝ、わしの甥(をひ)の、弟(おとうと)の子(こ)の！ おゝ、御領主(とのさま)！ おゝ、甥(をひ)よ！ わが夫(つま)！ おゝ、大事(だいじ)の、親族(うから)の血汐(ちしほ)が流(なが)されてゐる！ 公平(こうへい)な御領主(ごりやうしゆ)さま、モンタギューの血(ち)を流(なが)して吾

等（われら）のを償（つぐな）うて下（くだ）さりませい。おゝ、甥（をひ）よ／＼！

領主　ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオーよ、此（この）無慚（むざん）な鬪諍（とうじやう）を始（はじ）めたのは誰（た）れぢや？

ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）　チツバルトにござります、ロミオに殺（ころ）されたましたる。ロミオは言葉（ことば）穩（おだや）かに、此（この）争端（さうたん）の取（とる）に足（た）らぬ由（よし）を反省（はんせい）させ、二（ふた）つには殿（どの）のお怒（いかり）を思（おも）ひやれ、と聲色（せいしよく）を和（やは）らげ、膝（ひざ）を曲（ま）げて、さま／＼に申（まう）しましたなれども、中裁（ちゆう

うさい)には耳(み)を假(か)しませぬチツバルト、理不盡(りふじん)なる怒(いかり)の切先(きつさき)、只(ただ)一突(ひとつつき)にとマーキューシオー殿(どの)の胸元(むなもと)をめがけて突(つ)いてかゝりまする、此方(こなた)も同(おな)じく血氣(けつき)の勇士(ゆうし)、なにを小才覺(ちよこざい)など立向(たちむか)ひ、氷(こほり)の死(し)の手(て)をば引外(ひっぱづ)して右手(めで)に附入(つけい)りまする手練(しゅれん)の切先(きつさき)、それを撥反(はねかへ)すチツバルト。ロミオは其時(そのとき)聲(こゑ)高(たか)く「お待(ま)ちやれ、兩氏(かた)！ 退(ひ)いた／＼！」といふより速(はや)く劍(けん)を拔(ぬ)いて、その怖(おそ)ろしい切先(きつさき)をば、叩伏(たゝきふ)せ／＼、二

人（にん）が間（あひだ）に割（わ）って入（い）る、腕（かひな）の下（した）よりチツバルトが突出（つきだ）しましたる毒刃（どくじん）に、マーキューシオーどのは敢無（あへな）い最期（さいご）。さて、チツバルトは其儘（そのまゝ）一旦（たん）逃去（にげさ）りましたが、やがて又（また）取（と）って返（かへ）すを、今（いま）や復讐（ふくしう）の念（ねん）に満（み）ちたるロミオが見（み）るよりも、電光（でんくわう）の如（ごと）く切（き）ってかゝり、引分（ひきわ）けまする間（ひま）さへもござらぬうちに、チツバルトは突殺（つきころ）され、倒（たふ）るゝ途端（とたん）に身（み）を翻（ひるがへ）し、ロミオは逃去（にげさ）ってござりまする。此儀（このぎ）相違（さうゐ）あらば、ベン※（濁点付き片仮名ヲ、1-7-85）ーリオーが命（いのち）を

召(め) されませう。

カピ妻 此(この) 仁(じん) はモンタギューの親戚(しんせき) ゆゑ、  
臆(おそ) 心(こころ) (ひいきごころ) がさもない事(こと) を申(まう) させませぬ。

此(この) 不正(ふせい) な争鬪(たゝかひ) には二十人餘(にんよ)  
も關係(かゝづら) うて只(ただ) 一人(ひとり) を殺(ころ) した  
に相違(さうゐ) ござりませぬ。殿(との) さまに願(ねが) ひまする、  
是非(ぜひ) ともお成敗(せいばい) の下(くだ) さりませぬ。ロミオ  
はチツバルトを殺(ころ) したからは、生(いか) してはおかれませぬ。  
領主(りやうしゆ) ロミオはチツバルトを、チツバルトはマーキューシオーを殺(ころ)  
したとすれば、マーキューシオーの血(ち) を償(つぐな) ふべき  
者(もの) は誰(た) れぢや？

モン長 それはロミオではござりませぬ、彼(か)れはマーキューシオー  
どの、親友(しんいう)でござる。倅(せがれ)が曲事(きよくじ)は  
國法(こくはふ)によつて絶(た)たるべきチツバルトの命(いのち)  
を絶(た)つたまで、ござります。

領主 其(その)曲事(きよくじ)ゆゑに、即刻(そつこく)追放(つ  
みはう)を申附(まうしつ)くる。汝等(なんぢら)の偏執(へんしふ)  
に予等(われら)までも卷込(まきこ)まれ、其(その)粗暴(そぼう)  
の鬪諍(とうじやう)によつて我(わが)血族(けつぞく)の血汐(ち  
しほ)を流(なが)した。わが此(この)不幸(ふかう)を汝等(なん  
ぢら)にも悔(くや)ます爲(ため)、きびしい料料(くわれう)を課  
(くわ)さうずるわ。陳辯(いひわけ)も分※(「足へん十流のつくり」、



第4水準 2-89-31) (ぶんそ) も聽(き)かぬ。涙(なみだ)も祈禱(きとう)も罪(つみ)をば贖(あがな)はぬぞよ。それゆゑに何(なに)も申(まう)すな。急(いそ)ぎロミオを退去(たちさ)らせい。さもなうて見附(みつ)けられなば、其時(そのとき)が即(やが)て最期(さいご)ぢや。此(この)死骸(しがい)を荷(にな)ひゆきて、予(よ)が命(めい)を待(ま)て。人殺(ひとごろ)しを憫(あはれ)むは人(ひと)を殺(ころ)すにひとしいわい。

第(だい)二場(ぢやう) 同處(どうしょ)。カピュレットの庭園(ていゑん)。

ヂュリエット出る。

ヂュリ 驅(か)けよ速(はや)う、火(ひ)の脚(あし)の若駒(わ  
かごま)よ、日(ひ)の神(かみ)の宿(やど)ります今宵(こよひ)  
の宿(やど)へ。フェートンのやうな御者(ぎよしゃ)がゐたなら、西(に  
し)へ／＼と鞭(むち)をあてゝ、すぐにも夜(よる)を將(つ)れて  
來(こ)うもの、曇(くも)った夜(よる)を。隙間(すきま)もなう  
黒(くろ)い帳(とばり)を引渡(ひきわた)せ、戀(こひ)を助(たす)  
くる夜(よる)の闇(やみ)、其(その)闇(やみ)に町(まち)の者(もの)  
の目(め)も閉(ふさ)がれて、ロミオが、見(み)られもせず、噂(う  
はさ)もされず、予(わし)の此(この)腕(かひな)の中(なか)へ  
飛込(とびこ)んでござらうやうに。戀人(こひごと)は其(その)麗

(うるは) しい身(み)の光明(ひかり)で、戀路(こひぢ)の闇(やみ)をも照(て)らすといふ。若(も)し又(また)戀(こひ)が盲(めくら)ならば、夜(よる)こそ戀(こひ)には一段(だん)と似合(にあ)ふ筈(はず)。さア、來(き)やれ、夜(よる)よ、黒(くろ)づくめの服(きもの)を被(き)た、見(み)るから眞面目(まじめ)な、嚴格(いかめ)しい老女(らうぢよ)どの、速(はや)う來(き)て教(を)しへてたも、清淨無垢(しやうじやうむく)の操(みさを)を二(ふた)つ賭(か)けた此(この)勝負(しょうぶ)に負(ま)ける工夫(くふう)を教(を)しへてたも。汝(そなた)の黒(くろ)い外套(マントル)で頬(ほ)に羽(は)ばたく初心(うぶ)な血(ち)をすツぽりと包(つ)んでたも、すれば臆病(おくびやう)な此(この)心(こゝ)

ろ)も、見(み)ぬゆゑに強(きつ)うなつて、何(なに)するも戀(こひ)の自然(しぜん)と思(おも)ふであらう。夜(よる)よ、來(き)やれ、速(はや)う來(き)やれ、ローミオー！ あゝ、夜(よる)の晝(ひる)とはお前(まへ)の事(こと)ぢや。夜(よる)の翼(つばさ)に降(お)りたお前(まへ)は、鴉(からす)の背(せ)に今(いま)降(ふ)りかゝる其(その)雪(ゆき)の白(しろ)う見(み)ゆるよりも白(しろ)いであらう。速(はや)う來(こ)い、やさしい、懷(なつか)しい夜(よる)の闇(やみ)、さ、予(わし)のロミオを賜(たま)もれ。ロミオがお死(し)にやれば、汝(そち)に遣(や)らう程(ほど)に、細截(きりこまざ)いて星(ほし)にせい、したら大空(おほぞら)が見(み)かはすばかり美(うつく)しうなつて、世界中(せかいぢゆう)

の者（もの）が夜（よる）に惚（ほ）れ、もう誰（た）れもあの爛々（き）ら／＼した太陽（たいやう）を拜（をが）まぬやうにもなるであらう。おゝ、戀（こひ）の屋敷（やしき）は買（か）うたれど、おのが住居（すまひ）にはまだならぬ、身（み）は人（ひと）に賣（う）ったれど、まだ賞翫（しやうくわん）はして貰（もら）へぬ。あゝ、待（ま）つ間（ま）がもどかしい、祭（まつり）の前（まへ）の晩（ばん）に氣（き）をいらつ子供（こども）のやうに、製（こしら）へて貰（もら）うた晴着（はれぎ）はあつても、被（き）ることが成（な）らぬので。……おゝ、あれ、乳母（うば）が。きつと消息（しらせ）ぢや。ロミオの名（な）をでも告（つ）ぐる舌（した）は天人（てんにん）の聲（こゑ）と聞（き）こ（ゆる。……これ、乳母（うば）、何（なん）の消息（しらせ）ぢや？

持(も)つてゐやるは何(なん)ぢや？　ロミオが取(と)つて來(こ)いと言(い)やった綱(つな)かや？

乳母　あい／＼、綱(つな)ぢや。

綱(つな)を抛出(はふりだ)す。

ヂュリ　あゝ、まア！　何事(なにごと)が起(おこ)つたのぢや？

何(なん)で其方(そなた)は手(て)を絞(しぼ)るのぢや？

乳母　あゝ、かなしや！　死(し)なしやつた／＼！　もう無効

(だめ)でござります、もう無効(だめ)でござります。あゝ、かなしや！

……逝(い)なしやつた、殺(ころ)されさつしやつた、死(し)なしやつた！

ヂュリ　え、それほどに天(てん)が無慈悲(むじひ)か！

乳母　天(てん)は如何(どう)あらうと、ロミオは無慈悲(むじひ)ぢや。おゝ、ロミオどのが、ロミオどのが！……誰(た)れが思(おも)も)ひがけうぞい？　ロミオどのが！

ヂュリ　何(なん)で予(わし)に氣(き)を揉(もま)すのぢや？

其様(そのやう)な怖(おそろ)しい唸(うな)り聲(ごゑ)は地獄(ぢごく)でなうては聞(き)かれぬ筈(はず)ぢや。ロミオが自害(じがい)でもなされたか？　これ、唯(あい)と言(い)って見(み)や、その唯(あい)といふ一言(ひとこと)が、只(ただ)一目(ひとめ)で人(ひと)を殺(ころ)す毒龍(コカトリス)の目(め)にもまして、怖(おそろ)しい憂目(うきめ)を見(み)する。其様(そのやう)な羽目(はめ)とならば、予(わし)の身(み)は最早(もう)駄目(だめ)ぢや。

これ、お死（し）にやつたが實（ぢやう）ならば、唯（あい）と言（い）や。さうでなくば否（いな）と言（い）や。たった一言（ひとこと）一言（ふたこと）で此身（このみ）の生死（しやうし）が決（きま）るのぢや「#「決（きま）るのぢや」はママ」。

乳母 其（その）創（きず）を見（み）ましたが、此眼（このめ）で見（み）ましたが……南無（なむ）さんぼう！……ちようど此（この）お立派（りっぱ）な胸元（むなもと）に。いた／＼しい、無慚（むざん）な、いた／＼しい死顔（しにがほ）。蒼白（あをじろ）う、灰（はひ）のやうに蒼白（あをじろ）うなつて、血（ち）みどろになつて、どこもどこも血（ち）が凝（こご）りついて。見（み）ると其儘（そのまゝ）、わしや氣（き）を失（うし）なうてしまひましたわいの。



ヂュリ おゝ、裂(さ)けよ！ 此(この)胸(むね)よ！ 破産(は  
さん)した不幸(みじめ)な心(こゝろ)よ、一思(ひとおも)ひに裂  
(さ)けてしまふてくれい！ 目(め)も此上(このうへ)は牢(らう)  
へ入(はひ)れ、もう自由(じいう)を見(み)るな！ 穢(けがらは)  
しい塵芥(ちりあくた)め、元(もと)の土塊(つちくれ)へ歸(かへ)  
りをれ、活(い)きて働(はたら)くには及(およ)ばぬわい、ロミオ  
と一しよに同(おな)じ枢車(ひつぎ)の積荷(つみに)となりをれ！  
乳母 おゝ、チツバルトどの、チツバルトどの、此上(このうへ)も  
ない頼(たの)もしいお方(かた)であつたに！ おゝ、お懇(ねんご  
ろ)なチツバルトどの！ お立派(りっぱ)なお方(かた)！ お前(ま  
へ)が亡(な)くならつしやるのを生(い)きてゐて見(み)ようとは！

ヂュリ や、こりや、風向（かざむき）が變（ちが）うたわ、如何（どう）した暴風雨（あらし）ぢや？ ロミオが殺（ころ）されて、そしてチツバルトもお死（し）にやったか？ 大事（だいじ）な従兄（いとこ）も、尚（な）ほ大事（だいじ）なロミオどのも？ もしさうならば、大審判日（おほさばきのひ）の喇叭手（らっぱしゅ）よ、世（よ）は最早（もう）絶滅（をはり）ぢやと宣告（せんこく）せい！ あの二人（ふたり）が逝（い）にやったなら、生（い）きてゐる甲斐（かひ）はない！

乳母　チツバルトどのはお死（し）にやって、ロミオどのは追放（つみはう）ぢや。下手人（げしゅにん）のロミオどのは追放（つみはう）にならッしやつたのぢや。

ヂュリ おゝ／＼！……あのロミオの手（て）でチツバルトを？

乳母 さよぢや／＼。あゝ／＼、さよぢやわいの！

ヂュリ おゝ、花（はな）の顔（かほ）に潜（ひそ）む蝮（まむし）の心（こゝろ）！ あんな奇麗（きれい）な洞穴（ほらあな）にも毒龍（どくりう）は棲（すま）ふものか？ 面（かほ）は天使（てんし）、心（こゝろ）は夜叉（やしや）！ 美（うつく）しい虐君（ぎやくくん）ぢや！ 鳩（はと）の翼（はね）被（き）た鴉（からす）ぢや！ 狼根性（おほかみこんじやう）の仔羊（こひつじ）ぢや！ 見（み）た目（め）は神々（かう／＼）しうて心（こゝろ）は卑（さも）しい！ 外面（うはべ）とは裏表（うらうへ）！ いやしい聖僧（ひじり）、氣高（けたか）い惡黨（あくたう）！ おゝ、造化主（ざうくわしゆ）よ、あのやうな可憐（いと）しらしい人間（にんげん）の肉體（にくたい）にくたいにすら夜叉（やしや）の魂（たま

しひ)を宿(やど)らせたなら、地獄(ぢごく)の夜叉(やしや)の肉體(からだ)には何者(なにもの)を住(す)ませうとや? あんな内容(なかみ)にあのやうな表紙(へうし)を附(つ)けた書(ほん)があらうか? あんな華麗(りっぱ)な宮殿(きゆうでん)に虚偽(うそ)譎詐(いつはり)が棲(すま)はうとは!

乳母(さゝ、頼(たの)まれぬ、信(しん)ぜられぬ、不正直(ふしやうぢき)は男(をとこ)の習(なら)ひぢや。どれも $\searrow$ ※(「言十墟のつくり」、第4水準2-88-74)吐(うそつき)、誓言破(せいごんやぶ)り、ろくでなしの詐偽者(いつはりもの)ぢや。あゝ、彼僮(あいつ)めは何處(どこ)へ往(い)にをつたぞ? 火酒(しやうちゆう)を持(も)て來(き)てくりや。此(この)苦(くる)しみ、此(この)歎(なげ)

き、此（この）悲（かな）しみで、わしや齡（とし）を取（と）つてしまふわいの。ロミオの奴（やつ）、恥搔（はぢか）きをれ！

ヂュリ そのやうなことを言（い）ふ汝（そち）の舌（した）こそ腐（くさ）りをれ！ 恥（はぢ）を搔（か）かしやる身分（みぶん）かいの、彼方（あ）のかた）の額（ひたひ）には恥（はぢ）などは恥（はづ）かしがって能（よ）う坐（すわ）らぬ。あれこそは此世（このよ）の名譽（めいよ）といふ名譽（めいよ）が、只（た）った一人（ひとり）王様（わうさま）となつて、坐（すわ）る帝座（ていざ）ぢや。おゝ、何（なん）といふ獸物（けだもの）ぢや予（わし）は、かりにも彼（あ）の方（かた）を惡（わる）ういふとは！

乳母 從兄（いとこ）どのを殺（ころ）した人（ひと）をお前（まへ）

は善（よ）う言（い）はうでな？

ヂュリ 殿御（とのご）ぢや、悪（わる）う言（い）うてならうか！

あゝ、我（わが）夫（つま）、どの舌（した）で滑（すべ）ッこうせうぞ、つい三時（みとき）が程（ほど）連添（つれそ）うた妻（つま）の口（くち）で創（きず）だらけにしたお前（まへ）の名（な）を？ とは言（い）ひながら何故（なぜ）殺（ころ）した汝（おのれ）は、予（わし）の従兄（いとこ）を？ さア、お前（まへ）をば従兄（いとこ）めが殺（ころ）したでもあらうによつて。戻（もど）れ、おろかな涙（なみだ）め、元（もと）の泉（いづみ）へ戻（もど）りをれ。悲歎（かなしみ）に献（さ）ぐる貢（みつぎ）を間違（まちが）へて喜悅（よろこび）に献上（まゐら）せをる。チツバルトが殺（ころ）したでもあら

う我（わが）夫（つま）は生存（いきながら）へて、我（わが）夫（つま）を殺（ころ）したでもあらうチツバルトが死（し）んだのぢや。すれば、嬉（うれ）しいことばかり、予（わし）や何（なん）で泣（な）くのぢや？

最前（さいぜん）聞（き）いた一言（ひとこと）が、その一言（ひとこと）が、チツバルトが死（し）にやったよりも悲（かな）しいのぢや。辛（つら）い、忘（わす）れたい。おゝ、それが切實（ひし／＼）と思（おも）ひ出（だ）さるゝ、怖（おそろ）しい罪惡（ざいあく）を罪人（ざいにん）が忘（わす）れぬやうに。「チツバルトは死（し）なしやれた、そしてロミオは……追放（つみほう）！」……「追放（つみほう）……其（その）「追放（つみほう）」といふ一言（ひとこと）がチツバルトを一萬人（まんにん）も殺（ころ）してのけた。チツバルトが死（し）

にやつたばかりでも可(よ)い程(ほど)の不幸(ふしあはせ)であつたものを。若(も)し又(また)不幸(ふしあはせ)は同伴(つれ)を好(この)み、是非(ぜひ)とも他(ほか)の不幸(ふしあはせ)を同伴(つれだ)つて來(こ)ねばならぬなら、「チツバルトが死(し)なしたやれた」というた次(つぎ)に、父(とと)さまとか、母(はは)さまとか、乃至(ないし)お二人(ふたり)もろともとか、乳母(うば)が何故(なぜ)言(い)ひをらぬ。すればまだしも尋常(ひととほり)の憂悲歎(うきかなしみ)で濟(す)まうものを。チツバルトがお死(し)にやつた上(うへ)に、殿(しんが)りに「ロミオは追放(つみはう)」。追放(つみはう)と聞(き)くからは、父母(ちちはは)もチツバルトもロミオもヂュリエットも皆々(みんな)殺(ころ)されてしまつたのぢや。



「ロミオは追放（つみはう）！」其（その）一言（ひとこと）が人（ひと）を殺（ころ）す力（ちから）には際（はて）も量（はかり）も限（きり）も界（さかひ）も無（な）いわいの。言葉（ことば）では言（い）ひ盡（つく）く）されぬ不幸（ふしあはせ）ぢや。……なう、父様（とゝさま）や母様（はゝさま）は何處（どこ）にぢや。

乳母（ちつバルト）どのゝ死骸（なきがら）に取着（とりつ）いてお泣（な）きやつてでござります。彼方（あち）へ往（い）かしゃるなら案内（あんない）をしませう。

ヂュリ 涙（なみだ）で創口（きずぐち）を洗（あら）はしゃるがよい、其（その）涙（なみだ）の乾（ひ）る頃（ころ）にはロミオの追放（つみはう）を悔（くや）む予（わし）の涙（なみだ）も大概（たいがい）

盡（つけ）う。其（その）綱（つな）を拾（ひろ）うてたも。……ても  
憫然（ふびん）な綱（つな）よの、汝等（おぬしら）は欺（だま）され  
たなう、汝等（おぬしら）も予（わし）もぢや、ロミオが追放（つゐはう）  
になりやつたによつて。ロミオは汝等（おぬしら）をば寢室（ねま）へ  
の通路（かよひぢ）にせうとお思（おも）やつたに、予（わし）は志望  
（おもひ）を能（え）い遂（と）げいで、處女（をとめ）のまゝで世（よ）  
を去（さ）るのぢや。さ、綱（つな）よ。さ、乳母（うば）よ。これか  
ら婚禮（こんれい）の床（とこ）へ往（ゆ）かう。ロミオではない死神  
（しにがみ）よ、予（わし）は此身（このみ）を任（まか）さうわいの！  
乳母 速（はや）う居間（みま）へゆかしやれ。お前（まへ）を喜（よ  
ろこ）ばす眞實（ほん／＼）のロミオを搜（さが）して來（こ）う。其（そ

の居處（みどころ）は知（し）つてをる。これの、こちらのロミオどのは、  
今宵（こよひ）こゝへ來（き）やしやる筈（はず）ぢや。わしが往（い）  
て呼（よ）んで來（こ）う。はて、ロレンスさまの庵室（あんじつ）に、  
ロミオは隠（かく）れてござらツしやります。

ヂュリ おゝ、速（はや）う逢（あ）うて！ そして此（この）指輪（ゆ  
びわ）を予（わし）の勳爵士（ナイト）どのに手渡（てわた）して、訣  
別（いとまごひ）にござるやう傳（つた）へてたも。

二人（ふたり）ともに入る。

第（だい）三場（ぢやう） 同處（どうしょ）。ロレンス法師（ほふし）  
の庵室（あんじつ）。

ロレンス法師（ほふし）出る。

ロレ　ロミオよ、出（で）てござれ、出（で）てござれよ、こりや人目（ひとめ）を怕（おそ）れ憚（はゞか）る男（をとこ）。あゝ、卿（そなた）は憂苦勞（うきくらう）に見込（みこ）まれて、不幸（ふしあはせ）と縁組（えんぐみ）をお爲（し）やったのぢやわ。

ロミオ出る。

ロミオ　師（し）の御坊（ごぼう）か、消息（たより）は何（なん）とぢや？　殿（との）の宣告（いひわたし）は何（なん）とあつたぞ？

まだ知（し）らぬ何様（どのやう）な不幸（ふしあはせ）が、予（わし）と知合（しりあひ）にならうといふのぢや？

ロレ　されば、其（その）可厭（いやな）友達衆（ともだちしゅ）に  
和子（わかこ）は親（した）しみが多過（おほす）ぎるわい。お宣告（い  
ひわたし）を知（し）らせに來（き）た。

ロミオ　一定（ぢやう）、命（いのち）を召（め）されうでな？

ロレ　いや、寛大（くわんだい）なお宣告（いひわたし）、一命（めい）  
は召（め）されいで、追放（つみほう）にせいとの命令（おほせ）ぢや。  
ロミオ　なに、追放（つみほう）！　慈悲（じひ）ぢや、死罪（しざい）  
と言（い）うて下（くだ）され。謫竄（さすらへ）の身（み）となるは  
死（し）ぬるよりも怖（おそろ）しい。追放（つみほう）と言（い）う  
て下（くだ）さるな。

ロレ　いや、※（濁点付き片仮名エ、1-7-84）ローナからは追放（つ

みはう) ぢやが、世界(せかい)は廣(ひろ)い、まゝ、落着(おちつ)いてござれ。

ロミオ ※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナの市(まち)を離(はな)れては世界(せかい)は無(な)い、有(あ)るものは只(ただ)煉獄(れんごく)ぢや、苛責(かしゃく)ぢや、地獄(ぢごく)ぢや。此處(こゝ)から逐(お)はるゝは世界(せかい)から逐(お)はるゝも同(おな)じ事(こと)、世界(せかい)から逐(お)はるゝは殺(ころ)さるゝも同(おな)じ事(こと)、すれば追放(つみはう)とは死罪(しざい)の隱(かく)し名(な)ぢや。死罪(しざい)の事(こと)を追放(つみはう)といはッしやるは、黄金(わうごん)の斧鉞(まさかり)で予(わし)の首(くび)を刎(は)ねておいて、汝(そち)は幸福(しあはせ)

ぢやと笑（わら）うてござるやうなものぢや。

ロレ おゝ、罪深（つみふか）や／＼！ おゝ、作法知（さはふし）らず、  
恩知（おんし）らず！ これ、卿（そなた）の罪科（ざいくわ）は國法  
（こくはふ）では死罪（しざい）とある、然（しか）るに慈悲深（じひ  
ぶか）い御領主（ごりやうしゅ）が卿（そなた）の肩（かた）を持（も）  
ち、御法（ごはふ）を曲（ま）げ、怖（おそろ）しい死罪（しざい）の  
名（な）を追放（つみはう）とは變（か）へさせられた。其（その）難  
有（ありがた）いお慈悲（じひ）が分（わか）らぬか！

ロミオ 慈悲（じひ）ではなうて、そりや苛責（かしゃく）ぢや。ヂュリエツ  
トがゐやる此處（こゝ）は天國（てんごく）、こゝに住（す）む限（かぎ）  
りは猫（ねこ）も犬（いぬ）も※（「鼬」の「由」に代えて「奚」、第㊦

水準(2-94-69)鼠(はつかねずみ)も、どのやうな屑々物(はかないもの)も、姫(ひめ)の顔(かほ)が見(み)らるゝゆゑ天國(てんごく)にゐるのぢやが、ロミオにはそれが能(かな)はぬ。腐肉(くされにく)に集(たか)る蒼蠅(あをばへ)でもロミオには優(ま)す幸福者(あはせもの)ぢや、風雅(みや)びた分際(ぶんざい)ぢや。彼奴等(あいつら)は可憐(いと)しいヂュリエットの手(て)の白玉(はくぎよ)く)を掴(つか)むことも出来(で)くる、また姫(ひめ)の脣(くちびる)から……其(その)上下(うへした)の脣(くちびる)が、淨(きよ)い温淑(しとやか)な處女氣(をばこぎ)で、互(たが)ひに密接(ひた)と合(あ)ふのをさへ惡(わる)いことゝ思(おも)うてか、いつも眞赤(まっか)になつてゐる……其(その)姫(ひめ)の脣(くちびる)



から永劫(えいがう)死(し)なぬ天福(てんぷく)を窃(そつ)と盗(ぬす)むことも出来(でく)る、ロミオにはそれが能(かな)はぬ。ロミオは追放(つみほう)の身(み)の上(うへ)ぢゃ。蒼蠅(あをばへ)でも能(よ)うすることをロミオばかりは能(よ)うせぬ、彼奴等(あいつら)は自由(じいう)の身(み)、吾等(われら)は追放(つみほう)！  
これでも足下(おぬし)は追放(つみほう)を死罪(しざい)でないとおしやるかいの？ 調合(てうがふ)した毒(どく)はないか、研(と)ぎすました刃(やいば)はないか、如何(いか)に卑(いや)しうても大事(だいじ)ない、一思(ひとおも)ひに死(し)ぬ法(はふ)は無(な)いか？……「追放(つみほう)」……「追放(つみほう)で殺(ころ)さるゝのは俺(おれ)や否(いや)ぢゃ！ おゝ、御坊(ごぼう)よ、

追放（つみはう）とは墮獄（だごく）の輩（やから）が用（もち）ふる語（ことば）、唸（うな）り聲（こゑ）が附物（つきもの）。そのやうな語（ことば）を聞（き）かせて予（わし）を切（き）りさいなむとは酷（むご）いわい、つれないわい、それでも高僧（かうそう）か、司悔僧（しくわいそう）か、教導師（けうどうし）か、莫逆（ばくぎやく）と誓（ちか）うた信友（しんいう）か？

ロレ はてさて、愚（おろか）な狂人（きちがひ）どの、ま、予（わし）の言（い）ふことを聽（き）かつしやれ。

ロミオ きつとまた追放（つみはう）といふことを被言（おしや）るであらう。

ロレ いや、其（その）語（ことば）の鋭鋒（きつさき）を防（ふせ）

ぐ甲冑（よろひ）を與（おま）さう。逆境（ぎやくきやう）の甘（あま）い乳（ち）ぢやと謂（い）ふ哲學（てつがく）こそは人（ひと）の心（こゝろ）の慰（なぐさ）め草（ぐさ）ぢや、よしや追放（つゐはう）の身（み）とならうと。

ロミオ それ、また「追放（つゐはう）」と！ えゝ、哲學（てつがく）め、腐（くさ）りをれ！ 哲學（てつがく）でヂュリエットが出來（でき）、市（まち）が移（うつ）され、領主（りやうしゆ）の宣告（せんこく）が取消（とりけ）さるれば知（し）らぬこと、哲學（てつがく）が何（なん）の役（やく）に立（た）つ、何（なん）にならう？ もう聽（き）かぬ。ロレ おゝ、すれば狂人（きちがひ）には耳（み）が無（な）いと見（み）える。

ロミオ 無(な)い筈(はず)ぢや、賢(かしこ)い人(ひと)にさへ  
目(め)が無(な)い世(よ)ぢや。

ロレ いや、卿(そなた)の今(いま)の身(み)の上(うへ)につ  
いて、談(だん)じたい事(こと)があるのぢや。

ロミオ 身(み)に感(かん)じておゐやらぬ事(こと)を、何(なん)  
で談(だん)ずることが出来(でけ)う。足下(こなた)が予程(わし  
ほど)に齡(とし)が若(わか)うて、あのヂュリエットが戀人(こひ  
びと)で、婚禮(こんれい)の式(しき)を擧(あ)げて只(ただ)  
一時(とき)も經(た)たぬうちにチツバルトをば殺(ころ)して、予(わ  
し)のやうに戀(こ)ひ焦(こが)れ、予(わし)のやうにあさましう  
追放(つゐはう)された上(うへ)でなら、予(わし)に談(だん)ず

ることも出来（でけ）うずれ、このやうに頭髮（かみのけ）を搔筆（かきむし）って、ま此様（このやう）に地上（ぢびた）に倒（たふ）れて、まだ掘（ほ）らぬ墓穴（はかあな）の尺（しゃく）を取（と）ることも出来（でけ）うずれ！

ロミオ頭髮（かみのけ）を搔筆（かきむし）り仰向（あふむけ）に倒（たふ）れて歎（なげ）く。此時（このとき）奥（おく）にて戸（と）を叩（たたく）く音（おと）。

ロレ 起（た）ちやれ。案内（あんない）がある。ロミオや、速（はや）う身（み）を匿（かく）しやれ。

ロミオ 俺（おれ）や匿（かく）れぬ。胸（むね）の惱悶（なやみ）の唸（うめ）きの息（いき）が霧（きり）のやうに立籠（たちこ）めて追

手（おつて）の目（め）を塞（ふさ）いだら知（し）らぬこと。

戸（と）を叩（たゝ）く音（おと）。

ロレ あれ、あの叩（たゝ）くことは！……誰（た）れぢやな！……  
速（はや）う起（た）ちや。捕（とら）へられうぞよ。……暫（しばら）  
く／＼！……立（た）ちや／＼。

叩（たゝ）く音（おと）。

予（わし）の書齋（しよさい）へ。……只今々々（たゞいま／＼）！  
……はてさて、愚（おろ）かにも程（ほど）があるわ！……はい／＼、  
只今（たゞいま）參（まゐ）ります！

叩（たゝ）く音（おと）。

けたゝましようお叩（たゝ）きやるは何人（どなた）ぢや？ どこから見

(み) えたぞ? 何(なん)の御用(ごよう)ぢや?

乳母 (内にて) 用(よう)は入(はひ)つてから申(まう)しまする、  
ヂュリエットさまからでござります。

ロレ なれば、ようこそ。

戸(と)を開(あ)くる、乳母(うば)入來(いりきた)る。

乳母 おゝ、御坊(ごぼう)さま、御坊(ごぼう)さま、姫(ひめ)  
さまの殿御(とのご)は何處(どこ)にござらッしやります、ロミオさ  
まは何處(どこ)に?

ロレ それ、そこに地上(ちじやう)に、おのが涙(なみだ)に酔(ゑ)  
うて。

乳母 おゝ、こちの姫(ひめ)さまも、ま、ちようど其通(その

とほ) りぢやがな!

ロレ　ても、いたましい悲哀(ひあひ)の感應(かんおう)!　氣(き)の毒(どく)な境遇(きやうぐう)!　!

乳母　こちのも其通(そのとほ)りに平伏(へたば)つて、泣面(べそ)かいて、哭立(なきた)て、ぢや。立(た)たッしやれ。男(をとこ)なら立(た)たッしやりませ。姫(ひめ)の爲(ため)ぢや、ヂュリエットどのの爲(ため)ぢや、起(お)きさッしやれ、立(た)たしませ。(此時ロミオ唸(うめ)く。)何(なん)で其様(そのやう)に歎(なげ)かッしやるのぢや、何(なん)で其様(そのやう)に大業(おほげふ)に?

ロミオ　(俄に起ち上りて) おゝ、乳母(おんば)!　!



乳母 あゝ、もし！ これさ、もし！ はて、死（し）ぬれば何（なに）もかも結局（おしまひ）ぢやがな。

ロミオ 今（いま）ヂュリエットと被言（おしや）ったの？ 姫（ひめ）は何（なん）としてぢや？ 姫（ひめ）は予（わし）を二人（ふたり）が中（なか）の歡樂（くわんらく）の其（その）水子（みづご）を姫（ひめ）の身内（みうち）の血（ち）で汚（よご）した怖（おそろ）しい殺人者（ひとごろし）と思（おも）うてはゐやらぬか？ 何處（どこ）にぢや？ 何（なん）としてぢや？ わしの内密妻（ないしよづま）は破（やぶ）れた互（たが）ひの誓文（せいもん）を何（なん）と言（い）うてぢや？ 乳母 おゝ、何（なに）も言（い）はッしゃらいで、泣（な）いてばかり。寢床（ねどこ）の上（うへ）に倒（たふ）れさっしやるかと思（お

も)ふと、即(やが)て又(また)飛(と)び起(お)きてチツバルトと呼(よ)ばらっしやる、かと思(おも)ふと、ロミオと呼(よ)ばつて、又(また)横倒(よこたふ)しにならっしやります。

ロミオ すりゃ、其(その)名前(なまへ)に胸板(むないた)を射抜(いぬ)かれたやうに思(おも)うて、其(その)名前(なまへ)の持主(もちぬし)が大事(だいじ)の近親(うから)を殺(ころ)したゆゑ。おゝ、御坊(ごぼう)、をしへて下(くだ)され、此(この)肉體(にくたい)の何(ど)のあたりに、予(わし)の醜穢(けがらは)しい名(な)は宿(やど)ってゐるぞ? さ、をしへて下(くだ)され、其(その)憎(にく)い居所(おどころ)を切裂(霧さ)いてくれう。

劍(けん)を抜(ぬ)く。

ロレ まゝ、滅相(めつそう)なことをすまい。これ、男(をとこ)ではないか？ 姿(すがた)を見(み)れば男(をとこ)ぢやが、其(その)涙(なみだ)は宛然(さながら)の女子(をなご)ぢや。狂氣(きちがひ)めいた其(その)振舞(ふるまひ)は理性(りせい)のない獸類同然(けだものどうぜん)。男(をとこ)らしうも女(をなご)らしうも見(み)えて、獸類(けだもの)らしうも見(み)ゆる見(み)ともない振舞(ふるまひ)！ はてさて、呆(あき)れ果(は)てた。誓文(せいもん)、予(わし)は今少(もすこ)し立派(りっぱ)な氣質(きだて)ぢやと思(おも)うてみたに。チツバルトを殺(ころ)した上(うへ)に、おのが身(み)をも殺(ころ)さうとや？ 自(みづか)ら墮地獄(だぢごく)の罪(つみ)を犯(をか)して、卿(そなた)ゆゑに

こそ生（い）きてゐやるあの姫（ひめ）をも殺（ころ）さうとや？ 何  
（なん）で卿（そなた）は出生（しゅっしやう）を呪（のろ）ひ、天（て  
ん）を、地（ち）を呪（のろ）ふのぢや？ 生（せい）と天（てん）と  
地（ち）と此（この）三（み）つが相合（あひあ）うて出来（でき）た  
身（み）をば、つい無分別（むふんべつ）に棄（す）てうでな？ 馬鹿  
（ばか）な、馬鹿（ばか）な！ 姿（すがた）を、戀（こひ）を、分別（ふ  
んべつ）を辱（はづかし）むる振舞（ふるまひ）といふものぢや。譬（た  
と）へば、吝嗇者（りんしよくもの）のやうに貨（たから）は夥（おび  
たゞ）しう有（も）ってをっても、正（たゞ）しう用（もち）ふること  
を知（し）らぬ、姿（すがた）をも、戀（こひ）をも、分別（ふんべつ）  
をも、其身（そのみ）の盛飾（かざり）となるやうには。卿（そなた）

の其（その）氣高（けだか）い姿（すがた）は徒（ほん）の蠟細工同様  
（らうざい）くどうやう、男（をとこ）の勇氣（ゆうき）からは外（はず）  
れたものぢや。卿（そなた）の戀（こひ）の盟約（ちかひ）は内容（な  
かみ）の無（な）い空誓文（からぜいもん）、なりやこそ養育（はごく）  
まうと誓（ちか）うた戀（こひ）をも殺（ころ）してのけうと爲（し）  
やるのぢや、卿（そなた）の分別（ぶんべつ）は姿（すがた）や戀（こひ）  
の飾（かざり）ぢやが、本體（ほんたい）が善（よ）うないので不具（か  
たは）となり、愚（おろか）な卒（そつ）が藥筐（くすりいれ）の火藥  
（くわやく）のやうに、扱（あつか）ひかたがわるいので爆發（ばくはつ）  
し、我（わ）れと我（わ）が武器（ぶき）で身（み）を滅（ほろぼ）す。  
こりや、しつかりとお爲（し）やらう！ つい最前（いまがた）まで戀

(こひ) しさに死(し)ぬる苦(くる)しみを爲(し)てござった其(その)戀人(こひごと)のヂュリエットは恙(つゝが)ない。すれば、それが先(ま)づ幸福(しあはせ)。またチツバルトは卿(そなた)を殺(ころ)した。したでもあらうずに、卿(そなた)がチツバルトを殺(ころ)した。それもまた一(ひと)つの幸福(しあはせ)。次(つぎ)に死罪(しぎい)ともあるべき國法(こくはふ)は卿(そなた)の身方(みかた)となつて追放(つみほう)で事濟(ことず)み。それもまた一(ひと)つの幸福(しあはせ)。天(てん)の恩惠(めぐみ)は重(かさ)ね／＼脊(せ)に下(くだ)り、幸福(かうふく)が餘所行姿(よそゆきすがた)で言寄(いひよ)りをる。それに何(なん)ぢや、意地(いぢ)くねの曲(まが)った少女(こめらう)のやうに、口先(くちさき)を尖

(とが)らせて運命(うんめい)を呪(のろ)ひ、戀(こひ)を呪(のろ)ふ。氣(き)を附(つ)けや、氣(き)を附(つ)けや、さういふ輩(やから)があさましい最期(さいご)を遂(と)ぐる。さう、豫定通(さだめどほ)り、戀人(こひごと)の許(もと)へ往(い)て、居間(おま)へ攀(よ)ぢ登(のぼ)り、速(はや)う慰(なぐさ)めてやりめされ。したが、夜番(よばん)の置(お)かれぬうちに別(わか)れませうぞ、マンチュアへ往(ゆ)かれぬやうになつてはならぬ。マンチュアに蟄(ちっ)してゐやる間(あひだ)に、わしが機(をり)を見(み)て二人(ふたり)が内祝言(ないしうげん)の顛末(もとすゑ)を公(おほやけ)にし、兩家(りやうけ)の確執(かくしつ)を調停(てうてい)し、御領主(ごりやうしゅ)の赦(ゆるし)を乞(こ)ひ、やがて卿(そな

た)を呼返(よびかへ)すことにせう、其折(そのをり)の喜悦(よろこび)は出(で)て行(ゆ)く今(いま)の悲痛(かなしみ)の千萬倍(せんまんばい)であらうぞよ。……乳母(おんば)、先(さき)へ往(ゆ)きやれ。姫(ひめ)によう傳(つた)へたもれ、家内中(かないぢゆう)を早(はや)う就褥(ねか)しめさと被言(おしや)れ、歎(なげ)きに疲(つか)れたれば眠(ね)むるは定(ぢやう)ぢや。ロミオは今直(いますぐ)參(まゐ)らるゝ。

乳母(おんば) はれま、結構(けっこう)なお教訓(けうくん)ぢや、夜(よ)すがら此處(こゝ)に居殘(みのこ)つても、聽聞(ちやうもん)がしたいわいの。てもま、學問(がくもん)は偉(きつ)いものぢやな!

殿(との)さん、貴方(こなた)が來(き)さしますことを姫(ひい)



さまに申（まう）しましよ。

ロミオ さういうて、戀人（こひごと）に、叱（しか）る準備（したし  
らべ）をさせてたもれ。

乳母 もしえ、この指輪（ゆびわ）は姫（ひい）さまから、わしに貴下（こ  
なた）へ上（あ）げませいと（い）うて。さ、速（はや）う、急（い  
そ）がしやれ、甚（いか）う夜（よ）が深（ふ）けたによつて。

乳母（うば） 入る。

ロミオ おゝ、これで心（こゝろ）が安（やす）らいだわ！

ロレ さ、速（はや）う往（ゆ）きゃれ。さらばぢや。貴下（こなた）  
の幸運（かううん）は只（ただ）此（この）一（ひと）つに繫（かゝ）る、  
夜番（よばん）の置（お）かれぬうちに出立（しゅったつ）するか、さ

なくば夜明（よあ）くる頃（ころ）姿（すがた）を窺（やつ）して此（こ）の市（まち）を遠（とほ）ざかるか、二（ふた）つに一（ひと）つぢや。マンチュアに蝥（ちつ）してござれ、忠實（まめやか）な僕（をとこ）を求（もと）め、時折（ときおり）、其（その）男（をとこ）して此方（こなた）の吉左右（きつさう）を知（し）らせう。さ、手（て）を。もう晩（おそ）い。さらばぢや、機嫌（きげん）よう。

ロミオ 此上（このうへ）も無（な）い歡樂（よろこび）が予（わし）を呼（よ）ぶのでなかつたら、斯（こ）う早急（さつきふ）に別（わか）るゝのは悲（かな）しいことであらう。恙（つゝが）なうござりませ。二人（ふたり）左右（さいう）に別（わか）れて入る。

第(だい) 四場(ぢやう) 同處(どうしよ)。カピューレット家(け)の  
一室(しつ)。

カピューレット長者(ちやうじゃ)、同(おな)じく夫人(ふじん)及(お  
よ)びパリス出る。

カピ長 かやうな珍變(ちんぺん)が起(おこ)ったによつて、女(む  
すめ)に説(と)き聞(きか)す暇(いとま)もござらなんだ。女(む  
すめ)もチツバルトを甚(きつ)う懷(なつか)しう思(おも)うてを  
つたに、また吾等(われら)とても同様(どうやう)ぢやに。さりながら  
人(ひと)は皆(みな)死(し)ぬるやうに生(うま)れたもの。もう  
今宵(こよひ)は晩(おそ)うござる、女(むすめ)は降(お)りては

參（まゐ）るまいぢやまで。貴下（こなた）がござつたればこそ、さも  
なくば吾等（われら）とても、一時（とき）も前（さき）に、臥床（や  
す）んだでござらう。

パリス かういふ愁傷（なげき）の最中（さなか）には祝言（しうげん）  
の話（はなし）も出来（でき）まい。お内（うち）かた、おさらばでご  
ざる。娘御（むすめご）によろしう傳（つた）へて下（くだ）され。

カピ妻 心得（こころえ）ました、女（むすめ）の心（こころ）は明日（あ  
す）早（はや）う質（たゞ）しましよ。今宵（こよひ）は悲嘆（なげき）  
に囚（とら）はれて、閉籠（とぢこ）めてのみ居（ゐ）まする。

パリス行（ゆ）きかくる。

カピ長 いや、なう、パリスどの、女（むすめ）は敢（あへ）て獻（け

ん)じまする。彼(か)れめは何事(なにごと)たりとも吾等(われら)の意志(こゝろざし)には背(そむ)くまいでござる、いや、其儀(そのぎ)は聊(いさゝか)も疑(うたが)ひ申(まう)さぬ。……奥(おく)よ、其許(そなた)は寢(ね)る前(まへ)に女(むすめ)に逢(あ)うて、婿(むこ)がねパリスどのゝ深(ふか)い心入(こゝろいれ)の程(ほど)を知(し)らせて、よいかの、次(つぎ)の水曜日(すみえうび)には……いや、待(ま)ちやれ、けふは何曜日(なにえうび)ぢや? パリス 月曜日(げつえうび)でござる。

カピ長 月曜日(げつえうび)! はゝア! かうツと、水曜日(すみえうび)はちと急(きふ)ぢや。木曜日(もくえうび)にせう。……女(むすめ)に、木曜日(もくえうび)には此(この)殿(どの)と祝言(し

ふげん) さすると被言(おしや)れ。ようござるか? 此(この)早急(さつきふ)に異議(いぎ)はござらぬか? 業々(げふ)しうはすまい、ほんの近(ちか)しい輩(やから)一兩名(りやうめい)、はて、何故(なぜ)と被言(おしや)れ、近親(きんしん)チツバルトが殺(ころ)されて間(ま)がないことゆゑ、盛宴(せいゑん)を催(もよぶ)すときは無情(むじやう)な行爲(しこなし)とも思(おも)はれうによつて。されば、近(ちか)しい友達(ともだち)をば只(ただ)五六名(めい)限(かぎ)り招(まね)くことにしませう。……したが、貴下(あなた)、木曜日(もくえうび)でようござるか? パリス 吾等(われら)は其(その)木曜日(もくえうび)が明日(あす)であつてほしうござる。

カピ長　さらば、先(ま)づお歸(かへ)りあれ。なれば木曜日(もくえうび)と定(き)めます。……卿(そなた)は寢(ね)る前(まへ)に女(むすめ)に逢(あ)うて、當日(たうじつ)の準備(こゝろまうけ)をさせたがよい。……おさらばでござる。予(わし)が居間(いま)へ燭火(あかし)を持(も)て！　はれやれ、晩(おそ)うなつたわい、こりや廳(やが)てお早(はや)うと言(い)はねばなるまい。……さゝ、お休(やす)みなされ。

パリスと夫婦(ふうふう)と左右(さいう)に分(わか)れて入(い)る。

第(だい)五場(ぢやう)　同處(どうじよ)。カピユレットの庭園(ていゑん)。  
(ていゑん)。

ロミオとヂュリエットと樓上(ろうじやう)の窓口(まどぐち)に現(あらは)るゝ。

ヂュリ 去(いな)うとや? 夜(よ)はまだ明(あ)きやせぬのに。怖(こ

はが)ってござるお前(まへ)の耳(みみ)に聞(きこ)えたは雲雀(ひばり)ではなうてナイチンゲールであつたもの。夜毎(よごと)に彼處(あそこ)の柘榴(じやくろ)へ來(き)て、あのやうに囀(さへず)りをする。なア、今(いま)のは一定(きつと)ナイチンゲールであらうぞ。

ロミオ いや、且(あさ)を知(し)らする雲雀(ひばり)ぢや、ナイチンゲールの聲(こゑ)ではない。戀人(こひびと)よ、あれ、お見(み)やれ、意地(いぢ)の惡(わる)い横縞(よこじま)めが東(ひ



がし)の空(そら)の雲(くも)の裂目(さけめ)にあのやうな縁(へり)を附(つ)けをる。夜(よる)の燭火(ともしび)は燃(も)え盡(つ)きて、嬉(うれ)しげな旦(あした)めが霧立(きりた)つ山(やま)の巔(いたゞき)にもう足(あし)を爪立(つまだ)てゝゐる。速(はや)う往(い)ぬれば命(いのち)助(たす)かり、停(とど)まれば死(し)なねばならぬ。

ヂュリ あの光明(ひかり)は朝(あさ)ぢやない、いえ、朝日(あさひ)ではないわいの。ありや太陽(たいやう)がお前(まへ)の爲(ため)に、今宵(こよひ)マンチュアへの道案内(みちしるべ)に炬火持(たいまつもち)の役(やく)さしよとて、急(きふ)に呼出(よびだ)した光(ひか)り物(もの)ぢや。ぢやによつて、大事(だいじ)ない、

まだ去（いな）しやるには及（およ）ばぬ。

ロミオ 捕（とら）はれうと、死罪（しざい）にならうと、恨（うらみ）はない、卿（そもじ）の望（のぞみ）とあれば。あの灰色（はひいろ）は朝（あさ）の眼（め）で無（な）いとも言（い）はう、ありや嫦娥（シンシヤ）の額（ひたひ）から照返（てりかへ）す白光（びやくくわう）ぢや。また吾等（われら）の頭（かしら）の上（うへ）で大空（おほぞら）高（たか）う鳴響（なりひび）くあの奏樂（そうがく）も、雲雀（ひばり）の聲（こゑ）では無（な）いと言（い）はう。去（い）にたいよりも此處（ここ）に居（ゐ）たいが幾層倍（いくそうばい）ぢや。さ、死（し）よ、來（きた）れ、喜（よろこ）んで迎（むか）へう！ それがヂュリエツトの望（のぞみ）ぢや。さ、戀人（こひびと）、どうぢや？ もつと話（は

な) さう。朝(あさ)ではない。

ヂュリ いや、朝(あさ)ぢや、朝(あさ)ぢや。速(はや)う去(いな)しませ、速(はや)うく！ 聞辛(きんづら)い、蹴立(けた)たましい高調子(たかてうし)で、調子外(てうしはづ)れに啼立(なきだ)つるは、ありや雲雀(ひばり)ぢや。雲雀(ひばり)の聲(こゑ)は懐(なつか)しいとは虚偽(いつはり)、なつかしい人(ひと)を引分(ひきわけ)る。墓(ひき)と目(め)を交換(とりか)へたとは事實(まこと)か？ ならば何故(なぜ)聲(こゑ)までも交換(とりか)へなんだぞ？

あの聲(こゑ)があればこそ、抱(いだ)きあうた腕(かひな)と腕(かひな)を引離(ひきはな)し、朝彦(あさびこ)覺(さま)す歌聲(うたごゑ)で、可愛(いと)しいお前(まへ)を追立(おひた)てをる。おゝ、

速（はや）う去（いな）しませ、だん／＼明（あか）るうなつて來（く）る。

ロミオ 明（あか）るうなればなる程（ほど）、暗（くら）うなる二人（ふたり）が身（み）の上（うへ）。

乳母（うば）出る。

乳母 姫（ひい）さま！

ヂュリ 乳母（うば）か？

乳母 御方様（おんかたさま）が只今（たゞいま）お居間（おま）へ入（い）らせられます。夜（よ）は明（あ）けた、もし、油斷（ゆだん）なう心（こゝろ）を配（くば）って。

ヂュリ なりや、窓（まど）よ、日光（ひ）を内（うち）へ、命（いの

ち)を外(そと)へ。

ロミオ おさらば、おさらば！ これを名残(なごり)に(と接吻して)降(お)りて去(いな)う。

樓(ろう)を下(お)りかくる。

ヂュリ (樓上より) お前(まへ) もう去(いな) しますか？ あゝ、戀人(こひびと) よ、殿御(とのご) よ、わが夫(つま) よ、戀人(こひびと) よ！ きつと毎日(まいにち) 消息(たより) して下(くだ)され。これ、一時(とき) も百日(にち) なれば、一分(ぶん) も百日(にち) ぢや。おゝ、そんな風(ふう) に勘定(かんぢやう) したら、また逢(あ) ふまでには予(わし) は老年(としより) になつてしまはう！  
ロミオ さらばぢや！ かりそめにも機會(きくわい) さへあれば消息

(たより) を怠 (おこた) ることではない。

ヂュリ おゝ、また逢 (あ) はれうかいの？

ロミオ 念 (ねん) には及 (およ) ばぬ。今 (いま) の此 (この) 憂苦  
勞 (うきくらう) は、後 (のち) の樂 (たの) しい昔語 (むかしがたり)  
ぢや。

ヂュリ おゝ、如何 (どう) せうぞ！ 心 (こゝろ) めが忌 (いまは)  
しい取越苦勞 (とりこしぐらう) をさせをる。下 (した) にみやしやる  
のを此處 (こゝ) から見 (み) ると、どうやら墓 (はか) の底 (そこ)  
の死人 (しにん) のやう。目 (め) の故 (せゐ) か知 (し) らねども、  
お前 (まへ) の顔 (かほ) が蒼 (あを) う見 (み) ゆる。

ロミオ 眞實 (しんじつ)、予 (わし) の目 (め) にも、卿 (そもじ)

の顔(かほ)が然(さ)う見(み)ゆる。憂(うれ)悲(かな)愁(しみ)が互(た)が(が)ひの血(ち)汐(しほ)を涸(か)らしたのぢや。おさらば、おさらば！  
ロミオ入(い)る。

ヂュリ おゝ、運命神(うんめい)よ、運命神(うんめい)よ！ 皆(み)な(な)が汝(そち)を浮氣者(うはきもの)ぢやといふ。いかに汝(そち)が浮氣(うはき)であらうと、世(よ)に聞(き)こえた堅實(かたぎ)な人(ひと)を何(なん)とすることも出来(でき)ない。いや、やっぱり浮氣(うはき)がよい、そしたら彼(あ)の人(ひと)を直(すぐ)※(「厭(いと)／(贅(ぜい)一(ひと)殄(てい)」、第4水準 2-92-73) (あ)いて予(わし)へ返(かへ)してたもらうによつて。

カピ妻(かひつま) (内(うち)にて) 女(むすめ)や／＼！ 起(お)きてかいの？

ヂュリ 誰(た)れぢや呼(よ)ぶは？ 母(かゝ)さまか知(し)らぬ。

晩(おそ)うまで眠(ねぶ)らいでか、早(はや)うから目(め)を覺

(さま)してか？ 何事(なにごと)があつて、見(み)えたやら？

カピユーレット夫人(ふじん)出る。

カピ妻(ま)、其方(そなた)、如何(どう)ぞしやつたか？

ヂュリ 心地(こゝち)がわるうござります。

カピ妻(ま) いつまでも從兄(いとこ)どのゝのことを悔(くや)んでゐや

るか？ これの、涙(なみだ)で洗(あら)うたら墓(はか)から出(で)

て來(き)やると思(おも)うてか？ 出(で)て來(き)やつたとて

も生(い)かすことは出來(でき)まい。ぢやによつて、思(おも)ひ

切(き)りや。歎(なげ)くは愛情(まごゝろ)の深(ふか)い證(し)



るし) ぢやが、餘(あま)りに深(ふか)う歎(なげ)くは分別(ふんべつ)の足(たら)はぬ證(しるし)ぢや。

ヂュリ でも此様(このやう)な不幸(ふしあはせ)は存分(ぞんぶん)に泣(な)いてのけたい。

カピ妻 存分(ぞんぶん)にお泣(な)きやらうと、不幸(ふしあはせ)な人(ひと)が歸(かへ)りはせぬ。

ヂュリ 返(かへ)らぬことゝ思(おも)うても、存分(ぞんぶん)に泣(な)かいではをられぬ。

カピ妻 では、其方(そなた)は、殺(ころ)した當(たう)の惡黨(あくだう)あくだう)が尚(まだ)存(ながら)へてぬくさるのを、然程(さほど)にはお泣(な)きやらぬな?

ヂュリ え、悪黨（あくたう）とはえ？

カピ妻 あのロミオの悪黨（あくたう）。

ヂュリ （傍を向き）悪黨（あくたう）と彼（あ）の人（ひと）では大（おほ）きな相違（ちがひ）ぢや………神様（かみさま）、あの者（もの）を赦（ゆる）る（さ）せられませ！ わたしは眞實（しんじつ）赦（ゆる）してゐます。とは言（い）へ、思（おも）ひ出（だ）すと、悲（かな）しうてなりませぬ。

カピ妻 と言（い）ふのも、あの二心（ふたごころ）の下手人（げしゅにん）めが生存（いきながら）へてをるからぢや。

ヂュリ あい、さうぢや、わたしの此（この）手（て）が能（よ）う達（とど）かぬ遠（とほ）い處（ところ）に。わたしの手（て）一（ひと）

つで従兄（いとこ）どの、敵（かたき）が討（う）ちたい。

カピ妻 敵（かたき）は一定（きつと）取（と）ってやります。懸念（けねん）には及（およ）ばぬ。すれば、最早（もう）泣（な）きゃんな。

あの追放人（おひはらはれ）の無頼漢（ならずもの）が住（す）んでゐるマンチュアに使（つかひ）を送（おく）り、さる男（をとこ）に言（い）ひ含（ふく）めて尋常（よのつね）ならぬ飲物（のみもの）を彼奴（あいつ）めに飲（の）ませませう、すれば即（やが）てチツバルトが冥途（めいど）の道伴（みちづれ）。さうなれば其方（そなた）の心（こゝろ）も慰（なぐさ）まう。

ヂュリ ほんにロミオの顔（かほ）を……死顔（しにがほ）を……見（み）るまでは、妾（わたし）や如何（どう）しても心（こゝろ）が勇（いさ）

まぬ、從兄（いとこ）がお死（し）にやったのが、それ程（ほど）に心（こゝろ）に沁（し）みて悲（かな）しい。母（かゝ）さま、其（その）毒（どく）を持（も）って行（ゆ）く使（つかひ）の男（をとこ）とやらが定（きま）ったら、藥（くすり）は妾（わたし）が調合（てうがふ）せう、ロミオがそれを手（て）に入（い）れたら、直（すぐ）にも安眠（あんみん）しをるやうに。おゝ、彼奴（あいつ）の名（な）を聞（き）くと身（み）が顫（ふるへ）る。もどかしいなア、チツバルトを殺（ころ）しをった彼奴（あいつ）の肉體（からだ）をば搔筆（かきむし）つて、懷（なつか）しい／＼從兄（いとこ）への此（この）眞情（まごゝろ）を見（み）することも出来（でき）ぬか！

カピ妻 方法（てだて）は自身（じしん）で工夫（くふう）しやれ、使

者（つかひ）は予（わし）が捜（さが）しませう。それはさうと、めでたい報道（しらせ）を持（も）つて來（き）たぞや。

ヂュリ　めでたい事（こと）とは耳寄（みゝよ）りな、此様（このやう）な辛（つら）い時（とき）に。それは何様（どのやう）な事（こと）でござりますか？

カピ妻　はて、其方（そなた）は仁情深（なさげぶか）い父御（てゝご）をお有（も）ちやつてぢや。其方（そなた）に愁歎（なげき）を忘（わす）れさせうとて、俄（にはか）にめでたい日（ひ）をお定（さだ）めなされた、予（わし）も其方（そなた）も曾（つひ）ぞ思（おも）ひがけぬめでたい日（ひ）を。

ヂュリ　はれま、母様（かゝさま）、それはまた何様（どのやう）な？

カピ妻 はて、女（むすめ）よ、次（つぎ）の木曜日（もくえうび）の朝（あさ）早（はや）う、あの風流（みやび）な、立派（りっぱ）な若殿（わかとの）のパリスどのが、セント・ピーターの會堂（くわいだう）で、めでたう其方（そなた）を花嫁御（はなよめご）にお爲（し）やる筈（はず）ぢや。

ヂュリ そのセント・ピーターの會堂（くわいだう）懸（か）けて、いゝや、ピーターどのをも誓言（ちかひ）にかけて、何（なん）のそれがめでたからう！ 嫁入（よめいり）はせぬわいの。何（なん）といふ早急（さつきふ）ぢや。申入（まうしいれ）も聞（き）かぬうちに婚禮（こんれい）とは何事（なにごと）ぢや？ 父（とと）さまに言（い）うて下（くだ）され、わたしは嫁入（よめいり）はまだしませぬ。嫁入（よめいり）す

れば如何（どう）あつてもロミオへ往（ゆ）く、憎（にく）いと思（い）ふあのロミオへ、パリスどのへ往（ゆ）くよりは。まア、ほんに、思（おも）ひがけない！

カピ妻 あれ、父御（ちちご）がわせた。自身（じしん）で然（さ）う言（い）うて、父御（ちちご）がそれを其方（そなた）から聞（き）いて、何（なん）と思（おも）はしやるかを見（み）たがよい。

カピピューレット長者（ちやうじゃ）先（さき）に乳母（うば）從（つ）いて出る。

カピ長 日（ひ）が沈（しず）むと露（つゆ）が降（お）りるは尋常（よ）のつね）ぢやが、甥（をひ）の日没（ひのいり）には如瀧雨（どしやぶり）ぢや。どうぢや！ 噴水像（みづふき）どの！ え、まだ泣（な）いて

おぢやるか？ え、いつまでも雨天（しけ）つゞきか？ 其許（おぬし）は只（ただ）一（ひと）つの小（ちひ）さい身體（からだ）で、船（ふね）にもなれば、海（うみ）にも風（かぜ）にもなりやる。先（ま）づ目（め）は海（うみ）ぢや、終始（たえず）涙（なみだ）の満干（みちひき）がある、身體（からだ）は船（ふね）、其（その）鹽辛（しほから）い浪（なみ）を走（はし）る、溜息（ためいき）は風（かぜ）ぢや、涙（なみだ）の浪（なみ）と共（とも）に荒※（「五十回」、第4水準2-12-11）（あれまは）り、涙（なみだ）はまたそれを得（え）て倍※（二の字点 1-2-22）（ます／＼）荒（あ）るゝ、はて、和（なぎ）が急（きふ）に來（こ）なんたら、命（いのち）の船（ふね）が顛覆（ひっくりかへ）ってしまふわい。……何（なん）とぢや、卿（そなた）！ 吩咐（いひつ）けた



通（とほ）りをお語（かた）りやつたか？

カピ妻 はい、申（まう）しましたなれど、有難（ありがた）うはござりまするが、望（のぞ）まぬと言（い）うてゐます。阿呆（あほう）めは墓（はか）へ嫁入（よめいり）したがようござりまする！

カピ長 ま、待（ま）たしませ！ 如何（どう）したと言（い）はします、いさや、どうしたと被言（おしや）るのぢや？ え！ 望（のぞ）まぬ？

有難（ありがた）いとと思（おも）はぬか？ 其（その）身（み）の名譽（めいよ）ぢやと思（おも）はぬか？ おのれ、嬉（うれ）しいと思（おも）ひをらぬか、あのやうな、分不相應（ぶんふさうおう）の貴人（きにん）を親（おや）が婿（むこ）にしてとらしたをば？

ヂュリ さア、名譽（めいよ）ぢやと思（おも）はぬど、嬉（うれ）

しいとは思（おも）ひまする。嫌（いや）なものを名譽（めいよ）には  
能（よ）うせねど、其（その）嫌（いや）なことも妾（わたし）を可愛  
（かわゆ）さにして下（くだ）されたと思（おも）へば嬉（うれ）しい。  
カピ長 何（なん）ぢや、何（なん）ぢや！ 小理窟屋（こりくつや）が！  
何（なん）ぢやそれは？ 「名譽（めいよ）ぢや」、「嬉（うれ）しい  
と思（おも）ひまする」、「嬉（うれ）しいと思（おも）ひませぬ」。し  
かも尚（なほ）「名譽（めいよ）ぢやとは思（おも）ひませぬ」はて、こゝ  
な我儘（わがまゝ）どの、嬉（うれ）しがたり名譽（めいよ）がった  
りする間（ひま）に、其（その）上等（けっこう）な脚節（すねふし）  
でも調査（しら）べておきや、次（つぎ）の木曜日（もくえうび）にパ  
リスと一しよに會堂（くわいだう）へ行（ゆ）くために。さうでないと、

簀子(すのこ)の上(うへ)へ叩(たゝ)き伏(ふ)せて、引摺(ひきず)って行(ゆ)かうぞよ。おのれ、萎黄病(ぬわうびやう)で死(し)んだやうな面(つら)をしをって！ うぬ／＼、碌(ろく)でなし！  
おのれ、白蠟面(びやくろうづら)めが！

長者(ちやうじゃ)立(た)ちかゝる。

カピ妻 あさましい！ 貴下(こなた)は氣(き)でも狂(くる)うたか？

ヂュリエット父(ちゝ)の前(まへ)に膝(ひざ)まづく。

ヂュリ もうし、父上(ちゝうへ)、膝(ひざ)をついて願(ねが)ひまする、たった一言(ひとこと)堪忍(かんにん)して聽(き)いて下(くだ)され。

カピ長　くたばりをれ、碌（ろく）でなしめが！　不孝千萬（ふかうせ  
んばん）な奴（やつ）ぢや！　こりややい、次（つぎ）の木曜日（もく  
えうび）に教會堂（けうくわいだう）へ往（ゆ）きをらう。往（ゆ）か  
ずば、又（また）と此（この）顔（かほ）を見（み）るな。言（い）ふな、  
答（こた）へるな、返答（へんたふ）するな。此（この）指（ゆび）が  
むづ／＼するわい。……奥（おく）よ、子（こ）をば神（かみ）が只（ただ）  
一人（ひとり）しか賜（たまは）らなんだのを不足（ふそく）らしう思（お  
も）うたこともあつたが、今（いま）となつては此奴（こやつ）一人（ひ  
とり）すら多過（おほす）ぎる、取（と）りも直（なほ）さず、呪咀（じゆ  
そ）ぢや、禍厄（わざはひ）ぢや、うぬ／＼、賤婢（はしたをんな）め！  
乳母　はれまア、可愛相（かはいさう）に！　其様（そのやう）に叱（し

か)らしやりますは、殿(との)さま、それは貴下(こなた)が無理(むり)でござります。

カピ長 な、なぜぢや、賢女(けんぢよ)どの！ 聰明様(おりこうさま)、ま、お黙(だま)りなされ。喋々語(べちやつ)きたくば、とつと、彼方(あち)へ往(い)て、冗口仲間(むだぐちなかま)と饒舌(しやべ)れ。

乳母 お爲(ため)にならぬことは言(い)ひませぬわいの。

カピ長 はい、さやうなら、御機嫌(ごきげん)よう！

乳母 物言(ものい)うては、わるいかいな？

カピ長 黙(だま)れ、むが／＼と、阿呆(あほう)め！ 其許(おぬし)の御託宣(ごたくせん)は、冗口仲間(むだぐちなかま)と酒(さ

け)でも飲合(のみあ)ふ時(とき)に被言(おしや)れ、こゝには用(よう)は無(な)いわ。

乳母 貴下(こなた)は餘(あま)り逆上(のぼ)せてござる。

カピ長 はて、氣(き)ちがひにもなるわさ。晝(ひる)も夜(よる)も、

季(き)も節(せつ)も、念々刻々(ねんくくく)、働(はたら)

いてゐよが、遊(あそ)んでゐよが、只(ただ)一人(ひとり)ゐよが、

多勢(おほぜい)と共(とも)にゐよが、女(むすめ)めが縁邊(えん

ぺん)を苦勞(くらう)にせなんだ時(とき)は無(な)い。やつとの

事(こと)で、門閥家(もんばつか)の、良(よ)い領地有(りやうち

もち)の、年(とし)の若(わか)い、教育(けういく)も立派(りっぱ)

な、何様(なにさま)才徳(さいとく)の具足(ぐそく)した男(をと

こ)は斯(か)うもありがたいもの、と望(のぞ)まるゝ通(とほ)りに  
出来上(できあが)つてゐる婿(むこ)を捜(さが)して、供給(あて  
が)へば、見(み)ともない、吠面(ほえづら)さかいて、泣偶人(な  
きにんぎやう)め、幸福(しあはせ)をば幸福(しあはせ)とも思(お  
も)ひをらいで、「嫁入(よめいり)はせぬ」の、「戀(こひ)は知(し)  
らぬ」の、「まだ年齢(としは)がゆかぬ」の、「赦(ゆる)して下(く  
だ)されい」の、と吐(ぬか)しをる。したが、嫁入(よめいり)をせ  
ぬとならば、赦(ゆる)してもくれう。好(す)きな處(ところ)で草  
食(くさは)みをれ、此處(ここ)には住(すま)さぬわい。やい、よ  
う思(おも)へ、よう考(かんが)へをれ、戲言(たはぶれごと)は言(い)  
はぬ乃公(おれ)ぢや。木曜日(もくえうび)は今(いま)の間(ま)、

胸(むね)に手(て)を置(お)いて思案(しあん)せい。我子(わがこ)ならば親友(しんいう)の許(もと)へ遣(や)る、さなくば首(くび)を縊(く)らうと、乞食(こじき)をせうと、餓(う)ゑて途上死(のたれじに)をしをらうとまゝぢや、誓文(せいもん)、我子(わがこ)とは思(おも)はぬわい、また何一(なにひと)つたりと、汝(おのれ)には與(く)れまいぞよ。よいか、一言(ごん)は無(な)いぞよ。誓言(せいごん)は破(やぶ)らぬぞよ。

長者(ちやうじゃ)入(は)ひる。ヂュリエット泣倒(なきたふ)る。ヂュリ 大空(おほぞら)の雲(くも)の中(なか)にも此(この)悲痛(かなしみ)の底(そこ)を見透(みとほ)す慈悲(じひ)は無(な)いか？ おゝ、母(か)さま、わたしを見棄(みす)て、下(くだ)さりま



すな！ 此（この）婚禮（こんれい）を延（のば）して下（くだ）され、  
せめて一月（ひとつき）、一週間（しゅうかん）。それも能（かな）はぬなら、  
チツバルトが臥（ね）てゐやる薄昏（うすぐら）い廟（べう）の中（なか）  
か）に婚禮（こんれい）の床（とこ）を設（まう）けて下（くだ）され。  
カピ妻 わしに物（もの）を被言（おしゃ）んな、わしは最早（もう）何（なに）  
にも言（い）ひますまいほどに。好（す）きにしや、もう其方（そな）  
た）には關（かま）ひませぬほどに。

夫人（ふじん） 入る。

ヂュリ おゝ！……おゝ、乳母（うば）や！ 如何（どう）したらよい  
であらうぞ？ 夫（をと）は地上（ちじやう）、誓約（ちかひ）は天  
上（てんじやう）。何（なん）として其（その）誓約（ちかひ）が再（ふ

たゝび地上（ちじやう）に戻（もど）らうぞ、其（その）夫（つま）が地（ち）を離（はな）れて天（てん）から取戻（とりもど）してたも  
らうぞ？……慰（なぐさ）めてたも、教（をし）へてたも。……かなし  
や／＼、此身（このみ）のやうな孱弱（かよわ）い者（もの）を天（て  
ん）までが陰謀（たくら）んで責（せ）めさいなむ！……これ、乳母（う  
ば）、どうせう？ 嬉（うれ）しいことを言（い）うてたも。何（なん）ぞ慰（なぐさ）めはないかいの？

乳母 誓文（せいもん）、ござります。ロミオどのは追放（つみほう）の身（み）ぢやほどに、世界（せかい）が崩（くづ）れうと、戻（もど）つて來（き）て何（なん）のかのと言（い）はッしやらう筈（はず）は無（な）い。よしや戻（もど）らッしやるにせい、ほんの窃々（こつそり）

の内密沙汰（ないしよぎた）ぢゃ。すれば、かうなつてしまつた上（うへ）は、あの若殿（わかとの）へ嫁入（よめい）らッしやるが最（いつ）ち良（よ）い分別（ふんべつ）ぢゃ。おゝ、ほんに可憐（かはいら）しいお方（かた）。彼方（あなた）に比（くら）べてはロミオどのは雑巾（ざふきん）ぢゃ。萌黄色（もえぎいろ）の、活々（いき／＼）とした美（うつく）しい眼附（めつき）、鷲（わし）の目（め）よりも立派（りっぱ）ぢゃ。ほんに／＼、こんどのお配偶（つれあひ）こそ貴嬢（こなた）のお幸福（しあはせ）であらうぞ、前（まへ）のよりははずつと優（まし）ぢゃ。よし然（さ）うでないにせい、前（まへ）のは最早（もう）絶滅（だめ）ぢゃ、いや、絶滅（だめ）も同様（どうやう）ぢゃ、離（はな）れて住（す）んでござつて、貴嬢（こなた）のまゝにならぬによつて。

ヂュリ そりや「#「そりや」はママ」其方（そなた）本氣（ほんき）  
で言（い）やるか？

乳母 はい、本氣（ほんき）でも本心（ほんしん）でもござります、  
でなくば罰（ばち）が當（あ）たれ！

ヂュリ 其通（そのとほ）りに！

乳母 えゝ？

ヂュリ なに、あの、其方（そなた）の慰（なぐさ）めで不思議（ふしぎ）  
に心（こゝろ）が安堵（おちつ）いた。奥（おく）へ往（い）て、母様  
（はゝさま）に言（い）うてたも、父上（ちゝうへ）の御不興（ごふきよ  
う）を受（う）けたゆゑ、懺悔（ざんげ）をして罪（つみ）を赦（ゆる）  
して貰（もら）はうとて、ロレンスどのゝ庵室（あんじつ）へわしが往

(い) んだと。

乳母 はい、心得(こころえ)しました。それこそ賢(かしこ)い御分別(ごぶんべつ)ぢゃ。

乳母(うば) 入る。ヂュリエットじつと行方(ゆくかた)を見送(みおく)って

ヂュリ 罰當(ばちあた)りの夜叉(やしや)め! おゝ、悪魔(あくま)め! 予(わし)に誓約(ちかひ)を破(やぶ)らせうとしをるばかりか、前(まへ)には幾千度(いくせんたび)も比(くら)べ物(もの)の無(な)いやうに褒(ほ)めちぎった予(わし)の殿御(とのご)を其(その)同(おな)じ舌(した)で悪口(あくこう)しをる。……去(い)ね、相談敵手(さうだんあひて)にした其方(そち)ぢゃが、其方(そ

ち)と予(わし)とは今(いま)からは心(こころ)は別々(べつ／＼)。  
……御坊(ごぼう)の許(ところ)へ往(い)て救(すく)ひを乞(こ)はう。事(こと)が皆(みな)破(やぶ)れても、死(し)ぬる力(ちから)は此身(このみ)に有(あ)る。  
ヂュリエット入る。

## 第四幕

第(だい)一場(ぢやう) ※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。

ロレンス法師(ほふし)の庵室(あんじつ)。

ロレンス法師(ほふし)とパリスと出る。

ロレ 木曜日(もくえうび)と仰(おほ)せらるゝか? では早急(さつ

きふ)な事(こと)ぢや。

パリス 舅(しうと)カピューレットどのが其様(そのやう)にしたい  
と被言(おしや)る。予(わし)とてもそれを遅(おそ)うしたいとは  
思(おも)ひませぬ。

ロレ 姫（ひめ）の心（こゝろ）はまだ知（し）らぬと仰（おほ）せらるゝ。すれば段取（だんどり）が素直（すなほ）でない、吾等（われら）は好（この）もしう思（おも）ひませぬ。

パリス チツバルトの落命（らくめい）をいみじう歎（なげ）いてゝあつたゆゑ、涙（なみだ）の宿（やど）には戀神（※）（濁点付き片仮名中、1-7-83）ーナスは笑（ゑ）まぬものと、縁談（えんだん）を差控（さしひか）へてゐたところ、餘（あま）り甚（きつ）う歎（なげ）いては姫（ひめ）の身（み）が心元（こゝろもと）ない、獨（ひとり）でゐれば洪水（こうずゐ）のやうに出（で）る涙（なみだ）も、交（まじ）らふ者（もの）があれば堰止（せきと）むることも出来（でき）るものと、舅御（しうとご）の才覺（さいかく）にて、急（きふ）に婚禮（こんれ



い)と事(こと)が決(きま)った。速(はや)うせねばならぬ仔細(わけ)を、何(なん)と會得(ゑとく)めされたか？

ロレ (傍を向きて)それは遅(おそ)うせねばならぬ仔細(わけ)が、此方(こち)に解(わか)つてをらなんだらなア!……あれ、御覽(ごらう)ぜ、姫(ひめ)が此庵(こゝ)にわせられた。

ヂュリエット出る。

パリス 嬉(うれ)しう逢(あ)ひました、我妻(わがつま)。

ヂュリ 妻(つま)とも呼(よ)ばしませ、婚禮(こんれい)が叶(かな)な)ふなら。

パリス 叶(かな)はいでならうか、此次(このつき)の木曜日(もくえうび)には？

ヂュリ 叶（かな）はいでならぬことは叶（かな）ふ筈（はず）ぢゃ。

ロレ こりや格言（かくげん）ぢゃわい。

パリス 今日（けふ）は師（し）の御坊（ごぼう）に懺悔（ざんげ）をばしよう爲（ため）にわせられたか？

ヂュリ はい、というたなら、貴下（こなた）へ自白（ざんげ）をしたことになりませうぞ。

パリス 吾等（われら）を思（おも）うてゐるといふことを、御坊（ごぼう）に打明（うちあ）けて言（い）うて下（くだ）され。

ヂュリ では、打明（うちあ）けて申（まう）しませう、わたしは御坊（ごぼう）様（ごぼうさま）を思（おも）うてゐます。

パリス 吾等（われら）をも同（おな）じやうに思（おも）うてゐる、

と言(い)うて下(くだ)されうがな。

ヂュリ さア、言(い)ふにせい、それは背(せ)で言(い)うてこそ  
價値(ねうち)もあれ、面(かほ)を見合(みあ)せて言(い)はうより。  
パリス やれ、笑止(きのどく)や、卿(そなた)の面(かほ)は涙(な  
みだ)で甚(いか)う汚(よご)れてゐる。

ヂュリ 涙(なみだ)が何程(どれほど)の事(こと)をしませう、生  
得(うまれつき)、見(み)ともない面(かほ)ぢやもの。

パリス 其様(そのよ)なことを被言(おしや)るのは、われから我面  
(わがかほ)を讒訴(ざんそ)するのぢや。

ヂュリ 眞(ほん)の事(こと)は讒訴(ざんそ)とは言(い)はれぬ、  
ましてこれは後言(かげごと)ではない、直(ぢか)に面(かほ)に對

(むか) うて言(い) うてゐるのぢやもの。

パリス いや、卿(こなた)の面(かほ)は今(いま)では予(わし)の有(もの)ぢやに、それをば其様(そのやう)に惡(あ)しう被言(おしや)るのは讒訴(ざんそ)ぢや。

ヂュリ ほんに然(さう)もあらうか、妾(わたし)の有(もの)ではないゆゑ。……(ロレンスに)御坊様(ごぼうさま)、今(いま)お暇(ひま)でござりますか、改(あらた)めて晩(ばん)のお祈祷頃(いのりごろ)に參(まゐ)りませうか？

ロレ いや、今(いま)でも故障(こしょう)は無(な)い。……若殿(わかとの)、憚(はゞか)りぢやが、暫(しばら)くの間(あひだ)、こゝを吾等(われら)に。

パリス おゝ、かりそめにも勤行（ごんぎやう）のお妨（さまた）げを  
してはならぬ！……ヂュリエットどの、木曜日（もくえうび）には朝（あ  
さ）早（はや）うお迎（むかへ）に行（ゆ）きませうぜ。それまでは、  
おさらば。此（この）聖（きよ）い接吻（キッス）を保有（しま）って  
おいて下（くだ）され。

パリス入る。

ヂュリ おゝ、早（はや）う扉（と）を閉（し）めて、そしてしめてま  
うたら、わたしと一しよに泣（な）いて下（くだ）され。もう絶望（だ  
め）ぢゃ！ 絶望（だめ）ぢゃ、絶望（だめ）ぢゃ！

ロレ あゝ、これ、ヂュリエットや、其（そ）の悲歎（かなしみ）は  
善（よ）う知（し）ってをる！ 何（なん）ぼう搾（しぼ）っても予（わ

し)の智慧(ちえ)には能(あた)はぬ。次(つき)の木曜(もくえう)には、寸分(すんぶん)の猶豫(ゆうよ)もなう、彼(あ)の若(わか)と婚禮(こんれい)を爲(し)やらねばならぬと聞(き)いた。

ヂュリ いゝえ、それを中止(やめ)にする方便(てだて)が無(な)いなら、聞(き)いたなぞとおッしやるな。お前(まへ)の智慧(ちえ)にも能(あた)はぬなら、つい予(わし)の覺悟(かくご)をば良(よ)い分別(ふんべつ)ぢやと讚(ほ)めて下(くだ)され、すれば此(この)懷劍(くわいけん)で今直(いますぐ)に敢行(しての)けう。ロミオとわしの心(こゝろ)と心(こゝろ)を結(むす)び合(あ)はせたは神様(かみさま)、手(て)と手(て)を繫(つな)いだはお前(まへ)。すれば、お前(まへ)がロミオへの封印代(ふいんがは)りにした此(この)

手(て)を、他(あだ)し證書(しょうしょ)の封印(ふういん)に使(つか)か(か)はうより、又(また)偽(いつは)りの無(な)い此(この)心(こゝろ)を操(みさを)に背(そむ)いて他(あだ)し男(をとこ)に向(む)けうより、此(この)懷劔(くわいけん)で手(て)も心(こゝろ)も突殺(つきころ)してのけう。ぢやによつて今直(いますぐ)にお前(まへ)の長(なが)い年功(ねんこう)で良(よ)い思案(しあん)をして下(くだ)され。さもなくば、此(この)怖(おそろ)しい懷劔(くわいけん)を難儀(なんぎ)の瀬戸際(せどぎは)の行司(ぎやうじ)にして、年(とし)と(と)の功(こう)も智慧(ちえ)の力(ちから)も如何(どう)とも能(よ)うせぬ女一人(をんなひとり)の面目(めんもく)を今(いま)こゝで裁決(とりさば)かす、見(み)て下(くだ)され。さ、早(はや)う

何(なん)となど言(い)うて下(くだ)され。わしゃ早(はや)う死(し)にたい、お前(まへ)の言(い)ふことが何(なん)の役(やく)にも立(た)たぬやうなら。

ロレ　　まア、お待(ま)ちやれ。助(たす)かる術(すべ)を思(おも)ひついたわ。必死(ひっし)の厄(やく)を脱(のが)れうためゆゑ必死(ひっし)の振舞(ふるまひ)をもせねばならぬ。パリスどのと祝言(しうげん)するよりも寧(いっ)そ自害(じがい)せうと程(ほど)の逞(たくま)しい意志(こゝろざし)がおりやるなら、いゝやさ、恥辱(はぢ)を免(まぬか)れうために死(し)なうとさへお爲(し)やるならば、同(おな)じ望(のぞみ)のために死(し)ぬるに似(に)た一事(あ)ること)をば多分(たぶん)敢行(しての)くることが出来(でけ)う。



敢行（しての）けう意（こゝろ）なら救（すく）はるゝ術（すべ）を授  
（さづ）けう。

ヂユリ おゝ、パリスどのと祝言（しうげん）をせう程（ほど）なら、  
あの塔（たふ）の上（うへ）から飛（と）んで見（み）い、山賊（やま  
だち）の跳梁（はびこ）る夜道（よみち）を行（ゆ）け、蛇（へび）の  
棲（す）む叢（くさむら）に身（み）を潜（ひそ）めいとも言（い）はッ  
しやれ。吼（ほ）ゆる荒熊（あらくま）と一しよにも繫（つな）がれう、  
墓（はか）の中（なか）にも幽閉（おしこ）められう、から／＼と鳴（な）  
る骸骨（がいこつ）や穢（むさ）い臭（くさ）い向脛（むかはぎ）や黄  
（き）ばんだ頤（あご）のない髑髏（しやれかうべ）が夜々（よる／＼）  
掩（おほ）ひ被（かぶさ）らうと。又（また）昨日（きのふ）今日（け

ふ)の新墓(しんばか)で死人(しびと)の墓衣(はかぎ)に苞(くる)まつて隠(かく)れてゐよとも言(い)はッしやれ。聞(き)いたばかりでも、例(つね)は身毛(みのけ)が彌立(よだ)ったが、大事(だいじ)の操(みさを)を立(た)つる爲(ため)なら、躊躇(ちゅうちよ)せいで敢行(しての)けう。

ロレ では、待(ま)ちやれ。先(ま)づ今日(けふ)は立歸(たちかへ)つて、嬉(うれ)しさうにもてなし、パリスどのとの祝言(しうげん)を承諾(しょうだく)しやれ。明日(あす)は水曜日(すいえうび)ぢや。明日(あす)は何(なん)とかして一人(ひとり)でお臥(ね)やれ、乳母(うば)をも同(おな)じ間(ま)には臥(ね)かさッしやるな。床(とこ)にお入(はひ)りやったら、(小さき藥瓶(やくびん)を取出(と)し)此(この)

瓶(びん)を取(と)って此(これ)なる藥水(やくすゐ)をばお飲(の)みやれ。すると、即(やが)て慄然(ぞつ)として眠(ねむ)たいやうな氣持(きもち)が血管中(けつくわんぢゆう)に行渡(ゆきわた)り、脈搏(みやくはく)も例(いつも)のやうではなうて、全(まった)く止(や)み、生(い)きてをるとは思(おも)はれぬ程(ほど)に呼吸(こきふ)も止(と)まり、體温(ぬくみ)も失(う)する。頬(ほ)、唇(くちびる)の薔薇(ばら)も褪(あ)せて、蒼白(あをじろ)い灰(は)ひ(と)變(かは)る。目(め)の窓(まど)もはたと閉(と)づる、生(い)活(いのち)の日(ひ)がつい暮(く)れて行(ゆ)く時(とき)のやうに。どこも／＼硬固(しゃちこば)って、冷(つめた)うなつて、自在(じざい)な活動(はたらき)をば失(う)しなうて、死切(しにき)つ

たやうにも見(み)えう。さて、此(この)死切(しにき) ったらしい  
相(すがた)で四十二時(とき) 經(た)つときは、氣持(きもち)の  
好(よ)い睡(ねむり)から醒(さ)むるやうに、自然(しねん)と起  
(お)きさツしやらう。然(しか)るに、翌朝(あくるあさ)、あの新郎  
殿(むこどの)が卿(おこと)を迎(むか)ひにとて來(わ)するころは、  
卿(おこと)は恰(ちやう)ど死(し)んでゐる。すれば、當國(この  
くに)の風習通(ならはしどほ)りに、顔(かほ)は故(わざ)と隱(かく)  
さいで、最(いっち)良(よ)い晴衣(はれぎ)を着(き)せ、柩車(ひ  
つぎぐるま)に載(の)せて、カピューレット家(け)代々(だい／＼)  
の古(ふる)い廟舎(たまや)へ送(おく)られさツしやらう。其間(そ  
のひま)に、予(わし)の消息(しらせ)で、ロミオが此(この)計畫

(けいくわく)を知(し)り、卿(おこと)が覺(さ)めさッしやる前(まへ)に、此方(こち)へ來(く)ることとならう。予(わし)も共々(とも／＼)目覺(めさめ)まで番(ばん)をして、其夜(そのよ)の中(うち)にロミオが卿(おこと)をばマンチュアへ伴(つ)れて行(いな)う。卿(おこと)の心(こゝろ)さへ變(かは)らずば、女々(め々)しい臆病心(おくびやうごゝろ)の爲(ため)に、敢行(しての)くる勇氣(ゆうき)さへ弛(ゆる)まなんだら、此度(このたび)の耻辱(はぢ)は脱(のが)れられうぞ。

ヂュリ 下(くだ)され、さ、それを。早(はや)うそれを！ おゝ、何(なに)の臆病心(おくびやうごゝろ)！

ロレ まゝ、歸(かへ)らしめ。(藥瓶を渡し)さらば、遅(たくま)

しう覺悟（かくご）して、首尾（しゅび）よう事（こと）を爲遂（しと）げさッしやれ。予（わし）はまた一（さる）法師（ほふし）に、卿（おこと）の殿御（とのご）への書面（しよめん）を持（も）たせ、急（いそ）いでマンチュアまで遣（や）りませう。

ヂュリ 戀（こひ）よ、予（わし）に力（ちから）をくれい！ 力（ちから）さへあれば事（こと）は成（な）らう。……御坊（ごぼう）さま、さらば。

左右（さいう）へ別（わか）れて入る。

第（だい）二場（ぢやう） 同處（どうじよ）。カピユレット邸（てい）の一室（いつしつ）。

カピユレット長者（ちやうじや）を先（さき）に、同（おな）じく夫人（ふじん）、乳母（うば）、并（なら）びに下人（げにん）甲（かふ）、乙（おつ）、從（つ）いて出る。

カピ長 こゝに書（か）いてあるだけの客人（きやくじん）を招待（せうだい）せい。……

甲（かふ）の下人（げにん）入（はひ）る。乙（おつ）の下人（げにん）に向（むか）ひ

やい、汝（そち）は料理人（れうりにん）の老練（らうれん）な奴（やつ）を二十人（にん）ばかり雇（やと）うて來（こ）い。

乙下人 御懸念（ごけねん）なされますな、先（ま）づ指（ゆび）を嘗

(な) めさせて見(み)て雇(やと)ひまする。

カピ長 それはまた如何(どう)した理由(わけ)ぢや？

乙下人 はて、うぬが指(ゆび)を能(よ)う嘗(な)めぬやうな奴(やつ)は不可(いけ)ぬ料理人(れうりにん)でござります。それゆゑ指(ゆび)を能(よ)う嘗(な)めぬ奴(やつ)は採用(とりあ)げませぬ。  
カピ長 往(ゆ)け／＼。……

乙(おつ)の下人(げにん)入る。

必定(ひつぢやう)、何(なに)かと行届(ゆきとぎ)かぬがちであらうわい。え、こりや、女(むすめ)はロレンス御坊(ごぼう)の許(ところ)へ往(い)たか？

乳母 さよでござります。



カピ長 うゝ、御坊（ごぼう）の庇（かげ）で、ちと料簡（れうけん）も直（なほ）りをらうわい。氣儘（きまゝ）な、没分曉的（わからずや）の賤婦（あまつちや）めぢや。

ヂュリエット出る。

乳母 あれ、嬢（ぢやう）が嬉（うれ）しさうな顔（かほ）して、お懺悔（ざんげ）から歸（かへ）らしやれた。

カピ長 どうぢや、剛情張（がうじよツぱり）が？ どこを漫歩（ほつきある）いて？ 何處（どこ）にゐたのぢや？

ヂュリ 父（とゝ）さまの命令（おほせごと）に省（そむ）いた不孝（ふかう）の罪（つみ）を悔（くや）むことを習（なら）うた處（ところ）に。（膝まづきて）かうして地（ち）に平伏（ひれふ）して父（とゝ）さまの赦

(ゆるし)を乞(こ)へいと、あのロレンスどのが言(い)はれました。どうぞ堪忍(かんにん)して下(くだ)され！ これからは善(よ)う命令(おほせつけ)を聽(き)きます。

カピ長 それ、パリスどのを呼(よ)びにやって、速(はや)う此事(このこと)を知(し)らせい。明日(あす)は朝(あさ)の間(ま)に此(この)縁結(えんむす)びを濟(すま)さうわい。

ヂュリ その若(わか)にロレンスどのは庵室(あんじつ)で逢(あ)うたゆゑ、女(をなご)の謹慎(つゝしみ)に障(さは)らぬ限(かぎ)りの、ふさはしい會釋(ゑしやく)をしておきました。

カピ長 はて、それは重疊(ちようたが)ちようでう／＼。よし／＼。起(た)ちや／＼。(ヂュリエットを扶け起し)さうなうてはならぬ筈(はず)ぢや。

……ま、ともかくも若(わか)に逢(あ)はうわ、さうぢや、はて、速(はや)う往(い)て彼(か)の人(ひと)を伴(つ)れて來(こ)いといふに。……さてはや、實(じつ)に高德(かうとく)のあの上人(しやうにん)、此(この)市中(まちぢゆう)の者(もの)で、誰(た)れ一人(ひとり)、彼(か)の人(ひと)の庇(かげ)を蒙(かうむ)らぬものはないわい。ヂュリ 乳母(うば)や、一(い)しよに部屋(へや)へ來(き)て、明日(あす)被(き)ねばならぬ最(いっ)ち似合(にあ)ふ晴衣(はれぎ)を手傳(てつだ)うて撰(えら)んでくりや。

カピ妻 木曜日(もくえうび)までは急(いそ)ぐに及(およ)ばぬ。まだ澤山(たくさん)間(ま)があるがな。

カピ長 乳母(うば)よ、往(ゆ)け一(い)しよに。……明日(あす)教會

(けうくわい) へ往(ゆ)くことにせう。

ヂュリエットと乳母(うば) と入る。

カピ妻 では、準備(ようい)をする暇(ひま)もあるまい。もう即(や)が(て)夜(よる)ぢや。

カピ長 なにさ／＼、乃公(おれ)が馳驅奔走(かけずりまは)るわさ、さすれば、大丈夫(だいぢやうぶ)、どうにかなるわさ。卿(そなた)は、ヂュリエットの許(とこ)へ往(い)て、着(き)る物(もの)を手傳(てつだ)うてやりや。乃公(おれ)は今夜(こんや)は寢(やす)むまい。はて、任(まか)せておきや。今夜(こんや)ほどは女房役(にようば)うやく)をせうわい。……(奥に向ひて)こりや、誰(た)れかぬか! ……皆(みな)出拂(ではら)うてしまった。むゝ、自身(じしん)で

パリスどのゝ邸（やしき）へ往（い）て、明朝（あす）の準備（こゝろがまへ）をさせて來（こ）う。心（こゝろ）がおそろしう輕（かる）うなつたわい、あの我儘者（わがまゝもの）めが改心（かいしん）しをったによつて。

二人（ふたり）ともに入る。

第（だい）三場（ぢやう） 同處（どうじよ）。ヂュリエットの居間（ゐま）。

ヂュリエットを先（さき）に乳母（うば）從（つ）いて出る。

ヂュリ あい、其（その）晴着（はれぎ）が最（いっ）ち佳（よ）い。

それはさうと、乳母（うば）や、今宵（こよひ）は予（わし）をどうぞ一人（ひとり）で寝（ね）かしてくりや。知（し）つてゐやる通（とほ）りの、執拗（ねぢく）れた、此（この）罪深（つみふか）い心（こゝろ）を、神様（かみさま）に赦（ゆる）して貰（もら）ふため、いろ／＼とお祈（いのり）をせねばならぬ。

カピユーレットの夫人（ふじん）出る。

カピ妻 え、何（なん）と、忙（いそが）しうおぢやるなら、手傳（てつだ）ひませうか？

ヂュリ いゝえ、母様（かゝさま）、明日（あす）の式（しき）に相應（ふさは）しい入用（いりよう）な品程（しなほど）は既（も）う撰出（えりだ）しておきました。それゆゑ、妾（わたし）にはお介意（かまひ）

なう、乳母（うば）はお傍（そば）で夜中（よぢゆう）お使（つか）ひ下（くだ）されませ。かうした早急（さつきふ）な取込（とりこみ）ゆゑ、嘸（さぞ）お手（て）が足（た）りますまい。

カピ妻（かひつま）では、機嫌（きげん）よう、床（とこ）に就（つ）いてお休（やす）み、それが何（なに）よりも大切（たいせつ）ぢやほどに。

夫人（ふじん）乳母（うば）を伴（つ）れて入る。

ヂュリ さやうなら！……又（また）いつ逢（あ）はるゝやら。……おゝ、總身（そうみ）が寒（さむ）け立（だ）って、血管中（けつくわんぢゆう）に沁（し）み徹（とほ）る怖（おそ）ろしさに、命（いのち）の熱（ねつ）も凍結（こご）えさうな！ 寧（いっ）そ皆（みな）を呼戻（よ）びもど）さうか？ 乳母（うば）！……えゝ、乳母（うば）が何（なん）

の役（やく）に立（た）つ？ 怖（おそろ）しい此（この）一場（ば）は、  
一人（ひとり）で如何（どう）あつても勤（つと）めにやならぬ。……  
さア、來（こ）い、瓶（びん）よ。

藥瓶（くすりびん）を取上（とりあ）げる。

とはいへ、若（も）し此（この）藥（くすり）に、何（なん）の效力（きゝ  
め）も無（な）かつたなら？ すれば、明日（あす）の朝（あさ）となつて、  
結婚（けっこん）を爲（し）ようでな？ いや／＼。……それは此劍（これ）

が（と懷劍（くわいけん）を取り上げ）させぬ。……やい、其處（そこ）にさうしてゐい。

（と懷劍（くわいけん）を下（した）に置く）。……萬（まん）一（いち）、此（この）藥（くすり）が毒  
藥（どくやく）であつたら？ ロミオどのと縁組（えんぐみ）させてお  
きなから、此（この）婚禮（こんれい）をさすときは、宗門（しゅうもん）



ん)の恥(はぢ)となるによつて、それで予(わし)を殺(ころ)さう  
といふ深(ふか)い陰謀(たくみ)の毒藥(どくやく)ではあるまいも  
のでもない。いや、よもや其様(そのやう)なこともあるまい、不  
斷(ふだん)から上人(しやうにん)と人(ひと)に崇(あが)められ  
た彼(あの)法師(ほふし)ぢや。……したが、墓(はか)の中(なか)  
に臥(ね)てゐる時分(じぶん)、まだロミオがお來(き)やらぬうちに、  
若(も)し目(め)が覺(さ)めたら何(なん)とせう? さア、それ  
が怖(おそろ)しい! 其(その)壻(あなむろ)で呼吸(いき)が塞  
(つま)つてはしまやせぬか? 其(その)穢(むさ)い穴(あな)の  
中(なか)へは清(きよ)い空氣(くうき)は些程(つゆほど)も通(か  
よ)はぬゆゑ、ロミオどのが來(わ)する頃(ころ)には予(わし)や

死（し）んでしまつてゐねばなるまい。若（も）し生（い）きてゐるやうなら……時（とき）も時（とき）、處（ところ）も處（ところ）、墓（はか）も墓（はか）、年（とし）を經（へ）た埋葬所（はふむりどころ）、何（なん）百年（ねん）の其間（そのあひだ）の先祖（せんぞ）の骨（ほね）が填（つ）充（つ）ま）つてあり、まだ此間（このあひだ）埋（う）め）たばかりの彼（あ）のチツバルトも血（ち）まぶれの墓衣（はかぎ）のまゝで、定（さだ）めて腐（くさ）りかけてゐるであらうし、また眞夜中（まよなか）の幾（いく）時（とき）かは幽靈（いうれい）も出（で）るといふ……えゝ、どうしよう、目（め）が覺（さ）めたら？……厭（いや）らしい其（その）臭（にお）（にほひ）と、聞（き）けば必然（きつと）狂亂（きちがひ）になるといふ彼（あ）の曼陀羅華（まんだらげ）を根（ね）びくやうな、凄（すご）

い氣味(きみ)のわるい聲(こゑ)を聞(き)いたら……おゝ、早(はや)まつて覺(さ)めた時分(じぶん)に、其様(そのやう)な怖(おそろ)しい、畏(こは)いものに取巻(とりま)かれたら、氣(き)が違(ちが)はいでをられうか？ 先祖(せんぞ)の衆(しゅう)の手(て)や足(あし)やを偶(ふ)と玩具(もてあそび)にはしはすまいか？ 手傷(てきず)だらけのチツバルトを血(ち)みどろの墓衣(はかぎ)から引出(ひきだ)しやせぬか？ 狂氣(きやうき)の餘(あま)り、世(よ)に聞(きこ)えた或(さる)親族(うから)の骨(ほね)を取上(とりあ)げ、棍棒(ばうぎれ)のやうに揮※(「又十回」、第4水準2-12-11)ふりまはして、我(われ)と我手(わがて)で此(この)腦天(なうてん)をば摧(くだ)きやせぬか？ あれ／＼！ チツバルトの怨靈(をんりやう)が、細刃(ほ

そみ)で斫(き)られた返報(へんぼう)をしようとして、ロミオを追※(「互十回」、第ㄗ水準 2-12-12) (おひまは) してゐるのが見(み)ゆるやうぢや! あ、あれ、待(ま) ってたべ、チツバルト! ……ロミオ、わしぢや! これはお前(まへ)を思(おも)うて飲(の)むのぢや。

と薬水(やくすゐ)を飲干(のみほ)すとやがて眩暈(げんうん)したる思入(おもひいれ)にて、寢臺(しんだい)の上(うへ)、帳(とぼり)の内(うち)へ倒(たふ)れ込(こ)む。

第(だい)四場(ぢやう) 同處(どうしょ)。カピユレット邸(てい)の廣間(ひろま)。

カピユーレット夫人（ふじん）と乳母（うば）と出る。

カピ妻 待（ま）ちや、乳母（うば）、此（この）鍵（かぎ）を持（も）つて往（い）て、もそつと薬味（やくみ）を取（と）つて來（き）てたも。

乳母 お庖厨（だいどころ）では、棗（なつめ）や榎※（「木十字」、第3水準 1-85-67）（まるめる）を與（く）れいと呼（よ）んでゐます。カピユーレット長者（ちやうじや）出る。

カピ長 さゝゝゝ、働（はたら）け／＼！ 二番鶏（ぼんどり）が啼（な）いたぞ、深夜鐘（カアヒウ）が鳴（な）ったわ、もう三時（じ）ぢや。こりやアンヂェリカ、焼饅頭（やきまんぢう）はよいかの？ 費用（つひえ）は介意（かま）ふな、費用（つひえ）は。

乳母 またしてもお干渉（せつかひ）を爲（し）やしやります、さゝ、

お就禱(やすみ)なされませ。誓文(せいもん)、明日(あす)は病人(びやうにん)にならしゃりませうぞえ、此夜(こよひ)寢(ね)やしやらぬと。カピ長(うんにや、ちよつともぢや。はて、其前(そのぜん)には、もそつと些細(ささい)な事(こと)で、幾(いく)たびも夜明(よあか)しをしたものぢやが、曾(つひ)ぞ病氣(びやうき)なぞになつたことは無(な)いわい。

カピ妻(さいの、其時分(そのじぶん)には甚(きつ)い鼠捕(ねずみと)りであつたさうな。したが、わたしが不寢(ねず)の番(ばん)をするゆゑ、今(いま)は其様(そのやう)な鼠(ねずみ)をば捕(と)らすことぢやない。

夫人(ふじん)と乳母(うば)と入る。

カピ長 妬(や)きをるわい、妬(や)きをるわい!……

下人(げにん) 三四人(にん)、炙串(うをぐし)、薪(まき)、籃(てかご)などを携(たづさ)へて出る。

やい／＼、そりや何(なん)ぢや?

甲下人 料理番(れうりばん)のでござります、が、何(なん)ぢややら存(ぞん)じませぬ。

カピ長 急(いそ)げ／＼。

甲(かふ)の下人(げにん) 入る。

やい、もそつと枯(か)れた薪(まき)を取(と)つて來(こ)い。ピーターに聞(き)け、すると、在處(ありしょ)をば教(をし)へるわい。

乙下人 眼(め)がござりますから、薪位(まきぐらゐ)は見附(みつ)

けまする、へい、ピーターには及（およ）びませぬ。

乙（おつ）の下人（げにん）入る。

カピ長 南無三（なむさん）、やりをるわい。おもしろい下司野郎（げすやらう）め！ 何（なん）ぢや、薪（まき）を見（み）る眼（め）ぢや？  
乃公（おれ） やまた薪目（まきめ）くらかと思（おも）うた。……は  
れやれ、夜（よ）が明（あ）けたわ。今（いま）に彼（あ）の若（わか）  
が樂人共（がくじんども）を將（ぬ）て來（わ）するであらう、さうせ  
うと被言（おしや）ったによつて。

樂（がく）の音（ね）聞（きこ）ゆる。

もう來（わ）せたわ、……（奥に向ひて）乳母（うば）……奥（おく）よ！

こりや、やい！……こりや乳母（うば）、乳母（うば）といへば！



乳母（うば）又（また）出る。

さゝ、ヂュリエットを起（おこ）して、着飾（きかざ）らせい。俺（おれ）は往（い）てパリスどのに挨拶（あいさつ）せう。……さゝ、急（いそ）げ／＼。婿（むこ）どのは最早（もう）來（わ）せたわ。急（いそ）げ急（いそ）げ。

皆（みな）入る。

第（だい）五場（ぢやう） 同處（どうしよ）。ヂュリエットの居間（ゐま）。

ヂュリエット前（まへ）の場（ば）の儘（まゝ）に寢床（ねどこ）に倒

(たふ)れ臥(ふ)してゐる。床(とこ)には帳(とばり)がかけてある。  
乳母(うば)出る。

乳母 嬢(ぢやう)さま！ これさ、嬢(ぢやう)さま！ チュリエツ  
トさま！ ぐっすりと睡入(ねい)ってぢやな、定(ぢやう)？ はて、  
仔羊(こひつじ)さんえ！ はて、姫(ひい)さまえ！ ま、こゝなお  
寢坊(ねぼう)さんえ！ はて、可憐(いとしば)さん！ これの、お  
姫(ひい)さま！ 戀人(こひびと)さんえ！ はてま、花嫁御(はな  
よめご)さんえ！ えゝも、うんとも言(い)はっしやらぬ。もう三文  
(もん)がた眠(ね)ようでな？ なりや一週間(しうかん)がたも眠(ね)  
やっしやれ、明日(あす)の晩(ばん)となると眠(ね)らるゝことで  
はない、あの若(わか)がお前(まへ)を眠(ね)かさぬと根(ね)を

据(す)ゑてぢや。……南無三寶(なむさんぼう)、ほんにまア善(よ)う眠込(ねこ)んでござることぢや! でも是非(ぜひ)起(おこ)さにやならぬ。……嬢(ぢやう)さま嬢(ぢやう)さま! 其(その)床(とこ)の中(なか)へあの若(わか)が這入(はひ)らしゃつてもよいかや? そしたら飛起(とびお)きさっしやらうがな。何(なん)と然(さ)うであらうがな? (寢床の帳を開く)。ま、支度(したく)まで爲(し)やしゃれて! 着衣(め)したまゝで! それでまた寢(ね)たのかいな! どうしても起(おこ)さにやなりませんわい! (ゆすぶりながら) 姫(ひい)さま! 姫(ひい)さま!……あゝ、かなしや! はれ、誰(た)れぞ來(き)て下(くだ)され、たれぞ! 姫(ひい)さまが死(し)なしやつてぢや! おゝ、悲(かな)しや、生(うま)れなんだが

優(まし)であつたものを！ 速(はや)う火酒(しやうちう)を持(も)つて來(き)て下(くだ)され！ 殿(との)さまえ、奥(おく)さま！ カピユーレット夫人(ふじん)出る。

カピ妻 ま、何(なん)といふ騒(さわ)ぎぢや？

乳母 おゝ、かなしや／＼！

カピ妻 如何(どう)したのぢや？

乳母 あれを、あれを！ おゝ、悲(かな)しや／＼！

カピ妻 (立寄りて) おゝ、おゝ！ 女(むすめ)よ、我子(わがこ)よ、これ、生(い)きてたも、目(め)を開(あ)いてたも、其方(そなた)が死(し)にやると、予(わし)も一(ひと)しよに死(し)にますわいの。誰(た)れぞ來(き)て下(くだ)され！ 人(ひと)を呼(よ)びや、人(ひと)

と)を。

カピユーレット長者(ちやうじや)出る。

カピ長 どうしたものぢや、さ、速(はや)うヂュリエットを、殿御(と  
のご)が來(わ)せたに。

乳母 姫(ひい)さまは亡(な)くならしやつた、死(し)なしやり  
ました、亡(な)くならつしやつた。あら、かなしや</>!

カピ妻 あら、悲(かな)しや、女(むすめ)は死(し)にました、死  
(し)にました、死(し)にましたわいなう!

カピ長 やツ! どれ、どこに。……やれ、悲(かな)しや! こりや  
冷(つめた)いわ、血(ち)が沈(しず)んで、節々(ふし</>)が固  
硬(しやちこば)って、こりや此(この)唇(くちびる)から息(いき)

が離（はな）れてから最早（もう）久（ひさ）しい。廣（ひろ）い野邊（のべ）にも又（また）と無（な）い其（その）花（はな）に、時（とき）ならぬ霜（しも）が降（お）りたがやうに、死（し）んで行（ゆ）く女（むすめ）、ヂュリエット！

乳母 おゝ、かなしや／＼！

カピ妻 おゝ、なさけなや／＼！

カピ長女（むすめ）を奪（うば）うて泣（な）かせをる死神（し）にがみめに、此（この）舌（した）を縛（しば）られて、物（もの）を言（い）ふことが能（かな）はぬわい。

ロレンス法師（ほふし）とパリス、樂人（がくじん）らを引連（ひきつ）れて出る。

ロレ さゝ、嫁御寮（よめごれう）の教會行（けうくわいゆき）の身支度（みじたく）は整（ととの）ひましたかの？

カピ長 いかにも、往（ゆ）きて再（ふたゝ）び還（かへ）らぬ支度（したく）が。おゝ、婿（むこ）どの、いざ婚禮（こんれい）の前（まへ）の夜（よ）に、死神（しにがみ）めが貴下（こなた）の妻（つま）を寢取（ねと）りをった。あれ、あのやうに花（はな）の相（すがた）の色（いろ）も褪（あ）せたわ。死神（しにがみ）が吾等（われら）の婿（むこ）、死神（しにがみ）が吾等（われら）の嗣子（あとつぎ）、此上（このうへ）は吾等（われら）も死（し）んで何（なに）もかも彼奴（あいつ）に與（く）れう、命（いのち）も財産（しんだい）も何（なに）もかも死神（しにがみ）めに與（く）れませうわい。

パリス 今朝(けさ)、面(かほ)を見(み)る嬉(うれ)しさをば、久(ひさ)しう待焦(まちこが)れてをったに、此様(このやう)な様(さま)を見(み)ようとは！

カピ妻 憎(にく)や、かなしや、あさましや、怨(うら)めしや！

休(やす)む間(ま)もなう※(「五十回」、第4水準2-12-11)(めぐり行(ゆく)長(なが)い年月(としつき)の間(あひだ)にも、又(また)と、こんな情(なさけ)ない日(ひ)があらうかいの！ 只(ただ)一人(ひとり)の、可愛(かはゆ)い一人(ひとり)の、大事(だいじ)の、  
秘藏兒(ほんそご)をば、樂(たのし)みとも慰(なぐさ)めとも思(おも)うてみたを、取(と)ってゆかれてしまつたと思(おも)へば、もう二度(ど)とは逢(あ)はれぬ處(ところ)へ！



乳母　おゝ、悲（かな）しや！　おゝ、かなしや／＼！　こんな情（なさけ）ない、こんなあさましい日（ひ）には、わしや曾（つひ）ぞ遭（あ）うたことがない！　おゝ、こんな！　こんな！　こんな！　こんな怨（うら）めしい！　こんな忌（いま）はしい悪日（あくにち）は、わしや曾（つひ）ぞ／＼。おゝ、悲（かな）しや／＼！

パリス　欺（だま）されて、中（なか）を裂（さ）かれて、侮辱（ぶじよ）く）されて、賤蔑（さげす）まれて、殺（ころ）されてしまふたのぢや。憎（にく）い死神（しにがみ）めに欺（だま）されたのぢや。慘酷（むご）い／＼汝（おのれ）めには滅（ほろぼ）されたのぢや！　おゝ、戀人（こひごと）よ！　我（わが）命（いのち）よ！　いや／＼、命（いのち）とは言（い）はれぬ、死（し）んでしまふてゐやる我（わが）戀



てしまつた騷（さわ）ぎは、騷（さわ）げばとて治（をさま）るものではない。そも／＼此（この）娘御（むすめご）は天（てん）と貴下（こなた）の兩有（りやうもち）ぢや、今（いま）や天（てん）の獨有（ひとりもち）となつたは娘御（むすめご）の爲（ため）には幸福（しあはせ）。貴下（こなた）の有分（もちぶん）は死（し）が取（と）るといへば與（や）らぬわけにはゆかぬが、天（てん）の分（ぶん）は永劫（えいごふ）不滅（ふめつ）ぢや。娘御（むすめご）の出世（しゅっせ）を願（ねが）ひ、其（その）昇進（しょうしん）をば此世（このよ）の天國（てんごく）とも思（おも）はしやつた貴下（こなた）が、只今（ただいま）娘御（むすめご）が雲（くも）の上（うへ）の眞（まこと）の天國（てんごく）へ昇進（しょうしん）せられたのを、何（なん）として歎（なげ）

かしやるぞ！ おゝ、安（やす）らかにならしやれたを、其様（そのやう）に取亂（とりみだ）して悲嘆（なげ）かしやるは、正（たゞ）しう愛（あい）さっしやる所以（ゆゑん）で無（な）い。婚（こん）して壽（じゆ）なるは必（かなら）ずしも良縁（りやうゑん）ならず、婚（こん）して夭折（えうせつ）す、却（かへ）って良縁（りやうゑん）。さ、涙（なみだ）を乾（かわ）かして、迷迭香（まんねんくわう）を死骸（なきがら）に※（「挿」）でつくりの縦棒が下に突き抜けている、第4水準2-13-28）（はさ）ましやれ。そして習慣通（ならはしどほ）り、最（いつ）ち佳（よ）い晴衣（はれぎ）を着（き）せて、教會（けうくわい）へ送（おく）らっしやれ。涙（なみだ）を禁（とど）めあへぬは痴（おろか）な情（じやう）の自然（しぜん）なれども、理性（りせい）の眼（まなこ）からは

笑草（わらひぐさ）でござるぞよ。

カピ長 婚儀（こんぎ）の爲（ため）にと準備（ようい）した一切（さい）が役目（やくめ）を變（か）へて葬儀（さうぎ）の用（よう）。祝（いは）ひの樂（がく）は哀（かな）しい鐘（かね）の音（ね）、めでたい盛宴（ちさう）が法事（ほふじ）の饗應（もてなし）、樂（たの）しい頌歌（しょうか）は哀（あは）れな挽歌（ばんか）、新床（にひどこ）に撒（ま）く花（はな）は葬（はふむ）る死骸（なきがら）の用（よう）に立（た）つ。何事（なにごと）も、皆（みな）うらはら。

ロレ 先（ま）づ奥（おく）に入（い）らせられい。……内室（おくがた）も一しよに入（い）らせられい。……パリスどのにも。……何（いづ）れも亡姫（なきひめ）の隨行（とも）をして墓場（はかば）へ行（ゆ）

く準備（したく）をなされ。こりや何（なに）か仔細（しさい）あつて天（てん）のお咎（とが）め、此上（このうへ）、天意（てんい）に逆（さ）からうて、ゆめ／＼御赫怒（みいかり）をば招（まね）かせらるゝな。皆々（みな／＼）入る。樂人（がくじん）らと乳母（うば）と殘（のこ）る。

甲樂人　こりや最早（もう）樂器（がくき）をしまうて歸（かへ）つてもよいであらう。

乳母　ほんに、御苦勞（ごくらう）でござつたが、ま、しまはッしゃれ／＼。して見（み）ようもない「事（こと）」になつたのぢやわいの。乳母（うば）入る。

甲樂人　成程（なるほど）、御道理（ごもつとも）でござります、したが、

今（いま）に如何（どう）にかなる「琴（こと）」でござりませう。

ピーター出（で）る。

ピータ 樂人（がくじん）さん、おゝ、樂人（がくじん）さん、「心（こゝろ）の慰（なぐさ）め、心（こゝろ）の慰（なぐさ）め」。乃公（おいら）を陽氣（やうき）にさせてくれる氣（き）なら、頼（たの）む、聽（き）かせてくれ、例（れい）の「心（こゝろ）の慰（なぐさ）め」を。

甲樂人 何故（なぜ）「心（こゝろ）の慰（なぐさ）め」をでござります？

ピータ はて、樂人（がくじん）さん、何故（なぜ）と言（い）うて、今（いま）、乃公（おれ）の心（こゝろ）の中（なか）では「予（わし）の心（こゝろ）は悲哀（かなしみ）に……」が始（はじ）まってゐる最中（さいちゆう）（う）ぢや。ぢやによつて、何（なに）か可笑（をか）し悲哀（なさけな）

い奴（やつ）をば聽（き）かせてくりや、乃公（おれ）は快々（くさ／＼）してかなはぬによつて。

甲樂人 いや、滅相（めつさう）な、そんな氣分（きぶん）ぢやござりませぬ。

ピータ 否（いや）ぢやと被言（おしや）るか？

甲樂人 さやう。

ピータ よいわ、今（いま）に見（み）い、身體中（からだぢゆう）に鳴響（なりびび）くやうに支拂（しはら）うてくれうぞ。

甲樂人 何（なに）を支拂（しはら）はッしゃります？

ピータ 金（かね）ぢや無（な）いぞ、輕蔑（べつかつこう）をぢや。

太鼓持扱（たいこもちあつか）ひにしてくれるわ。



甲樂人 すれば、此方（こち）も卿（こなた）をば從僕扱（さんびんあつか）ひにしてくれう。

ピータ すれば、其（その）從僕（さんびん）さまのお帶劍（こしのも）を汝等（ぬしら）の賤頭（どたま）へ上（の）せてくれう。（短き鈍劍を抜いて揮り※（「五十回」、第ハ水準ニニニ）これ、大概（た）いがい）で大言（ぶうく）を止（や）めぬと、其（その）太鼓面（た）いこづら）をはりまげて地（つち）ん中（なか）へめりこますぞよ、は如何（どう）だ？

甲樂人 それ、そのめつたりはつたりが音樂（ぶうく）（律呂）と謂（い）ふものぢや。

乙樂人 もしく、もう好（よ）い加減（かげん）に其（その）鈍劍（な

まくら)を藏(しま)はっしやれ、駄洒落(だしやれ)も最早(もう)ぬきにさっしやれ。

ピータ 何(なん)ぢや、劍(けん)を藏(しま)うて洒落(しやれ)を抜(ぬ)け? よし! すれば、名劍(めいけん)を藏(しま)うて名洒落(めいじやれ)で打挫(うちひし)いでくれう。さ、男(をとこ)らしう試合(しあ)うて見(み)い。

(歌ふ) 鋭(すんど) き悲愁(かなしみ)に心(こゝろ)傷(いた)み

我胸(わがむね) 堪難(たへがた)く沈(しづ)める時(とき)、

其時(そのとき) 音楽(おんがく)の銀(ぎん)の調(しらべ)は

……

何故(なぜ)「銀(ぎん)の調(しらべ)」ぢや? 何故(なぜ)「音楽(お

んがく)の銀(ぎん)の調(しらべ)「ぢゃ?……猫腸絃子(サイモン・キヤトリング)どん、さ、何(なん)とぢゃ?

甲樂人 はて、銀(ぎん)は好(よ)い音色(ねいろ)を出(だ)すからでござります。

ピータ 中等(ちゅう)ぢゃな!……三絃胡弓子(ヒュー・レベック)どん、足下(おぬし)は?

乙樂人 銀(ぎん)の調(しらべ)と言(い)ふのは、はて、樂人(がくじん)は賃銀(ちんぎん)を儲(もう)くるからぢゃ。

ピータ これも中等(ちゅう)ぢゃ!……提琴柱子(チェームズ・サウンドポスト)どん、足下(おぬし)は?

丙樂人 予(わし)や如何(どう)言(い)うてよいか知(し)らぬ。

ピータ　はい、眞平御免（まっぴらごめん）なれぢや。足下（おぬし）は唄方（うたかた）であつたものを。乃公（おれ）が代（かは）つて言（い）はう。そも／＼「音樂（おんがく）の銀（ぎん）の調（しらべ）」と謂（い）つぱ、はて、とかく樂人（がくじん）は金貨には能（よ）うありつかぬからぢや。

（歌ふ）其時（そのとき）音樂（おんがく）の銀（ぎん）の調（しらべ）は

たちまち鬱結（むすぼ）れし憂思（おもひ）を解（と）く。

ピーター歌（うた）ひながら入る。

甲樂人　何（なん）といふ煩（うるさ）い奴（やつ）ぢや彼奴（あいつ）は！

乙樂人 はっつけ野郎（やらう）め！……さ、奥（おく）へ往（い）て、  
會葬者（くわいさうじゃ）の來（く）るまで待（ま）ってゐて食事（も  
てなし）にありつかう。

皆（みな）入る。

## 第五幕

第(だい)一場(ぢやう) マンチュア。街上(がいじやう)。

ロミオ出る。

ロミオ 頼(たの)もしらしい夢(ゆめ)の告(つげ)が實(まこと)ならば、やがて喜(よろこ)ばしい消息(たより)があらう。わが胸(むね)の主(ぬし)(戀の神)もいと安靜(やすら)かに鎮座(ちんざ)めされた、されば例(いつ)になく嬉(うれ)しうて、日(ひ)がな一日(ひとひ)とひ(心(こゝろ)が浮(う)かるゝ。俺(おれ)が死(し)んでゐると、姫(ひめ)が來(き)て、俺(おれ)の脣(くちびる)に接吻(せつぷ

ん)して命(いのち)の息(いき)を吹込(ふきこ)んでくれたと見(み)た……死(し)んだ者(もの)が思案(しあん)するとは不思議(ふしぎ)な夢(ゆめ)……すると、即(やが)て蘇生(いきかへ)って帝王(ていおう)となつた夢(ゆめ)。あゝ／＼！ 戀(こひ)の影坊師(かげぼうし)かげばうし)でさへ此位(このくらゐ)嬉(うれ)しいとすると、遂(と)げられた眞(まこと)の戀(こひ)は、まア、どんなに樂(たの)しからうぞ？

ロミオの下人(げにん)バルターザー長靴(ながぐつ)の旅装(りよさう)にて出る。

や、※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナからの音信(たより)ぢや！  
どうぢや、バルターザー！ 御坊(ごぼう)からの消息(たより)は

無(な) かつたか？ 姫(ひめ) は如何(どう) ぢや、父上(ちゅうへ) は御無事(ごぶじ) か？ チュリエットは何(なに) としておゐやる？  
先(ま) づ、それを聞(き) かう、姫(ひめ) さへ安穩(あんのん) なら何事(なにごと) も大事(だいじ) ないわい。

バル すれば、何事(なにごと) も大事(だいじ) ござりませぬ、姫(ひい) さまは御安穩(ごあんのん) にカピューレット家(け) 代々(だい) だ  
い／＼のお墓所(はかどころ) にお休(やす) み、朽(く) ちぬ靈魂(たま) (みたま) は天使(てんし) がたと御(ご) 一(しよ) にござります。手前(てまへ) は姫(ひい) さまが御親類(ごしんるぬ) がたのお廟所(たまや) へ入(い) らせらるゝを見(み) るや否(いな) や、驛馬(はやうま) に飛乗(とびの) ってお知(し) らせに參(まゐ) りました。此様(こ



のやう)な悪(あ)しいお使(つかひ)も命置(おほせお)かせられた  
役目(やくめ)ゆゑでござります、御免(ごめん)なされませい。

ロミオ そりや實(まこと)か?……おのれ、怨(うら)めしい運星(う  
んせい)めら!……俺(おれ)の宿(やど)を知(し)つてゐような。  
筆(ふで)と紙(かみ)とを手(て)に入(い)れて、そして驛馬(は  
やうま)をも備(やと)うてくれ。今宵(こよひ)のうちに出發(た  
たうわ)。

バル まゝ、お耐(こら)へなされませい、甚(いか)うお色(いろ)  
も蒼(あを)ざめて、物狂(ものぐる)ほしげな御様子(ごやうす)、ひよ  
んな事(こと)でも遊(あそ)ばしさうな。

ロミオ 馬鹿(ばか)な、何(なん)の、そんな事(こと)を! 俺(お

れ)には介意(かま)はいで吩咐(いひつ)くることをせい。御坊(ごぼう)からの書状(しよじやう)は無(な)かったか？

バル いえ、ござりませぬ。

ロミオ よし／＼。早(はや)う往(い)て、馬(うま)どもを備(やと)うてくれ、やがて會(あ)はう。

バルターザー入る。ロミオ獨(ひとり)殘(のこ)る。

はて、ヂュリエット、今宵(こよひ)は一しよに臥(ね)ようぞ。……

そこで、其(その)方法(てだて)ぢやが……おゝ、害心(がいしん)よ、とても速(はや)う入(はひ)って來(き)をるなア、絶望(ぜつぼう)した者(もの)の胸(むね)へは……思(おも)ひ出(だ)すは彼(あ)の(薬種屋(やくしゆや)……たしか此邊(このあたり)に住(す)ん

でゐる筈（はず）……いつぞや見（み）た折（をり）は、身（み）に檻  
褌（つゞれ）を着（ゆ）て、薬草類（やくさうるゐ）を撰（え）つてをつ  
たが、顔（かほ）は瘦枯（やせが）れ、眉毛（まゆげ）は蔽（おほ）い  
被（かぶさ）り、鋭（するど）い貧（ひん）に軀（み）を削（けづ）ら  
れて、残（のこ）ったは骨（ほね）と皮（かは）。貧（まづ）しい店前  
（みせさき）には※（おほがめ）「#（口＋口）／田／一／黽」、202-  
2の甲（かふ）、鰐（わに）の剥製（はくせい）、不恰好（ぶかつかう）  
な魚（うを）の皮（かは）を吊（つる）して、周圍（まはり）の棚（たな）  
には空箱（からばこ）、緑色（りよくしよく）の土（つち）の壺（つぼ）、  
及（およ）び膀胱（ぼうくわう）、黴（か）びた種子（たね）、使（つか）  
ひ残（のこ）りの結繩（ゆはへなは）、乾枯（ひから）びた薔薇（ばら）

などを口實（いひわけ）ほどに取散（とりち）らして貧羸（みすぼ）ら  
しう飾（かざ）った店附（みせつき）。其（その）貧（まづ）しさを見（み）  
るまゝに、思（おも）はず獨語（ひとりご）って、此（この）マンチュ  
アで毒（どく）を賣（う）れば、直（すぐ）にも命（いのち）を取（と）  
らるれども、若（も）しも毒（どく）が欲（ほ）しければ賣（う）りさ  
うなのは此奴（こいつ）め、と思（おも）うたが、今日（けふ）ある知  
（し）らせであつたまで。むゝ、あの貧人（ひんじん）から是非（ぜひ）  
毒（どく）を買（もと）めうわい。……何（なん）でも此（こ）の邊（へ  
ん）であつた。祭日（さいじつ）ゆゑ貧乏店（びんばふみせ）が閉（し  
ま）つてある。……いや、なう／＼！ 藥種屋（やくしゅや）はおりや  
るか？

藥種屋（やくしゅや）出る。

藥種屋 かしましう呼（よ）ばツしやるは誰（たれ）ぢゃ？

ロミオ ま、こゝへ來（き）やれ。かう見（み）たところ不如意（ふによい）さうな。こりや此處（こゝ）に四十兩（りやう）ある、予（わし）に毒

藥（どくやく）を一匁（もんめ）ほど賣（う）ってくりやれ、直（すぐ）

に血管（けつくわん）に行渡（ゆきわた）って世（よ）に※（「厭／（饗

一殄）」、第4水準2-92-73）果（あきは）てた飲主（のみぬし）を立地

（たちどころ）に死（し）なすやうな、又（また）、射出（うちだ）され

た焰硝（えんせう）が怖（おそろ）しい大砲（たいはう）の胴中（どう

なか）から激（はげ）しう急（きふ）に走（はし）り出（で）るやうに、

息（いき）をば此（この）體内（みうち）から逐出（おひだ）してくれ

る毒(どく)が欲(ほ)しい。

藥種屋 されば、其様(そのやう)な大毒藥(だいどくやく)をば貯(たく)はへてはをりまするが、マンチュアの御法度(ごはつと)では、賣(う)つたりや、命(いのち)がござりませぬ。

ロミオ 其様(そのやう)に貧(まづ)しうあさましう暮(くら)して  
ゐても、汝(おぬし)は死(し)ぬるのが怖(おそろ)しいか? 飢(う  
ゑ)は頬(ほ)に、逼迫(ひっぱく)は眼(め)に、侮辱(ぶじよく)  
貧窮(ひんきう)は背(せ)に懸(か)つてある。無情(つれな)い  
此(この)浮世(うきよ)に法度(はつと)はあつても、つゆ汝(おぬ  
し)の爲(ため)にはならぬ。ならば、貧(ひん)を守(まも)るにも  
及(およ)ばぬ。法度(はつと)を犯(をか)して之(これ)を取(と)

りやれ。

藥種屋 意(こゝろ)は好(すゝ)みませねど、貧苦(ひんく)めがお言葉(ことば)に従(したが)ひまする。

ロミオ 此方(こち)も其(その)貧苦(ひんく)にこそ拂(はら)へ、意(こゝろ)には拂(はら)はぬわい。

藥種屋 (藥瓶を渡しながら)これをばお好(この)みの飲料(いんれう)に入(い)れて飲(の)ませられい。たとひ二十人力(にんりき)おじゃらしませうとも、立地(たちどころ)に片附(かたづ)かッしやりませう。ロミオ 此(この)黄金(こがね)を遣(つかは)すぞ、これこそは人(ひと)の心(こゝろ)の大毒藥(だいでくやく)ぢや、汝(おぬし)が賣(う)りかぬる此(この)些末(さまつ)なる藥種(やくしゆ)よりも此(こ

の(濁世(ぢよくせ)では遙(はるか)に怖(おそろ)しい人殺(ひとごろ)しをするもの。汝(おぬし)では無(な)うて予(わし)こそは毒(どく)を賣(う)るのぢや。さらば。食物(たべもの)を買(もと)めて些(ち)と肉(にく)を附(つ)けたがよい。……(行きかけて藥瓶(やくびん)を見て)毒(どく)ではない興奮劑(きつけぐすり)よ、さア一しよに、ヂュリエットの墓(はか)へ來(こ)い、あそこで汝(そち)を使(つか)はにやならぬ。

二人(ふたり)ともに入る。

第(だい)二場(ぢやう) ※(濁点付き片仮名エ、1-7-84)ローナ。

ロレンス法師(ほふし)の庵室(あんじつ)。



フランシス派（は）の僧（そう）デヨン出る。

デヨン フランシス宗（しゅう）の御僧（おんそう）はぬさしますか！

なう／＼、御坊（ごぼう）！

ロレンス法師（ほふし）出る。

ロレ あれはデヨン坊（ぼう）の聲（こゑ）ぢや。……さてようこそ

お戻（もど）りやったマンチュアから。してロミオは何（なん）と被言

（おしや）った？ 若（も）し筆（ふで）に物（もの）せられたならば、

其（その）書面（しょめん）を見（み）せやれ、

デヨン いやの、同伴者（どうばんしゃ）に連立（つれだ）たうとて、

同門跣足（どうもんせんそく）の或（ある）御坊（ごぼう）を尋（たづ）

ねて、町（まち）で或（ある）病家（びやうか）をお見舞（みま）やつてゐるのに逢（あ）うたところ、町（まち）の檢疫（けんえき）の役人衆（やくにんしゅう）に兩人（ふたり）ながら時疫（じえき）の家（うち）にゐたものぢやと疑（うたが）はれて、戸外（そと）へ出（づ）ることを禁（とゞ）められた、それゆゑマンチュアの急用（きふよう）も其場（そのば）で止（と）められてしまふたわいの。

ロレ すれば誰（たれ）が持（も）つて往（い）んだぞ、ロミオへの予（わし）の書状（しよじやう）は？

ヂヨン はて、届（とゞ）けることを能（よ）うせなんだのぢや。……これ、此通（このとほ）り持（も）つて戻（もど）つた。……此庵（こち）へ届（とゞ）けうと思（おも）うてもな、皆（みな）が傳染（でん

せん)を怖(こは)がりをるによつて、使(つかひ)の男(をとこ)さへも雇(やと)へなんだわいの。

ロレ はれ、それは物怪(もつけ)の不運(ふうん)の！ 眞實(しんじつ)、重大(ぢゆうだい)な容易(ようゐ)ならぬ用向(ようむき)の其(その)書面(しよめん)、それが等閑(なほざり)になつた上(うへ)は、どのやうな一大事(だいじ)が出来(でき)うも知(し)れぬ。御坊(ごぼう)よ、早(はや)う往(い)て、何處(どこ)ぞで、鐵槌(かたてこ)を才覺(さいかく)して、急(いそ)いで此處(こゝ)へ持(も)つて來(き)て下(くだ)され。

ヂヨン うゝ、すれば、往(い)て持來(もてこ)う。

ヂヨン坊(ぼう) 入る。

ロレ　此上（このうへ）は、そつと墓所（はかしよ）まで往（ゆ）かねばならぬ。此（この）三時（みとき）が間（あひだ）に、ヂュリエツトは目（め）を覺（さま）さう。始終（しじゅう）をロミオに知（し）らせなんだとお知（し）りやったら嘸（さぞ）予（わし）を怨（うら）むであらう。したが、マンチュアへは改（あらた）めて書送（かきおく）り、ロミオがお來（き）やるまでは、姫（ひめ）を庵室（あんじつ）にかくまっておかう。不便（ふびん）や、生（い）きた骸（むくろ）となつて、死人（しにん）の墓（はか）の中（なか）に埋（うも）れてゐやる！  
ロレンス入る。

第(だい) 三場(ぢやう) 同處(どうしよ)。墓場(はかば)。 (此裡(このうち) にカピューレット家(け) 代々(だい／＼) の廟所(べうしよ) ある體(てい))。深夜(しんや)。

パリス先(さき) に、侍童(こわらは) 從(つ) いて、草花(くさばな) と炬火(たいまつ) とを携(たづさ) へて出(い) で來(きた) る。

パリス 侍童(わらは) よ、其(その) 炬火(たいまつ) をおこせ。彼方(あち) へ往(い) て、つツと離(はな) れてゐい。……いや、それを消(け) せ、人目(ひとめ) に掛(かゝ) りたうない。あの水松(いちぬ) の下(した) で、長々(なが／＼) と横(よこ) になつて、此(この) 洞(ほら) めいた地(ち) の上(うへ) に直(ひた) と耳(みゝ) を附(つ)

けてゐい、穴（あな）を掘（ほ）るので、土（つち）が緩（ゆる）んで、和（やはら）いでゐるによつて、踏（ふ）めば直（すぐ）に足音（あしあと）が聞（きこ）えう。したら、人（ひと）が來（き）たといふ知（し）らせに、口笛（くちぶえ）を吹（ふ）かうぞ。その花（はな）もおこせ。吩咐（いひつ）けたやうにせい、さ。

侍童（傍を向きて）こんな墓原（はかはら）に一人（ひとり）立（た）つてゐるのは怖（こは）らしい、が、ま、やって見（み）よう。

侍童（こわらは）物※（「蔭」の「陰のつくり」に代えて「人がしら／＼」のへん、第4水準2-86-78）（ものかげ）へ退（さが）る。

パリス（廟の前へ進みて）なつかしい花（はな）の我妹子（わぎもこ）、花（はな）を此（この）新床（にひどこ）の上（うへ）に撒（ま）いて

……あゝ、天蓋（てんがい）は石（いし）や土塊（つちくれ）……其（その）の撒（ま）いた草花（くさはな）に夜毎（よごと）に香（かほ）る水（みづ）を注（そ）ぐ。若（も）しそれが盡（つ）きたなら、歎（なげ）きに搾（しぼ）る予（わし）が涙（なみだ）を。和女（そもじ）への夜毎（よごと）の手向（たむけ）は、かうして花（はな）を撒（ま）いて泣（な）くことぢやわい。

此時（このとき）、侍童（こわらは）あなたにて口笛（くちぶえ）を吹（ふ）く。

むゝ、侍童（こわらは）めが何（なに）か來（き）たと知（し）らせをる。いま／＼しい、何者（なにもの）であらう、今頃（いまごろ）此邊（このあたり）へ彷徨（さまよ）うて、俺（おれ）が眞情（まごころ）の回

向（ゑかう）をば妨（さまた）げをる。や、炬火（たいまつ）を持（も）つて來（く）るわ！……夜（よる）よ、ちつとの間（ま）、俺（おれ）を包（つ）んでくれい。

パリス退（さが）る。

ロミオ先（さき）に、バルターザー炬火（たいまつ）、鶴嘴等（つるはしとう）を携（たづさ）へて出る。

ロミオ 其（その）鶴嘴（つるはし）と鐵槌（かなてこ）を此方（こち）へ。こりや、此（この）書状（しよじやう）をば、明日（あす）早（は）や（う）父上（ちちうへ）へ届（とど）けてくれ。其（その）炬火（たいまつ）をこちへ。さて、確（しか）と申附（まうしつ）くる、如何（いか）な事（こと）を見聞（みきこ）せうとも、悉（ことごと）く立離（た



ちはな)れ、予(わし)が仕事(しごと)の妨碍(さまたげ)をばすま  
いぞよ。予(わし)が廟(たまや)へ降(お)りるは、姫(ひめ)の面  
(かほ)を見(み)ようがためでもあるが、それよりも姫(ひめ)が身(み)  
に着(つ)けた貴(たふと)い指輪(ゆびわ)を或(ある)大切(たい  
せつ)な用(よう)に使(つか)はうため取外(とりはず)して來(く)  
るのが主(おも)な目的(もくてき)ぢやによつて、早(はや)う往(い)  
ね。若(も)し疑(うたが)うて立戻(たちもど)り、予(わし)が所  
行(しよぎやう)を窺(うか)ひなど致(いた)さうなら、天(てん)  
も照覽(せうらん)あれ、汝(おのれ)が四肢(し)五體(たい)を寸々  
(すん／＼)に切裂(きりさ)き、飽(あ)くことを知(し)らぬ此(こ  
の)墓(はか)を肥(こや)すべく撒(ま)き散(ち)らさうぞよ。時

刻（じこく）が時刻（じこく）ゆゑ、俺（おれ）の心（こゝろ）は殘忍（ざんにん）、兇暴（きょうぼう）、餓（う）ゑたる虎（とら）、鳴渡（なりわた）る荒海（あらいみ）よりも猛（たけ）しいぞよ。

バルタ はい、立去（たちさ）りまする、お妨碍（さまたげ）は仕（つかまつ）りませぬ。

ロミオ それでこそ予（わし）への忠節（ちゅうせつ）。これを取（と）れ。（と金子を與へ）末長（すゑなが）うめでたう暮（くら）せ。さらばぢや。バルタ（傍を向きて）あゝは言（い）はせられるが、ま、此邊（このあたり）にかくれてゐよう。お顔（かほ）の色（いろ）も心懸（こゝろがこゝり、お心（こゝろ）の中（うち）も疑（うたが）はしい。

物※（「蔭」の「陰のつくり」に代えて「人がしら／髟のへん」、第4

水準 2-86-78) (ものかげ) へ退 (さが) する。

ロミオ (廟の前に進みて) 汝 (おのれ)、死 (し) の母胎 (ぼたい) め、  
世 (よ) に又 (また) とない珍羞 (ちんしゅう) を貪 (むさぼ) り食 (く)  
ひをつた憎 (にく) い胃 (ゐ) の腑 (ふ) め、汝 (おのれ) の腐 (く  
さ) った顎 (あぎと) をば、まッ此 (こ) のやうに押開 (おしひら) いて、  
(と廟の扉を抉 (こ) ちあげながら) 汝 (おのれ) への面當 (つらあて)  
に、無理 (むり) に食餌 (ゑぢき) を填充 (つめこ) まう。

廟扉 (べうひ) を開 (ひら) く。

パリス ありや追放 (つみはう) された高慢 (かうまん) なモンタギュー  
めぢや。彼奴 (あいつ) が従兄 (いとこ) を殺 (ころ) したゆゑ、美 (う  
つく) しい戀人 (こひごと) が、愁歎 (しうたん) の餘 (あま) りにお

死(し)にやつたといふこと。こゝへ來(き)をつたは、死骸(しがい)に侮辱(はづかしめ)を加(くは)へよう爲(ため)でがな。捉(とら)へてくれう。……やい、モンタギューめ、破廉恥(はれんち)な所行(しよぎやう)を止(や)めい。怨(うらみ)を死骸(むくろ)にまで及(およ)よ(ぼさうとは、墮地獄(だぢごく)の人非人(にんびにん)め、引立(ひきた)つる、尋常(じんじやう)に従(つ)いて來(こ)い。生(い)けてはおかぬぞ。

ロミオ いかにも、生(い)きてをられぬ身(み)ぢや。なればこそ此(こゝ)墓(こゝ)へは來(き)た。いやなう、若(わか)、命知(いのちし)らずの者(もの)に手出(てだ)しをなさるな。早(はや)うお逝(に)げなされ。此(この)亡者達(もうじやたち)の事(こと)を思(おも)

うて怖(おそ)れたがよい。予(わし)を腹立(はらだ)たせて、又(また)の罪惡(ざいあく)を犯(をか)させて下(くだ)さるな。おゝ、速(はや)やう去(い)なしゃれ。眞實(しんじつ)、予(わし)は自分(じぶん)よりも足下(おぬし)を可愛(いと)しう思(おも)うてゐる、予(わし)は自殺(じさつ)をしようと思(おも)つて此處(こゝ)へ來(き)た者(もの)であるに依(よ)つて。さゝ、速(はや)う去(い)なしゃれ。生存(いきながら)へて、後日(ごじつ)、自分(じぶん)は、狂人(きちがひ)の仁情(なさけ)で、危(あやふ)い所(ところ)を助(たす)かつたとお言(い)ひなされ。

パリス どう頼(たの)まうとも聽(き)かぬわい。重罪人(ぢゆうざいじん)として引立(ひきた)つるは。

ロミオ では俺（おれ）を怒（いか）らす氣（き）か？ ならば、覺悟（かくご）せい！

二人（ふたり）劍（けん）を拔（ぬ）いて戰（たゝか）ふ。

侍童 大變（たいへん）ぢや、戰（たゝか）うてぢや！ 速（はや）う夜番（よばん）の衆（しゅう）を呼（よ）んで來（こ）よう。

侍童（こわらは）入（い）る。此中（このうち）にパリス手（て）を負（お）うて倒（たふ）る。

パリス おゝ、しまうた！……仁情（なさけ）があるなら廟（べう）を開（ひら）いてヂュリエットと一しよに埋（うづ）めてくれい。

パリス息絶（いきた）ゆる。

ロミオ おゝ、承引（しょういん）したぞ。……面（おもて）を檢（しら）

べて見(み)よう。……マーキューシオーの親戚(しんせき)のパリス殿(どの)ぢゃ！ 馬(うま)に騎(の)つて來(く)る途中(とちゅう)、家來(けらい)めが何(なん)とか言(い)うた、心(こゝろ)が亂(みだ)れてゐて善(よ)う聽(き)いてはゐなんだが？ デュリエットと此(この)パリスが婚禮(こんれい)をする筈(はず)であつたとか言(い)うた。いや、さうは言(い)はなんだか？ 夢(ゆめ)か？

今(いま)がたパリスが、デュリエットの事(こと)を言(い)うたゆゑ、それで此様(こん)なことを思(おも)ふのか？ 此(この)心(こゝろ)が狂(くる)うたか？……おゝお手(て)をおこしやれ、薄運(はくうん)はくうん)の名簿(めいぼ)の裡(うち)に、俺(おれ)と並(なら)べ書(がき)にせられた足下(おぬし)ぢゃ！ 予(わし)が今(いま)埋(う)

めて進（しん）ぜよう名譽（めいよ）の墓（はか）に。墓（はか）か？  
いや／＼、こりや墓（はか）ではない、明（あか）り窓（まど）ぢゃ、  
なア、足下（きみ）。はて、ヂュリエットが居（ゐ）るゆゑに、其（その）  
艷麗（あてやか）さで、此（この）窖（あなむろ）が光（ひか）り輝（か）  
や）く宴席（えんせき）とも見（み）ゆるわい。……死人（しにん）ど  
のよ、死人（しにん）の手（て）で埋（う）められて、其處（そこ）で  
臥（ね）やれ。

パリスの死骸（しがい）を廟（べう）の中（なか）に横（よこ）たへる。  
人（ひと）は動（や）もすれば、其（その）最期（いまは）に心（こゝろ）  
が浮（う）かるゝ！ それを看護人（かんごにん）が死（し）ぬる前（まへ）  
の電光（いなづま）と命（よ）んでゐる。おゝ、これが電光（いなづま）



と言(い)はれようか?……おゝ、戀人(こひびと)よ! 我妻(わが  
つま)よ! 卿(そなた)の息(いき)の蜜(みつ)を吸(す)ひ盡(つ  
く)した死神(しにがみ)も、卿(そなた)の艶麗(あてやか)さには  
能(え)い勝(か)たいでか、其(その)蒼白(あをじろ)い旗影(は  
たかげ)はなうて美(び)の旗章(はたじるし)の鮮(あざや)な此(こ  
の)唇(くちびる)、此(この)兩頬(りやうほ)。……おゝ、チツバ  
ルト、足下(おぬし)も其處(そこ)にゐるか、血(ち)に染(そ)み  
たまゝで? まだ嫩若(うらわか)い足下(おぬし)を眞二(まっふた)  
つにした其(その)同(おな)じ手(て)で、當(たう)の敵(かたき)  
を切殺(きりころ)して進(しん)ぜるが、せめてもの追善(つみぜん)  
ぢや。從兄(いとこ)どの、赦(ゆる)してくれい。……あゝ、戀(こひ)

しい、懐(なつか) しい、ヂュリエット、何(なん)として今尚(いまな)  
ほ斯(か)うも艶麗(あてやか)ぢや? 若(も)しや形(かたち)の  
ない死神(しにがみ)が卿(そなた)の色香(いろか)に迷(まよ)う  
て、あの骨(ほね)ばかりの怪物(くわいぶつ)めが、己(おの)が嬖  
妾(おもひもの)にしようために、此(この)黒闇(くらやみ)に蓄(かこ)  
うておくのではないか知(し)らぬ。それが氣懸(きがゝ)りゆゑ、俺(お  
れ)やもう決(けつ)して此(この)暗(やみ)の館(やかた)を離(はな)  
れぬ。卿(そなた)の侍女(こしもと)の蛆共(うじども)と一(しよ)に  
俺(おれ)や永久(いつまで)も此處(こゝ)にゐよう。おゝ、今(いま)こゝ  
で永劫安處(えいがふあんじよ)の法(はふ)を定(さだ)め、憂世(う  
きよ)に※(「厭(えん)／(贅(ぜい)一(ひと)殄(てん)」、第4水準2-92-73)(あ)き果(は)て

た此（この）肉體（からだ）から薄運（ふしあはせ）の軛（くびき）を  
振落（ふりおと）さう。……眼（め）よ、見（み）よ、これが最後（な  
ごり）ぢやぞ！ 腕（かひな）よ、抱（だ）け、これが最後（なごり）ぢや！  
おゝ、息（いき）の戸（と）の脣（くちびる）よ、人（ひと）の命（い  
のち）を長永（とこしなへ）に買占（かひし）むる死（し）の證文（しよ  
うもん）に天下（てんが）晴（は）れた接吻（せつぶん）の奥印（おく  
いん）せよ！……（毒藥の瓶を取り出し）さ、來（こ）い、苦（にが）い、  
飲（の）みぐるしい案内者（あんないじゃ）よ！ やい、命知（いのちし）  
らずの舵手（かんどり）よ、苦（くる）しい海（うみ）に病（や）み疲（つ  
か）れた此（この）小船（こぶね）を、速（はや）う巖礁角（いはかど）  
へ乗上（のりあ）げてくれ！……さ、戀人（こひごと）に！（と飲む）。

おゝ、眞實（しんじつ）な彼（あの）藥種屋（やくしゅや）、效力（ききめ）は忽（たちま）ち……かう接吻（せつぷん）して俺（おれ）や死（し）ぬるわ。

ヂュリエットへ臥（ふ）し重（かさ）なるやうにして息絶（いきたゆ）る。  
此時（このとき）、一方（ぱう）へロレンス法師（ほふし）が提燈（ちやうちん）、鶴嘴（つるはし）、鋤等（すきとう）を携（たづさ）へて出（い）で來（きた）る。

ロレ 南無（なむ）やフランシス上人（しやうにん）、護（まも）ら  
せられい！ はれ、けつたいな、今宵（こよひ）此（この）老脚（らう  
きやく）が幾（いく）たび墓穴（はかあな）に蹉躓（けつまづ）いたこ  
とやら！……誰（た）れぢや、そこにゐるのは？

バルタ 怪(け) しょうは無(な)い者(もの)、貴僧(こなた)を善(よ)う存(ぞん)じてをる者(もの)でござる。

ロレ ほしい、其許(そのもと)か！ さらば問(と)はうが、あしこのあの炬火(たいまつ)は、ありや何(なん)でおじゃる、蛆蟲(うじむし)や目(め)も無(な)い髑髏(どくろ)を空(むな)しう照(てらす)あの光(ひかり)は？ かう見(み)たところ、カペル家(け)の廟(たまや)の前(まへ)ぢやが。

バルタ 其通(そのとほ)りにござります。あそこに主人(しゅじん)が居(を)られます、御坊(ごぼう)の可憐(いと)しう思(おも)はせらるゝ。

ロレ とは誰(た)れぢや？

バルタ　ロミオさままでござります。

ロレ　え、こゝへ參（まゐ）られて久（ひさ）しいか？

バルタ　半時餘（はんどきあま）りになりまする。

ロレ　なりや墓穴（はかあな）まで一しよにおじやれ。

バルタ　いや、僕（ぼく）は能（え）い行（ゆ）きませぬ。主人（しゅじん）は僕（わたくし）をば既（は）や往（い）んだとのみ思（おも）うてをられます。若（も）しも此處（こゝ）に止（とど）まつて様子（やうす）など窺（うかゞ）はうならば、斬殺（きりころ）してのけうと、怖（おそろ）しい見脈（けんみやく）で嚇（おど）されました。

ロレ　ならば、此處（こゝ）にござれ。予（わし）が獨（ひとり）で往（ゆ）かう。はて、氣懸（きがゝり）になつて來（き）たわ。おゝ、こりや何（な

に)か不祥(ふしやう)な事(こと)が出来(しゅつらい)したのでは  
無(な)いか知(し)らぬまでい。

バルタ 最前(さいぜん)、此(この)水松(いちぬ)の蔭(かげ)で  
居眠(ぬねむ)つておますうちに、夢(ゆめ)うつゝに、主人(しゅじん)  
んとさる人(ひと)とが戦(たゝか)うて、主人(しゅじん)が其人  
(そのひと)をば殺(ころ)したと見(み)ました。

ロレンスは廟(べう)の方(ほう)へ進(すす)む。

ロレ ローミオー! あら、あら、何事(なにごと)ぢや此(この)  
血汐(ちしほ)は、これ、此(この)廟舎(たまや)の入口(いりぐち)  
の石(いし)を染(そ)めた此(この)血汐(ちしほ)は? 主(ぬし)  
もない此(この)劍(つるぎ)は? 此様(このやう)な平和(へいわ)

の場所（ばしょ）に血（ち）まぶれにして棄（す）てゝあるは、こりや何（なん）としたことであらう？

と廟（べう）の中（なか）へ進（すす）み入（い）る。

や、ローミオー！ おゝ、色（いろ）は蒼白（まつさを）！……外（ほか）か）にも誰（たれ）やら？ や、パリスどのまで？ 剩（あまつ）さへ血汐（ちしほ）に浸（ひた）つて？……あゝ、何（なん）といふ無（む）慚（むざん）な時刻（じこく）ぢや、如是（こんな）あさましい事（こと）をば一時（とき）に爲（し）でか）すとは！……や、姫（ひめ）が身（み）動（みうごき）爲（し）やる。

此時（このとき）ヂュリエット目（め）を開（ひら）く。

ヂュリ おゝ、嬉（うれ）しや御坊様（ごぼうさま）か！ 殿御（どの）



ご)は何處(どこ)にぢや? 行(ゆ)き處(どこ)は記(おぼ)えて  
ゐる、おゝ、さうぢや、そこへ予(わし)は來(き)てゐるのぢや?

ロミオは何處(どこ)にぢや?

奥(おく)にて多勢(おほぜい)の人聲(ひとごゑ)する。

ロレ 人聲(ひとごゑ)がする。……こりや姫(ひめ)よ、ま、早(は

や)う出(で)てござれ、そこは死(し)や疫癘(えきらい)や無理(む  
り)な睡眠(すゐみん)の宿(やど)ぢやほどに。人間以上(にんげん  
いじやう)の力(ちから)の爲(ため)に折角(せつかく)の計畫(は  
かりごと)が皆(みな)敗(やぶ)れた、さ、早(はや)うござれ。和  
女(そもじ)の殿御(とのご)は、それ、其處(そこ)に胸元(むなも  
と)にお死(し)にやつてぢや。パリスどのもぢや。さゝ、尼御達(あ

まごたち)の仲間中(うち)へ、頼(たの)うで和女(そもじ)を入(い)れておかう。あれ、夜番(よばん)が來(く)るわ、委細(ゐさい)の事(こと)は後(あと)で。さ、ヂュリエット、ござれ。予(わし)やもう此處(ここ)には能(よ)うをらぬわ。

ロレンス狼狽(うろた)へて入る。

ヂュリ(さ)、速(はや)う去(いな)しやれ、予(わし)は去(いな)ぬほどに。……こりや何(なん)ぢゃ? 戀人(こひと)が手(て)に握(にぎ)りやっちは盃(さかづき)か? さては毒(どく)を飲(の)んで非業(ひごふ)の最期(さいご)をお爲(し)やったのぢゃな。……まア、あたじけない! 皆(みんな)な飲(の)んでしまつて、隨(つ)いて行(ゆ)かう予(わたし)の爲(ため)に只(ただ)一滴(てき)

をも殘（のこ）しておいてはくれぬ。……お前（まへ）の脣（くちびる）を吸（す）はうぞ。毒（どく）がまだ殘（のこ）って居（ゐ）たら、それこそは假（かり）の命（いのち）から實（まこと）の命（いのち）へ回（かへ）らする大妙藥（だいめうやく）！……まだ温（ぬく）い、お前（まへ）の脣（くちびる）！

とロミオの死骸（しがい）に接吻（せつぶん）する。

此時（このとき）奥（おく）にて又（また）多勢（おほぜい）の人聲（ひとごゑ）する。

番甲（奥にて）案内（あんない）せい。どちらぢや。

ヂュリや、人聲（ひとごゑ）？ なりや、片時（へんじ）も早（はや）う。……おゝ、嬉（うれ）しや、短劍（たんけん）！（ロミオが佩びた

る短劍を取りて)さ、鞞(さや)はこゝに。(と胸を貫き)そこに居附(ゐつ)いて、予(わし)を死(し)なせてくれ。

と息(いき)絶(た)ゆる。

夜番(よばん)の者(もの)甲(かふ)、乙(おつ)、丙(へい)、其他(そのた)多勢(おほぜい)パリスの侍童(こわらは)を案内者(あんないじゃ)にして出る。

侍童(こゝぢや。あの炬火(たいまつ)が燃(も)えてをる處(ところ)がそれぢや。

番甲(此邊(このあたり)は血(ち)だらけぢや。墓場(はかば)の界限(かいわい)を探(さが)さっしやい。さゝ、見(み)つけ次第(しだい)に、かまうたことは無(な)い、引立(ひきた)てめさ。

二三人（にん）入る。

はれ、無慚（むざん）な！　こゝに若殿（わかとの）が殺（ころ）されてござる、のみならず、既（も）う二日（ふつか）も葬（はふむ）られてござったヂュリエットどのが、つい今（いま）がた死（し）なっしやれたやうに血（ち）を流（なが）して、温（ぬく）いまゝで。……誰（た）れぞ早（はや）う御領主様（ごりやうしゅさま）へ。カピユレットどのは、探（さが）せ。……

夜番頭（よばんかしら）の甲（かぶ）のみ残（のこ）りて皆々（みな）入る。

不運（ふうん）な人達（ひとたち）が臥（ね）ておりやる地盤（グラウ

ンド)だけは善(よ)う見(み)えるが、此(この)不運(ふうん)の眞(ほん)の原因(グラウンド)は、よう查(しら)べて見(み)ぬうち(ぬ)は分(わか)らぬわい。

夜番(よばん)の乙(おつ)、外(ほか)二人(にん)バルターザーを引立(ひきた)て、出る。

番乙(ばん) これはロミオどの、家來(めしつかひ)でおりやる。墓場(はかば)で見付(みつ)けました。

番甲(ばん) 殿(との)さまの渡(わた)らせらるゝまで、逃(にが)さぬやうに護(まも)ってござれ。

他(た)の夜番(よばん)の者(もの)丙(へい)、ロレンス法師(ほふし)を引立(ひきた)て、出る。

番丙　これなる老僧（らうそう）は、顛（ふる）へながら溜息（といき）を吐（つ）き、涙（なみだ）を流（なが）してをります。只今（ただいま）墓場（はかば）から參（まゐ）るところを取押（とりをさ）へて、これなる鋤（すき）と鶴嘴（つるはし）とを取上（とりあ）げました。番甲　甚（いか）う胡散（うさん）な。その僧（ぼうず）をも留（と）めておかつしやい。

領主（りやうしゆ）、多勢（おほぜい）の従者（じゆうしや）を引連（ひきつ）れて出る。

領主　朝（あさ）まだきに如何（いか）なる珍事（ちんじ）が出来（しゅつ）たい）したのぢや、予（よ）が夢（ゆめ）を驚（おどろ）かして呼出（よびい）だすは？

カピユーレット長者夫婦（ちやうじゃふうふ）、其他（そのた）出る。

カピ長 何（なん）とした事（こと）ぢや、街上（そと）にて人々（ひと／＼）の叫（わめ）き立（た）つるは？

カピ妻 往來（わうらい）の人々（ひと／＼）は、或（ある）ひはロミオと呼（よ）び、或（ある）ひはヂュリエット、或（ある）ひはパリストと呼（よ）びかはして、聲々（こゑ／＼）に叫（わめ）き立（た）て、吾屋（わがや）の廟屋（たまや）へと急（いそ）ぎまする。

領主 吾等（われら）の耳（みみ）を驚（おどろ）かす變事（へんじ）とは何事（なにごと）ぢや？

番甲 申上（まうしあ）げまする、こゝにパリス様（さま）が殺（ころ）されて居（ゐ）させられます、またロミオにも、また其以前（その



いぜん)に死去(みまか)りました筈(はず)のヂュリエットにも、體温(ぬくもり)のあるまゝ、新(あたらし)しく殺(ころ)されてをられまする。

領主　あくまでも手(て)を盡(つく)して此(この)虐殺(ぎやく)さつ)の所因(しよいん)を查(しら)べい。

番甲　これにをりまする老僧(らうそう)、また殺(ころ)されましたるロミオの僕(しもべ)一人(にん)、何(いづ)れも墓(はか)を發(あば)きまするに屈竟(くつきやう)の道具(だうぐ)をば携(たづさ)へてをりまする。

カピ長　やゝ、これは！　おゝ、我妻(わがつま)よ、あれ、見(み)さしませ、愛女(むすめ)の體内(みうち)から血(ち)が流(なが)るゝ！

え、此(この) 劍(けん) は住家(すみか) をば間違(まちが)へ  
をつたわ。こやつが住(す)むべきモンタギューが腰(こし)なる宿(や  
ど)は裳脱(もぬけ)の殻(から)で、無慚(むざん)や、愛女(むす  
め)の胸(むね)が鞘(さや)！

カピ妻 お、悲(かな)しや！ 此(この) 慘(いたま)しい死様(し  
にざま)は、老(お)いゆく此身(このみ)をば墓(はか)へ急(いそ  
がす死鐘(しにがね)ぢゃ。

モンタギュー長者(ちやうじゃ)、其他(そのた) 出る。

領主 さ、こゝへ、モンタギュー。時(とき)ならず早(はや)う起出(お  
きい)でめされたが、目(め)に入(い)るものは、時(とき)ならず  
早(はや)う臥(ね)た息子(むすこ)どの、寐姿(ねすがた)ぢゃ。

モン長 なう、情(なさけ)なや、我君(わがきみ)！ 我子(わがこ)の追放(つみはう)を歎悲(なげき)の餘(あま)りに衰(おとろ)へて、妻(つま)は昨夜(やぜん)相果(あひはて)ました。尚(なほ)此上(このうへ)にも老人(らうじん)をさいなむは如何(いか)なる不幸(ふかう)ぢや。

領主 あれ、あれをお見(み)やれ「#「お見(み)やれ」はママ」。  
モン長 おゝ、汝(おのれ)、不所存者(ふしよぞんもの)めが！ 父(ちち)を押退(おしの)けて先(さき)へ墓(はか)へ入(はひ)らうとは、何(なん)といふ作法知(さはふし)らずぢや、汝(おのれ)！

領主 暫時(しばらく)叫喚(けうくわん)の口(くち)を閉(と)ぢよ、先(ま)づ此(この)疑惑(ぎわく)を明(あきら)かにして其(そ)

の)源流(げんりう)を取調(とりしら)べん。然(しか)る後(のち)、われ將(は)た卿等(おんみら)の悲歎(なげき)を率(ひき)ゐて、敵(かたき)の命(いのち)をも取遣(とりつか)はさん。先(ま)づそれまでは悲歎(ひたん)を忍(しの)んで、此(この)不祥事(ふしやうじ)の吟味(ぎんみ)を主(しゆ)とせい。……嫌疑(けんぎ)の徒輩(ともがら)を引出(ひきだ)せ。

ロレ 手前(てまへ)こそは、力量(りきりやう)は最(いつ)ち不足(ふそく)ながら、時(とき)も處(ところ)も手前(てまへ)に不利(ふり)でござるゆゑ、此(この)怖(おそろ)しい殺人(ひとごろし)の第(だい)一番(ばん)の嫌疑者(けんぎしや)でござりませう。只今(ただいま)此處(これ)にて呪(のろ)はるべくもあり、恕(ゆる)

る) さるべくもある手前(てまへ)の所行(しよぎやう)を告發(こくはつ)もし、辯解(べんかい)も仕(つかまつ)りませう。

領主　さらば、汝(そち)が存(ぞん)じをる限(かぎ)りを疾(とく)く申(まう)せ。

ロレ　手短(てみじか)に申(まう)しませう、管(くだ)々(しう)申(まう)さうには命(いのち)が覺束(おぼつか)なうござりまする。……

そこにお死(し)にやつたるロミオこそはヂュリエットが正(ただ)しい夫(をと)と、またそこにお死(し)にやつたるヂュリエットこそはそのロミオが貞節(ていせつ)なる宿(やど)の妻(つま)、二人(ふたり)を嫁(めあは)したは手前(てまへ)。また二人(ふたり)が内祝言(ないしうげん)の日(ひ)はチツバルトどの、大厄日(だいやく)

じつ)、非業(ひごふ)の最期(さいご)が因(もと)となつて新婿(にいむこ)どには當市(たうし)お構(かま)ひの身(み)の上(うへ)となり、ヂュリエットどの、悲歎(ひたん)の種(たね)、さうとは知(し)らずチツバルトどのをお歎(なげ)きやるとのみ思召(おぼしめ)され、其(その)歎(なげき)を除(のぞ)かうとてパリスどのへ無理強(むりじ)ひの婚禮沙汰(こんれいざた)、其時(そのとき)姫(ひめ)が庵室(いほり)へわせられ、此(この)二度(ど)の祝言(しうげん)を脱(のが)るゝ手段(すべ)を教(をし)へてくれい、然(さ)なくば此處(こゝ)で自害(じがい)すると半狂亂(はんきやうらん)の面持(おもゝち)、是非(ぜひ)なく、自得(じとく)の法(はふ)により、眠劑(ねむりぐすり)を授(さづ)けましたところ、案(あん)の

如（ごと）くに效力（きゝめ）ありて、死（し）せるにひとしき其（その）容態（ようたい）、手前（てまへ）其間（そのあひだ）に書状（しよじやう）して、藥力（やくりき）の盡（つく）るは今宵（こよひ）、姫（ひめ）をば假（かり）の墓所（はかしよ）より、來（きた）りて救（すく）ひ出（だ）されよ、とロミオ方（かた）へ申（まう）し遣（や）りしに、使僧（しそう）デヨンと申（まう）す者（もの）、不慮（ふりよ）の事（こと）にて抑留（ひきと）められ、夜前（やぜん）其（その）書（しよ）を持歸（もちかへ）ってござりまするゆゑ、目覺（めざ）めなば嘸（さぞ）當惑（たうわく）、と姫（ひめ）を救（すく）ひ出（いだ）さんため、只（ただ）一人（ひとり）にて參（まゐ）りしは、窃（ひそか）に庵室（いほり）にかくまひおき、後日（ごじつ）機（をり）を見（み）て、ロミ

才へ送(おく)り届(とど)げん存念(ぞんねん)、然(しか)るに參(まゐ)り見(み)れば、姫(ひめ)の目覺(めざ)むる少(すこ)しき前方(まへかた)、非業(ひがふ)の最期(さいご)はパリスどのとロミオどの。其中(そのうち)、姫(ひめ)の目覺(めざ)め「#「目覺(めざ)め」は底本では「目覺(めざ)め」しゆゑ、天(てん)の爲(な)せる業(わざ)は是非(ぜひ)に及(およ)ばず、ともかく出(で)てござれ、と勸(すす)むるうちに、近(ちか)づく人聲(ひとごゑ)、予(われら)駭(おどろ)き逃出(にげい)でましたが、絶望(ぜつぼう)の餘(あ)まりにや、姫(ひめ)は續(つゞ)いて參(まゐ)りもせず、やがて自害(じがい)を致(いた)したと相見(あひみ)えます。手前(てまへ)が存(ぞん)じをりまするは是限(これぎ)り。内祝言(ないし



うげん)の儀(ぎ)は乳母(うば)が善(よ)う承知(しょうち)の筈(はず)。何事(なにごと)にまれ、予(われら)が不埒(ふらち)と御(ご)檢斷(ごけんだん)遊(あそ)ばれうならば、餘命(よめい)幾何(い)くばく)もなき老骨(らうこつ)、如何(いか)な御嚴刑(ごげんけい)にも處(しよ)せられませう。

領主 予(よ)は常(つね)に足下(おぬし)をば正(たゞ)しい僧(そう)と信(しん)じてをつたわ。……ロミオの僕(しもべ)は何處(い)ずこ)にをる? 彼(か)れは此儀(このぎ)に對(たい)して何(な)ん)と申(まう)すぞ?

バルタ 僕(わたくし)めは、ヂュリエット様(さま)お死去(しきよ)の事(こと)をば、マンチュアの主人方(しゅじんがた)へ傳(つた)

へましたるところ、主人（しゅじん）は直（すぐ）に驛馬（はやうま）にて、彼處（かしこ）から御廟所（ごべうしよ）まで參（まゐ）られ、墓（はか）へ入（はひ）られます前（まへ）に、此（この）書面（しよめん）を朝（あさ）早（はや）う親御様（おやごさま）へ渡（わた）してくださいと申（まう）され、速（すみや）かに此處（こゝ）を立去（たちさ）らずば殺（ころ）してしまふぞと嚇（おど）されました。

領主 其（その）書面（しよめん）見（み）ようわ。これへ。……して、夜番（よばん）を呼び（よびおこ）した伯（はく）の侍童（こわらは）とやらは何處（どこ）に居（を）る？……こりや「#」こりや「はママ」、其方（そち）の主人（しゅじん）は此處（このところ）へは何（なに）しに寄せたぞ？

侍童　御方（おんかた）の墓（はか）へ撒（まか）うとて花（はな）  
を持（も）ってわせられました。遠（とほ）くへ離（はな）れてゐいと  
仰（おほ）せられましたゆゑ、僕（わたくし）はさやう致（いた）しま  
した。やがて燈火（あかり）を持（も）った人（ひと）がわけて、墓（は  
か）を發（ひら）かうと爲（し）やしやるやいな、御主人（ごしゅじん）  
は劍（けん）を拔（ぬ）かされました。それで僕（わたくし）は走出  
（かけいだ）して夜番（よばん）の衆（しゅう）を呼（よ）びました。

領主　此（この）書面（しよめん）にて僧（そう）が申條（まうしでう）  
の證（あかり）は立（た）ったり、情事（じやうじ）の顛末（てんまつ）、  
女（をんな）が死去（しきよ）の報告（しらせ）また貧窮（ひんきう）  
なる藥種屋（やくしゅや）より毒藥（どくやく）を買求（かひもと）め

てそれを持參（じさん）し、此處（これ）なる女（をんな）の墓（はか）の中（なか）にて自殺（じさつ）なさん底意（そこい）まで、明白（めいはく）と相成（あひな）ったわ。……仇敵同士（かたきどうし）は何（い）づ（れ）にあるぞ？ カピューレット！ モンタギュー！……見（み）い、是（これ）皆（みな）汝等（おぬしたち）が相憎惡（にくみあひ）の懲罰（こらしめ）、天（てん）は故（わざ）と子供等（こどもら）を愛（あい）しあはせ、以（もつ）て汝等（おぬしら）が歡樂（よろこび）をば殺（ころ）させられたわ。予（われ）將（は）た汝等（おぬしら）の確執（な）かたがひ（を）等閑（なほざり）に視過（みすご）したる罪（つみ）によつて、近親（うから）を二人（ふたり）までも失（うしな）うた。御罰（ご）ばつ）に漏（も）れたる者（もの）はない。

カピ長 おゝ、モンタギューどの、御手（おんて）をば與（あた）へさせられい。これをこそ愛女（むすめ）への御結納（ごゆひなう）とも思（おも）ひまする、他（ほか）に望（のぞみ）としてはござらぬわい。

モン長 いや、こなたよりはまだ參（まゐ）らするものがおぢやる。吾等（われら）純金（じゅんきん）にて姫（ひめ）の像（ざう）を建（た）て申（まう）し、此（この）※（濁点付き片仮名エ、1-7-84）ローナが同（おな）じ呼名（よびな）で知（し）らるゝ限（かぎ）り、貞節（ていせつ）なヂュリエットどのゝ黄金（こがね）の像（ざう）をば上無（うへな）き記念（かたみ）と崇（あが）めさせん。

カピ長 女（むすめ）と並（なら）べてロミオどのゝ黄金（こがね）の像（ざう）をも建（た）て申（まう）そう、互（たが）ひの不和（ふわ）

の憫然（ふびん）な犠牲（いけにえ）！

領主　物悲（ものがな）しげなる靜（しづ）けさをば此（この）朝景  
色（あさげしき）が齋（もたら）する。日（ひ）も悲（かな）しみてか、  
面（おもて）を見（み）せぬわ。いざ、共（とも）に彼方（かなた）へ  
往（い）て、盡（つ）きぬ愁歎（なげき）を語（かた）り合（あ）はん。  
赦（ゆる）すべき者（もの）もあれば、罰（ばつ）すべき者（もの）も  
ある。哀（あは）れなる物語（ものがたり）は多（おほ）けれども、此  
（この）ロミオとヂュリエットの戀物語（こひものがたり）に優（まさ）  
るはないわい。

皆々（みな／＼）徐（しず）かに入る。

ロミオとジュリエット  
(完)

シェークスピア William Shakespeare

1564年4月26日(洗礼日) - 1616年4月23日)は、イギリス(イングランド)の劇作家、詩人。エリザベス朝演劇の代表的な作家で、最も優れた英文学の作家とも言われている。

坪内逍遙 つぼうちしょうよう

安政6年5月22日(1859年6月22日) - 昭和10年(1935年)2月28日)。明治に活躍した日本の小説家、評論家、翻訳家、劇作家。代表作に『小説神髓』『当世書生気質』およびシェイクスピア全集の翻訳がある。

# ロミオとジュリエット

## ROMEO AND JULIET

電子書籍登録日 2010年12月30日



**Kaedebooks.com**

カエデブックス

著者	シェークスピア
訳者	坪内逍遙 訳
収録	青空文庫 <a href="http://www.aozora.gr.jp/">http://www.aozora.gr.jp/</a>
電子書籍化	楓出版株式会社 <a href="http://kaedebooks.com">http://kaedebooks.com</a> 《作成 No.0008》

※スマートフォン用版下PDFとして制作しました。

※著作権消滅作品(PD)